

神戸学院大学心理学研究

第 4 卷 第 2 号

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2022 年 3 月 発行

神戸学院大学心理学部

神戸学院大学心理学研究 第4巻 第2号 目次

原著論文

- 他者の存在する場面における欺瞞の曖昧性が生理反応に及ぼす影響
神戸学院大学心理学部 黒川 優美子 57
神戸学院大学心理学部 秋山 学

研究報告

- オンライン実験プログラムを用いた反応変動性測定を試み
神戸学院大学心理学部 村井 佳比子 67
- 両側頭頂後頭葉病変により視覚性注意障害を呈した1例
神戸学院大学心理学部 小久保 香江 73
森之宮病院神経リハビリテーション研究部 畠中 めぐみ
森之宮病院神経リハビリテーション研究部 宮井 一郎
- 心の健康教育とメンタルヘルス・リテラシー
～「予備」のレトリックからフォーカシングを捉え直す～
神戸学院大学心理学部 岡村 心平 79

2021年度第2回心理学部学術講演会

- コロナ禍における学生の飲酒、ゲーム、SNSなどの嗜癖行動
兵庫教育大学大学院学校教育研究科 野田 哲朗 91

2021年度卒業論文題目一覧・優秀論文要旨 109

2021年度修士論文要旨 123

2021年度博士論文要旨

- 人間文化学研究科人間行動論専攻行動発達論講座 堤 聖月 135

2021年度 活動報告 139

他者の存在する場面における 欺瞞の曖昧性が生理反応に及ぼす影響

黒川 優美子 神戸学院大学心理学部 秋山 学 神戸学院大学心理学部

Effects of ambiguity of deception on physiological response in situations where others are present

Yumiko KUROKAWA (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

Manabu AKIYAMA (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

欺瞞は私たちの日常にありふれた現象であり、時として欺瞞であると意図せず欺瞞を行うこともある。これまで黒川・秋山（2020）において、行為者にとって欺瞞かどうかが明確に認識できない意図の曖昧な欺瞞と意図の明確な欺瞞を行動反応から検討している。本研究では、黒川・秋山（2020）で分析されていない生理指標に着目し、検討を行った。この際、他者に対して意図の明確な欺瞞、意図の曖昧な欺瞞、もしくは正確な反応を行うかどうかを行為者自身が選択可能な欺瞞誘発課題を参加者に行わせ、欺瞞を行った際の心拍率（以下、HR）を測定した。その結果、意図の明確な欺瞞において欺瞞後、初期の段階においてHRの減速が見られ、これは特に欺瞞回数を重ねるごとに顕著であった。一方で、意図の曖昧な欺瞞は課題を通してHRに変化は見られなかった。同様の課題を用いて行動反応を検討した黒川・秋山（2020）の研究と併せて、繰り返し欺瞞を行うごとに意図の明確な欺瞞が拡大することが示唆された。

キーワード：欺瞞、曖昧性、心拍率、送り手受け手課題、非倫理的行動

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2022, Vol.4, No.2, pp.57-66

1. 問題と目的

1-1 本研究における欺瞞の定義

嘘はきわめて日常的な現象であり、嘘の研究はこれまで数多く行われてきている（菊地・佐藤・阿部・仁平，2007）。一般的に嘘は、事実ではないことと定義され、虚偽性に焦点が当てられている。心理学に

おいては、嘘をつくかどうかといった「意図性」と、真実ではないという「虚偽性」の2つが合わさったものが嘘と定義されることが多い（Table. 1）。つまり、嘘は他者に対して事実ではないことを述べるという虚偽性、かつ意図性を伴う行為と定義される（Vrij, 2008 太幡・佐藤・菊地訳 2016）。

さらに嘘は、利他的嘘と利己的嘘に分けられる。利他的嘘は、相手を傷つけないことを目的とする一

Table. 1 虚偽性と意図性の関係（菊地，2021 出典）

		意図性	
		相手をだます意図なし	相手をだます意図あり
虚偽性	情報が正確	真実	嘘
	情報が不正確	誤り	嘘

※ Table. 1 の「虚偽性」は本研究に即した表記であり、菊地（2021）では「真偽性」となっている

方、利己的嘘は、たとえ相手を傷つけても自らの利益のために行う嘘を指す。このように、両者は異なる性質を持った嘘であるため、どちらの嘘を取り扱うのかを明確にしておく必要がある。一般的には、利他的嘘よりも利己的嘘の方が日常的であると考えられており（菊地・佐藤・阿部・仁平, 2008）、利己的嘘では他者との信頼関係を揺るがしかねないといった他者との関係に与える影響も考えられる。このため、本研究においては、利他的よりも利己的嘘を取り扱う。

以上のように、心理学においては、嘘の定義として意図性と虚偽性を含むことが多い。しかし、それ以外の要素については、はっきりとしていない。このため、各研究においてそれぞれ取り扱う嘘を設定していることが多い（Masip, Garrido, & Herrero, 2004; Vrij, 2008 太幡・佐藤・菊地訳 2016）。本研究においても、嘘の定義として虚偽性と意図性を含めつつ、特に利己的嘘に焦点を当てる。具体的には、本研究において嘘を「嘘の送り手が虚偽であると理解していながら、自身の利益のために意図的に受け手に誤った情報を抱かせようとする行為」と定義する。なお、このような嘘を他の嘘と区別するため、本研究においては欺瞞と述べる。

1-2 欺瞞の意図性

以上を踏まえ、本研究では、Table. 1 における「虚偽性：不正確な情報」、かつ「意図性：相手をだます意図あり」の利己的欺瞞を取り扱う。しかし、人は常に明確な意図を持って欺瞞を行うばかりではない。つまり、「意図の明確な欺瞞」だけではなく、自身の行為が欺瞞か誤りかが不明瞭な欺瞞を行うこともある（Fig. 1）。本研究では、このような欺瞞の行為者自身にとっても、当該行為が欺瞞か誤りかが確信の持てない曖昧な状況において、行為者自身が欺瞞であるかどうか曖昧なまま行う欺瞞を「意図の曖昧な欺瞞」と呼ぶ。

そして、このような意図の曖昧な欺瞞と意図の明確な欺瞞を包括的に検討することが本研究の目的である。このため、本研究では行為者自身が選択可能な欺瞞誘発課題を実施することで、欺瞞を包括的に検討する。

欺瞞を行う際、欺瞞の行為者だけではなく、欺瞞を行われる者に欺瞞と推測されるかどうかも重要である。このような欺瞞の行為者と欺瞞を行われる者を想定した課題は、送り手・受け手課題（sender-receiver game; Gneezy, 2005）と呼ばれ、このような課題をベースとした欺瞞誘発課題がある（Garrett, Lazzaro, Ariely, & Sharot., 2016）。黒川・秋山（2020）は、Garrettら（2016）の課題から着想を得た欺瞞誘発課題を用いて、行動反応、つまり欺瞞の頻度や間隔を検討した。黒川・秋山（2020）の欺瞞誘発課題では、欺瞞を行う実験参加者 A（助言者）が、呈示刺激の総数を実験参加者 B（推測者）に助言し、推測者がその助言をもとに最終的な刺激総数を実験者に報告した。本研究では、この黒川・秋山（2020）で分析されなかった生理指標データを取り扱い、行動反応だけではなく生理反応から意図の明確な欺瞞や意図の曖昧な欺瞞を検討する。

1-3 欺瞞行為と生理反応

生理指標はさまざまな研究で用いられており、生理指標は、「言語報告や行動とは異なり被検査者によるコントロールが困難なため、顕在化していない心の動きを探るのに適している」（野瀬, 2013, p.108）。特に、欺瞞のように他者に露呈することを恐れ、顕在化しないようにすることを目的とした行為に対しても、生理指標は有効であると考えられる。

生理指標は、大きく分けて中枢神経系と末梢神経系の 2 つに分類することができる。中枢神経系の生理指標では、脳波、fMRI（機能的磁気共鳴画像法）などがあり、末梢神経系の生理指標では、心電図、呼吸、皮膚コンダクタンスなどがある。特に、

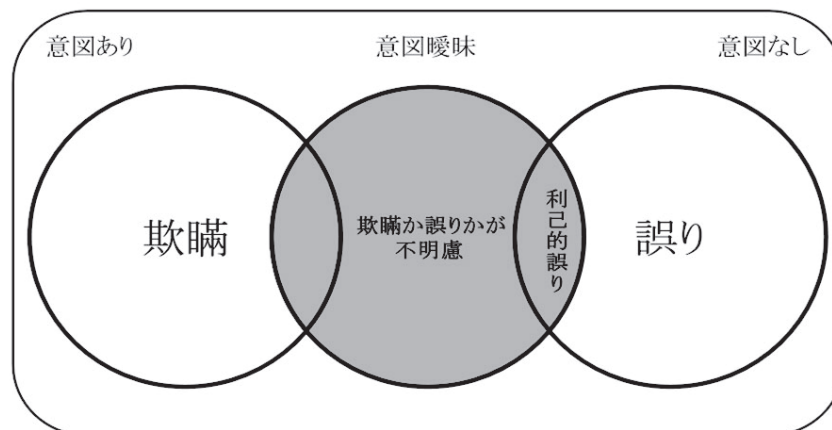


Fig. 1 本研究で取り扱う部分

Garrettら(2016)は、繰り返しの欺瞞により、扁桃体の反応が抑制されることを明らかにしている。このように、繰り返し欺瞞を行うことで、生理反応に影響を及ぼすことが示唆されているが、これらは中枢神経系の生理指標が多く、道徳的ジレンマの生じる場面で末梢神経系の生理指標を検討した研究は稀である(Gu, Zhong, & Page-Gould, 2013)。また、末梢神経系の生理指標は、測定器具の装着が簡便であり、日本の犯罪捜査場面において、容疑者の記憶検査などにも用いられていることから、欺瞞の行為者を対象に末梢神経系の生理指標による測定を行うことは意義深い。このため、本研究では末梢神経系の生理指標に焦点を当てて検討を行う。

本研究のような送り手・受け手課題に即した課題である最後通牒ゲーム(ultimatum game)を用いて、末梢神経系の生理指標を検討した研究がある(Osumi & Ohira, 2009)。Osumi & Ohira(2009)は、最後通牒ゲームを使用し、意思決定場面における末梢神経系の生理指標である心拍(Heart Rate; 以下、HR)を用いて検討している。最後通牒ゲームは、分配者と受領者が存在し、分配者が分配したお金を受領者が受け取るかどうかを決定するゲームである。具体的に、分配者が1000円を与えられたとする。分配者は、自由に1000円から受領者に対する分配金を決定することができるため、300円を受領者に、700円を分配者にとという形で分配することも可能である。一方で、受領者に交渉の余地はないが、分配の金額によっては受け取りを拒否することが可能である。このとき、受領者が受け取りを拒否すれば分配は成立せず、両者ともに何も獲得できずに終わる。このような最後通牒ゲームにおいて、Osumi & Ohira(2009)は、受領者が提案を拒否する原因となる不公平感を調べるために、HRを測定している。その結果、不利な分配が呈示され、受領者がその分配を拒否した場合、不利な分配の呈示の1～1.5秒後にHRの減速がみられた。

Osumi & Ohira(2009)は、本研究のように送り手・受け手課題の枠組み沿った最後通牒ゲームを行っている点から、ゲーム理論的な枠組みは本研究とも類似している。ただし、Osumi & Ohira(2009)と本研究では、受け手と送り手の利益、そして真実性の点で異なる。まず、Osumi & Ohira(2009)では、分配者の配分次第では、受領者が拒否をし、分配者と受領者の双方に利益が及ばないという点で、双方にとって不利益な状況を設定している。また、分配者は自身の決定した配分について受領者に真実と異なることを伝える必要がない。一方で、本研究では、受け手にとって不利益ではあるものの、送り手にとっては利益となる状況を設定しており、送り手が自己利益のために真実と異なることを受け手に伝えることが可能である。最後に、Osumi & Ohira(2009)では、生理指標の測定対象を提案の受け手、つまり受領者

としているが、本研究で取り扱うのは、欺瞞の送り手であり、研究対象が異なる。

これまで、最後通牒ゲームも含め、送り手(最後通牒ゲームの場合は担当者)の生理指標を測定した研究は少ない。これは、受け手(最後通牒ゲームであれば受領者)と送り手で反応する内容が異なるためと考えられる。受け手は送り手から与えられたメッセージをもとに受諾と拒否を選択すれば良いため、受け手の生理反応は受諾あるいは拒否に対する反応であると理解できる。しかし、送り手は受け手にどのような内容を提案するか、また提案を実際に受け手に伝えるかを考慮する必要がある。このため、受け手のような受諾もしくは拒否という二分法には収まり切れない複雑さが送り手の生理指標に含まれることから、仮に送り手にも受け手と同様の生理反応が出現したとしても何に対する生理反応なのか理解が困難となる。このため、これまで送り手の生理指標を測定した研究が少ないと考えられる。

送り手・受け手課題ではないものの、利益を得るために欺瞞を行うことを動機づけられた送り手の末梢神経系の生理指標を測定するポリグラフ検査が、犯罪捜査場面において行われている。この検査では、日本独自のCITと呼ばれる質問方法を用いて、容疑者の記憶を検査している。使用される生理指標は、呼吸、HR、皮膚コンダクタンス、規準化脈波容積である。一般的に被検査者が真実と異なる回答を行う場合、HRや規準化脈波容積の減速や皮膚コンダクタンス反応の上昇、そして呼吸運動の減少が見られる(例:小川,松田,常岡,2019; Klein Selle, Agari, & Ben-Shakhar, 2019)。このように、送り手を対象に検討を行っている研究においても、Osumi & Ohira(2009)のようにHRの減速が見られることが分かっている。

以上のことから、送り手であっても受け手であってもHRが減速する可能性がある。このようなHRの減速は、注意の一指標としても考えられており(Andreassi, 2007 今井訳2012)、送り手や受け手の刺激に対する注意の結果ではないかと考えられる。さらに、視覚的注意を伴う課題においてHRは上昇しにくいことから(長野, 2017)、本研究のような欺瞞誘発課題においてもHRの減速が考えられる。そこで本研究では、意図の明確な欺瞞と曖昧な欺瞞においてどのようなHRの変化が見られるかを検討し、その上で意図の明確な欺瞞と曖昧な欺瞞でHR減速の有無を通して探索的に検討を行う。

1-4 本研究で使用する欺瞞誘発課題

本研究では、黒川・秋山(2020)と同様の欺瞞誘発課題を用いた。この課題では、欺瞞を行う助言者が、呈示されたドット刺激におけるドット数を推測者に助言し、推測者がその助言をもとに最終的なドット数を実験者に報告するという課題である(実際に

呈示されたドット刺激は Fig. 2 の b を参照)。この際、助言者は、実際のドット数よりも多めのドット数を推測者に助言し、推測者がその助言を信じて実験者に報告した場合、助言者のみに倍の報酬が与えられるという、利己的欺瞞を行うことができる状況であった。さらに、推測者はドット刺激を瞬間的にしか呈示されないため、助言が必要であると助言者にも教示されていた。このことから、助言者にとって欺瞞が行いやすい状況であった。この課題は、呈示されるドット数からどの程度過剰に助言するかによって、意図の明確な欺瞞となる助言、意図の曖昧な欺瞞となる助言、あるいは正確な助言を助言者が選択可能であった。

結果として、黒川・秋山 (2020) では、意図の曖昧な欺瞞は課題を通して一定の出現率を維持しており、これにより欺瞞に慣れが生じた結果、意図の明確な欺瞞が行われやすくなったことが示唆された。なお、この課題においては、高い正当反応が確認されていることから、過剰な助言は単なる誤りだけではなく、明確な意図を伴う欺瞞も含まれると考えられる。

すなわち、課題を通して、意図の明確な欺瞞よりも意図の曖昧な欺瞞の出現率が高かったが、出現率は課題を通して一定であった。一方で、明確反応では、課題の前半 (第 1～3 ブロック) よりも後半 (第 4～6 ブロック) において欺瞞の出現率が高い傾向にあり、欺瞞の回数を重ねるごとに欺瞞の出現間隔も短くなっていった。具体的には、欺瞞回数 1～5 回

目よりも、欺瞞回数 6～10 回目にかけて、欺瞞の出現間隔が徐々に短くなっていった。つまり、欺瞞を繰り返すごとに、間隔を空けずに欺瞞を繰り返すようになったことが言える。

1-5 本研究の目的と仮説

本研究では、欺瞞行為者が意図の明確な欺瞞あるいは曖昧な欺瞞のどちらを行うかが選択可能な欺瞞誘発課題を用いて、意図の明確な欺瞞と曖昧な欺瞞においてどのような HR の変化が見られるかを検討する。

また、欺瞞回数 1～5 回目よりも 6～10 回目にかけて欺瞞の出現間隔が短くなるという結果から (黒川・秋山, 2020)、欺瞞の前半と後半では、助言者にとって欺瞞を行うことに対する認識が異なっていることが考えられる。そこで、欺瞞回数の増加に伴い HR に変化が見られるかについても検討する。

その際、本研究では、以下の仮説を立てる。まず、本研究において、欺瞞を行うことは行為者にとって注意を伴う行為であることから、欺瞞を行った後、初期の段階で HR の減速が起こると予測する (仮説 1)。この際、意図の曖昧な欺瞞においては、欺瞞の行為者が欺瞞であることをはっきりと認識しない程度のものであるため、生理反応においても意図の曖昧な欺瞞ほど顕著な反応は見られないと予測する (仮説 2)。最後に、欺瞞の回数を経るごとに、課題の理解に向けられていた注意が、徐々に課題を理解する

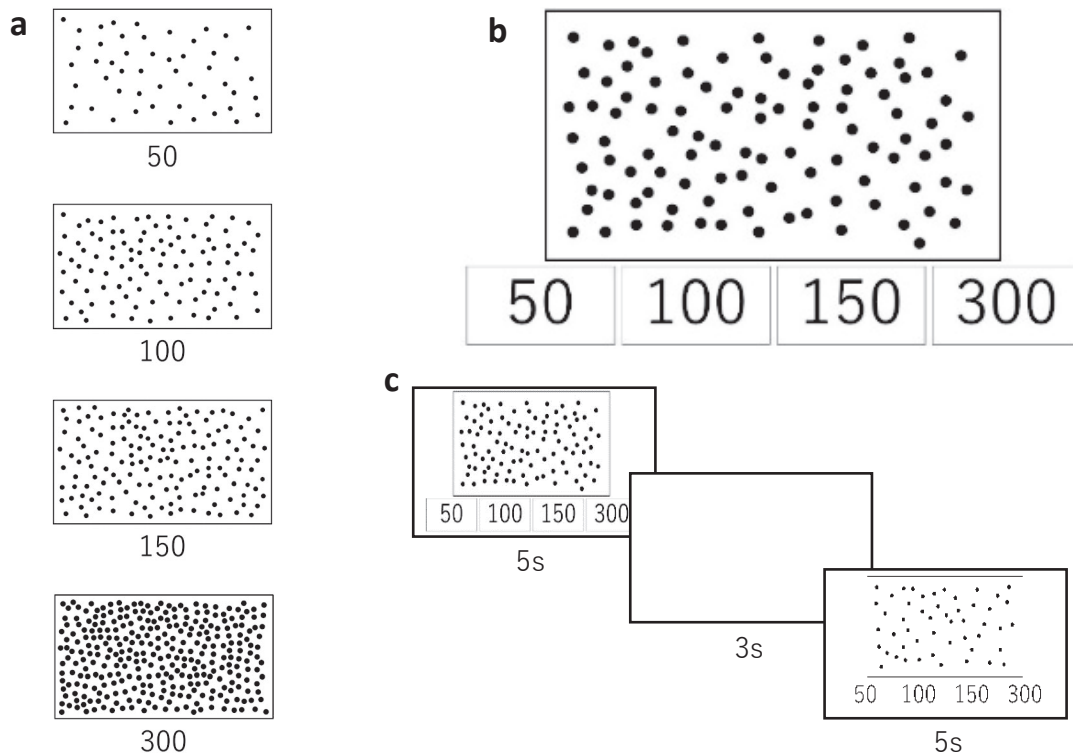


Fig. 2 ドットの見本と手続き。

(a) 提示した 4 種類のドット刺激 (下の数字がドットの数)。 (b) 本番段階の例。 (c) 課題の手続き。

ことで欺瞞を行っている自身を認識しやすくなると考えられる。その結果、HRが減速するであろう（仮説3）。

2. 方法

2-1 参加者

本研究では、黒川・秋山（2020）にて測定されていた生理指標のデータを用いて検討を行った。このため、黒川・秋山（2020）と同様に、参加者は、男女大学生26名（男性15名、女性11名、平均年齢19.2歳、SD = 1.14）であった。

2-2 欺瞞誘発課題

本課題は、黒川・秋山（2020）と同様に、実験参加者は助言者として推測者役のもう1人の参加者に助言を行う課題であった。なお、推測者役のもう1人の参加者は実験者の協力者であった。参加者に推測者を本物の参加者だと信じ込ませるため、推測者への教示は助言者である実験参加者にも聞こえるように行った。推測者への教示後に、実験参加者に以下の教示を行った。これからいくつかのドットが含まれる長方形が画面上に5秒間呈示されること、そのドット数を実験参加者が推測者に助言する課題であること、助言は刺激が呈示されている5秒間に行うこと、推測者は同じ刺激を0.5秒だけしか見ることができないため、実験参加者の助言が必要となること、ドットは50、100、150、300個の4種類のみであることを伝え、どのようなドット刺激が呈示されるのかを例示した。そして、実験参加者の助言を参考にして、推測者はドット数を推定し、最終的なドット数を実験者に報告すること、そして、それが正確であった場合に両者に5円ずつ報酬を与えること、もし実験参加者が実際の数よりも大きい数を推測者に助言し、その結果、推測者がその助言と同じドット数を実験者に報告した場合、助言者にのみ2倍の10円の報酬を与えることも伝えた。

2-3 手続き

実験参加者は、推測者を演じるもう1人の参加者と対面後、それぞれ別室に案内された。課題の概要を伝えた後に実験参加者から同意を得た。なお、本研究では、生理指標として眼球運動と自律神経系の反応を測定するため、参加者に心電図の電極を装着した上で、課題に取り組むことを求めた。ただし、本研究では眼球運動のデータは用いない。

課題の説明後、ドット数を弁別できるように、実験参加者にドットとその個数を、3回ずつ順番を変えて5秒間呈示した（弁別段階；Fig. 2a）。その後、

本番段階では、ドットとともに50、100、150、300個の4つの選択肢を呈示し（Fig. 2b）、呈示されているドット数が50個なら1、100個なら2、150個なら3、300個なら4のボタンを押すように教示した。本番段階では、ドット刺激を5秒間呈示し、呈示終了から3秒後に次の刺激を呈示した（Fig. 2c）。本番段階は、20試行（4種類のドット×5試行）を1ブロックとし、6ブロックの120試行（4種類のドット×30試行）を行わせた。そして、ブロックが終わるごとに1分間の休憩をはさんだ。休憩時間には実験参加者に、当該ブロックまでに獲得している累積報酬金額（実際の参加者の助言に応じて、「2-2. 欺瞞誘発課題」に記載した報酬金額を足し合わせた金額）を口頭で伝えた。120試行実施後、実験参加者に本研究のデブリーフィングを行い、一律の謝礼を支払ってから実験終了とした。

2-4 生理指標

本研究では生理指標として、HRを用いた。本研究では、キー押しを行わせ、かつ眼球運動測定のために顎のせ台を使用したことから、比較的動きの少ない後頸部2か所と左足首1か所にディスプレイ電極（PPS-EDA, TEAC）を装着し、心電図アンブレモジュール（ECG100C, BIOPAC）を介して心電図（Electrocardiogram : ECG）を測定した。心電図アンブレモジュールでは、基線変動除去のため0.05Hzのハイパスフィルタを使用し、さらにノイズ除去のため、150Hzのローパスフィルタを用いた。ECG100C測定された心電図の連続するR波間隔から1分間の拍動回数を算出し、HRとして分析に使用した。

2-5 データ処理

本研究では、黒川・秋山（2020）にて測定されていた生理指標のデータを用いて検討を行った。

2-5-1 行動反応

呈示されるドット数と助言者役の実験参加者の助言との対応関係に基づいて、得られた反応を以下の4種類に分類した。すなわち、明確な欺瞞反応、曖昧な欺瞞反応、過少反応、そして正当反応である（Table. 2）。明確な欺瞞反応（以下、明確反応）は、実際に呈示されたドット数よりも2倍以上の数のドットを助言した反応のことを指す。曖昧な欺瞞反応（以下、曖昧反応）は、ドット100個のときに150個と助言するといったように、明確反応まではいかないまでも過大なドット数を助言した反応を指す。過少反応は、刺激に関わらず実際よりも過少に助言した場合を指す。そして、呈示されたドット数を正確に助言した場合を正当反応とした。このように参加者の反応を分類した上で、明確反応と曖昧反応のそれぞれ

の出現率、推移、反応が出現するまでの試行回数（以下、欺瞞反応出現間隔）について検討した。

2-5-2 生理反応

欺瞞行為前後の HR 変化を比較するため、欺瞞行為前、つまりボタン押し前 0.5 秒から、欺瞞行為後、つまりボタン押し後 5 秒をデータとして算出した。HR の個人差を考慮するため、ボタン押し前の 0.5 秒を参加者のベースラインとし、ボタン押し後に HR がベースラインからどのくらい変化したかを、個人内で平均化したものをデータとした。この変化量について、ドットを正確に回答した正当条件と曖昧条件、そして明確条件のそれぞれで算出し、HR の変化とした。

また、本研究では欺瞞回数 1～5 回目よりも 6～10 回目にかけて欺瞞の出現間隔が短くなるという結果に基づき（黒川・秋山, 2020）、欺瞞回数ごとの HR 変化を算出した。この際、明確条件、曖昧条件のどちらか、もしくは両方で欺瞞を 7 回以上行った参加者データのみを使用した。これは、7 回以上欺瞞を行った参加者において、欺瞞の間隔がより短くなるためである。また、1～5 回目の欺瞞時の HR 変化量と、6～10 回目の欺瞞時の HR 変化量を個人内で平均化し、データとした。なお、欺瞞 6～10 回目の

HR 変化量については、欺瞞を 7 回以上行った参加者のデータを取り扱っているため、欺瞞 6、7 回目の HR 変化量を平均化したデータ、6～8 回目の HR 変化量を平均化したデータ、6～9 回目の HR 変化量を平均化したデータ、6～10 回目の変化量を平均化したデータが存在する。

3. 結果

3-1 HR の変化

HR の変化について、Fig. 3 に示す。Fig. 3 における「Base」は、ベースラインとなるため 0 になっており、Base からどの程度、変化しているかの HR 変化量が 0.5 秒から 5.0 秒まで示されている。

さらに、HR の変化量について、条件（曖昧、明確）×時間経過（Base, 0.5, 1.0, 1.5, 2.0, 2.5, 3.0, 3.5, 4.0, 4.5, 5.0）の 2 要因の参加者内分散分析を行った。その結果、条件と時間経過の主効果が有意であった（条件： $F(1, 25) = 9.30, p < .01$ ；時間経過： $F(10, 250) = 11.98, p < .001$ ）。条件については、曖昧よりも明確条件において、有意に HR が減速していた（ $p < .01$ ）。このため、多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ、時間経過について Base から 2.5, 3.0, 3.5, 4.0 秒の間（それぞれ $p < .05, .01, .01, .05$ ）、0.5 秒から 1.0, 1.5, 2.0, 2.5, 3.0, 3.5, 4.0, 4.5 秒の間（1.0-4.0 秒は $p < .01$, 4.5 秒のみ $p < .05$ ）、1.0 秒から 1.5, 2.0, 2.5, 3.0, 3.5 秒の間（1.5-3.0 秒は $p < .01$, 3.5 秒のみ $p < .05$ ）、1.5 秒から 2.0, 2.5 秒の間（ $p < .05$ ）で有意差がみられた。また、条件×時間経過の交互作用が有意であった。このため、単純主効果検定を行ったところ、0.5, 1.5, 2.0 秒（ $p < .05$ ）と 2.5-5.0 秒（ $p < .01$ ）において有意な低下が明確条件においてみられ、1.0 秒においては有意傾向がみられた（ $p = .067$ ）。

Table. 2 呈示刺激と助言ごとの反応分類

		助言			
		50	100	150	300
呈示	50	正当	明確	明確	明確
	100	過少	正当	曖昧	明確
	150	過少	過少	正当	明確
	300	過少	過少	過少	正当

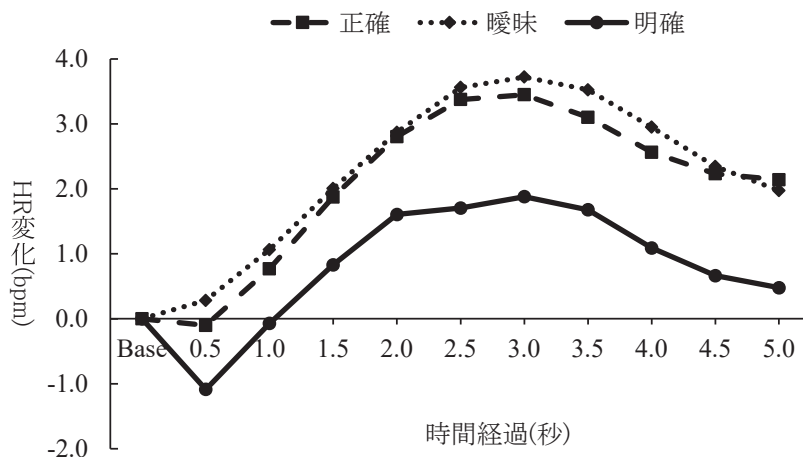


Fig. 3 刺激提示前とボタン押し後の HR 変化

3-2 欺瞞回数ごとのHR変化

次に欺瞞回数によってHRがどのように変化するかを検討するため、欺瞞回数5回目まで欺瞞前半、6～10回目を欺瞞後半とし、HR変化を算出した (Fig. 4, 5)。

明確条件、曖昧条件のどちらか、もしくは両方で欺瞞を7回以上行った参加者データのみを使用した。明確条件では7回欺瞞を行った者が18名、曖昧条件では7回欺瞞を行った者が16名であった。なお、明確反応を7回以上したが、曖昧反応は7回未満であったり、明確反応は7回未満であるが、曖昧反応を7回以上行った者もいたため、この18名と16名には重複する者もいれば、明確反応と曖昧反応のどちらかだけ行った参加者もいた。

条件 (明確前半, 明確後半, 曖昧前半, 曖昧後半) × 時間経過 (Base, 0.5, 1.0, 1.5, 2.0, 2.5, 3.0, 3.5, 4.0, 4.5, 5.0) の混合計画の分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意傾向 ($F(3, 66) = 2.24, p = .09, \text{偏}\eta^2 = .09$), 時間経過の主効果 ($F(10, 660) = 14.52, p < .001, \text{偏}\eta^2 = .18$) が有意であった。交互作用は有

意ではなかったものの、仮説に従い、時間経過の単純主効果検定を行ったところ、0.5秒において明確前半 ($M = 0.8, SD = 0.82$) と明確後半 ($M = -1.4, SD = 0.82$) において有意傾向が見られた ($t(726) = 1.87, p = .06, d = 2.08$)。また、明確後半 ($M = -1.4, SD = 0.82$) と曖昧前半 ($M = 1.5, SD = 0.84$), 明確後半 ($M = -1.4, SD = 0.82$) と曖昧後半 ($M = 1.0, SD = 0.84$) の間に有意差がみられた (明確後半 - 曖昧前半: $t(726) = 2.45, p < .05, d = 2.80$; 明確後半 - 曖昧後半: $t(726) = 2.07, p < .05, d = 2.32$)。

以上のように、明確条件においては欺瞞回数5回目までよりも、6～10回目の0.5秒において減速がみられた。つまり、欺瞞を行うほどにHRの減速がみられるということである。一方で、曖昧条件においては欺瞞回数5回目と6～10回目において大差はなく、欺瞞を経ても変化しにくいことが示唆された。

4. 考察

本研究では、末梢神経系の生理指標であるHRを測定し、意図の明確な欺瞞と曖昧な欺瞞における生

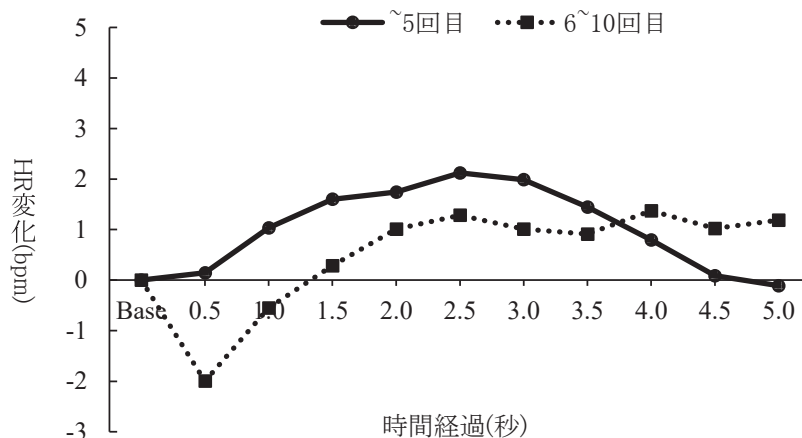


Fig. 4 欺瞞回数とHR変化 (明確条件)

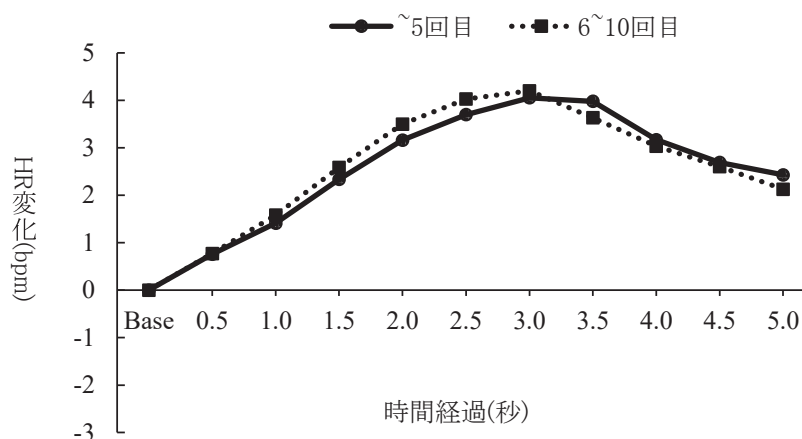


Fig. 5 欺瞞回数とHR変化 (曖昧条件)

理的变化の検討を行った。

その結果、欺瞞前よりも欺瞞後 0.5 秒で有意な減速がみられたことから、欺瞞を行った後、初期の段階で HR が減速するという仮説 1 を支持する結果になったと言える。特に、意図の明確な欺瞞では欺瞞後 0.5 秒で、意図の曖昧な欺瞞よりも有意な低下がみられた。この結果から、意図の明確な欺瞞を行う場合には HR にも影響を及ぼすが、意図の曖昧な欺瞞の場合、正確に助言した、つまり正直な助言と HR 変化量が変わらないことから、生理的にみても参加者自身が欺瞞行為であることを意識しにくいことが示唆された。これは、意図の曖昧な欺瞞においては、生理反応においても意図の曖昧な欺瞞ほど顕著な反応は見られないという仮説 2 を支持する結果であった。

また、欺瞞を繰り返すごとに HR が変化するかを検討するため、明確条件の欺瞞回数を 5 回目までと 6～10 回目で比較した。その結果、欺瞞回数 5 回目までよりも、6～10 回目において欺瞞後 0.5 秒で HR の減速がみられた。つまり、欺瞞の回数が増えるにつれて、欺瞞後、初期の段階で HR の減速がみられたということである。一方で、曖昧条件では、明確条件と同様の結果は見られなかった。これは欺瞞の回数を経るごとに、課題の理解に向けられていた注意が、徐々に課題を理解することで欺瞞を行っている自身を認識しやすくなるため、結果として HR の減速が大きくなるという仮説 3 を支持する結果であった。HR の減速が注意を反映することを鑑みた場合、これは、欺瞞を繰り返すごとで、自身の欺瞞に対する注意が顕著になったことを示唆する。つまり、人々は自身の欺瞞行為に徐々に注意を向け、その結果、HR の減速が欺瞞を繰り返すごとに顕著になったということである。ただし、本研究において、参加者が課題を経るにつれて、実際にどの程度自身の欺瞞に注意を向けていたかについて確認していないため、今後も検討の余地がある。

以上のことから、本研究では、意図の明確な欺瞞後、初期の段階における顕著な HR の減速を示した。これは、欺瞞の回数を重ねるごとにより顕著となった。この結果から、人々は意図の明確な欺瞞を繰り返すごとに、自身の欺瞞に気づきやすくなったのではないかと考えられる。自己概念維持理論 (Theory of Self-Concept Maintenance; Mazar, Amir, & Ariely., 2008) によれば、人々は自身を正直と見なせる程度の欺瞞しか行わないとされている。このため、もし自身の欺瞞に気づきやすくなったのであれば、個人内に矛盾が生じることが考えられる。しかし、人々が自身を正直ではないと気づきつつ、欺瞞を繰り返していることから、自身の欺瞞行為に対するハードルが下がったのではないかと考えられる。さらに、生理反応にも上らない無意識下で欺瞞かどうか曖昧ではあるが、自己利益となる意図の曖昧な欺瞞を行う

ことで、より欺瞞に対するハードルが下がったことが考えられる。これを裏付けるように、黒川・秋山 (2020) のような行動反応を検討した研究においても、意図の曖昧な欺瞞は意図の明確な欺瞞よりも、課題を通して一定数行われており、これによって意図の明確な欺瞞が徐々に拡大した可能性を示唆した。意図の曖昧な欺瞞により、徐々に意図の明確な欺瞞のハードルが下がるといった現象を、滑りやすい坂道効果 (Slippery Slope effect) に当てはめて考えることができる。つまり、時間経過とともに小さな無責任行為から、より大きな非倫理的行動を徐々に犯しやすくなったということである (Gino & Bazerman, 2009; Welsh, Ordóñez, Snyder, & Christian., 2015)。この滑りやすい坂道効果が起こる背景として、繰り返される軽率な行動により道徳的関心が薄れるということが挙げられる。

欺瞞抑制における可視性

私たちが道徳的関心を取り戻し、欺瞞を抑制させるためにはどのような方法が考えられるであろうか。欺瞞を抑制するための大きな要因の 1 つが、他者からどのように評価されているか、といった評判である。評判の効果は、最後通牒ゲームや独裁者ゲームなどのゲームを用いた協力や信頼の研究で議論されている。最後通牒ゲームは、受取人が配当者によって提示された配当金額を受け取るかどうかを決定できるのに対し、独裁者ゲームでは受取人は配当金額がどんなに不服でも断ることができないゲームである。どちらのゲームにおいても、プレイヤーが 2 人存在し、一方のプレイヤーである配当者がどの程度の配当金を受取人に配当するかが協力行動の指標となる。特に、「見られていること」によって他者からの評判を気にするようになり、その結果、協力行動が促進されることが分かっている (小林, 2021)。つまり、評判の効果を高めるためには、「見られている」という可視性を高めることが重要と言える。

協力行動を促進することは、ある意味では欺瞞を抑制することと同じである。特に、本研究のような欺瞞を行おうと思えば行える状況、かつ欺瞞を行うことで自己利益になる状況において、欺瞞を行わないことは、他者に損失を与えないという協力行動でもあると言える。このため、協力行動と同様に、欺瞞の抑制においても「見られている」ことは大きな抑制要因となっている (Schild, Heck, Ścigała, & Zettler., 2019)。欺瞞を抑制する要因として、「REVISE(REminding, VIvisibility, SElf-engagement; Ayal, Gino, Barkan, & Ariely., 2015)」が提唱されている。「REminding (リマインド)」は、「道徳の顕著性を高め、不正行為を正当化する能力を低下させる微妙な手掛かりの有効性」を指し、「SElf-engagement (セルフエンゲージメント)」は、「肯定的自己像を維持する動

機づけを高め、道徳的に行動するための個人的なコミットメントを生み出す」ことであり、「Visibility (以下；可視性)」は、「社会的な監視の手掛かりを意味し、匿名性を制限し、仲間の監視を促し、責任ある規範を引き出すことを目的としている」(Ayal et al., 2015)。また、可視性は、自身が他者から見られている、あるいは識別されているという気持ちを高めることで有効性を発揮する (Ayal et al., 2015)。このREVISEをもとに、Schildら (2019) は、実際に欺瞞を抑制できるかどうかを調査した結果、可視性において、実際に欺瞞の抑制が見られた。

このような欺瞞の抑制は、欺瞞によってもたらされる社会的不利益に対する政策介入において大いに役立つことが示唆される。例えば、研究不正のような欺瞞においても、近年では研究計画の事前登録の流れが生まれてきている。このような事前登録の仕組みを設けることで、実験や調査を行ったあとの過程を可視化可能となり、研究不正の抑制となる。しかし、このような対策にはコストがかかることが示唆される。事前登録というコストが、実際に行われるであろう研究数にどの程度影響を及ぼすかは未知数である。この大きな課題に向け、今後も検討を重ねていくことが不可欠であろう。

今後の課題

以下、本研究の課題を述べる。本研究では、欺瞞の受け手からも欺瞞かどうか曖昧な状況を設定していたが、実際の実験場面では欺瞞の受け手がどのように行為者の欺瞞を認識していたかまでは検討していない。Rutschmann & Wiegmann (2017) では、行為者側に騙す意図がなくとも、欺瞞は間違っていると他者から認識されることが示されている。つまり、欺瞞を行われる者にとっては、それが欺瞞であると認識された時点で、行為者の意図性に関わらず、その行為が欺瞞であり、道徳的に誤っていると認識されるということである。本研究では、欺瞞の意図性を操作し、意図の明確な欺瞞と曖昧な欺瞞を設定した。しかし、より精緻に欺瞞を検討するためには、受け手から実際にどのように欺瞞が捉えられているのか、受け手の目線で検討する必要があると考えられる。

利益相反の開示

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

Ayal, S., Gino, F., Barkan, R., & Ariely, D. (2015). Three

- principles to REVISE people's unethical behavior. *Perspectives on Psychological Science*, 10, 738-741.
- Andreassi, J. L. (2007). *Psychophysiology: Human behavior and physiological response* (5th ed.). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. (今井章 (監訳) (2012). 心理生理学：こころと脳のハンドブック 北大路書房)
- Garrett, N., Lazzaro, S. C., Ariely, D., & Sharot, T. (2016). The brain adapts to dishonesty. *Nature Neuroscience*, 19, 1727-1732.
- Gino, F., & Bazerman, M. H. (2009). When misconduct goes unnoticed: The acceptability of gradual erosion in others' unethical behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, 45, 708-719.
- Gneezy, U. (2005). Deception: The role of consequences. *American Economic Review*, 95, 384-394.
- Gu, J., Zhong, C. B., & Page-Gould, E. (2013) Listen to your heart: When false somatic feedback shapes moral behavior. *Journal of Experimental Psychology: General*, 142, 307-312.
- 菊地 史倫 (2021). 日常的な嘘の社会的機能 太幡 直哉・佐藤 拓・菊地 史倫 (編)「隠す」心理を科学する—一人の嘘から動物のあざむきまで— (pp. 2-13) 北大路書房
- 菊地 史倫・佐藤 拓・阿部 恒之・仁平 義明 (2007). 生起確率操作によるウソの検討：ウソをつかれるときの信じることと赦すこと 日本認知心理学会第5回発表論文集, 103.
- 菊地 史倫・佐藤 拓・阿部 恒之・仁平 義明 (2008). 過失に対する赦しの評価に怒り感情・信憑性・重大性の評価が及ぼす影響 感情心理学研究, 15, 115-123.
- Klein Selle, N., Agari, N., & Ben-Shakhar, G. (2019). Hide or seek? Physiological responses reflect both the decision and the attempt to conceal information. *Psychological Science*, 30, 1424-1433.
- 小林 佳世子 (2021). 最後通牒ゲームの謎—進化心理学からみた行動ゲーム理論入門— 日本評論社
- 黒川 優美子・秋山 学 (2020). 欺瞞の出現間隔における曖昧な欺瞞の繰り返しによる影響 人間環境学研究, 18, 105-112.
- Mazar, N., Amir, O., & Ariely, D. (2008). The dishonesty of honest people: A theory of self-concept maintenance. *Journal of Marketing Research*, 45, 633-644.
- Masip J., Garrido, E., & Herrero, C. (2004). Defining deception. *Anales De Psicología*, 20, 147-171.
- 長野 祐一郎 (2017). 心電図 堀 忠雄・尾崎 久記 (監) 坂田 省吾・山田 富美雄 (編) 生理心理学と精神生理学 第I巻 基礎 (pp. 165-173) 北大路書房

- 野瀬 出 (2013). 嘘と精神生理学 村井 潤一郎 (編) 嘘の心理学 (pp.107-119) ナカニシヤ出版
- 小川 時洋・松田 いづみ・常岡 充子 (2019). ポリグラフ検査から見た生理心理学への期待と課題 生理心理学と精神生理学, 37, 28-37.
- Osumi, T., & Ohira, H. (2009). Cardiac responses predict decisions: An investigation of the relation between orienting response and decisions in the ultimatum game. *International Journal of Psychophysiology*, 74, 74-79.
- Rutschmann, R., & Wiegmann, A. (2017). No need for an intention to deceive? Challenging the traditional definition of lying. *Philosophical Psychology*, 30, 438-457.
- Schild, C., Heck, D. W., Ścigala, K. A., & Zettler, I. (2019). Revisiting REVISE:(Re) Testing unique and combined effects of REminding, VIvisibility, and SELF-engagement manipulations on cheating behavior. *Journal of Economic Psychology*, 75, 1-14.
- Vrij, A. (2008). *Detecting lies and deceit: Pitfalls and opportunities*. Chichester: John Wiley & Sons. (太幡直也, 佐藤 拓, 菊地 史倫 (監訳) (2016). 嘘と欺瞞の心理学 対人関係から犯罪捜査まで 虚偽検出に関する真実 福村出版)
- Welsh, D. T., Ordóñez, L. D., Snyder, D. G., & Christian, M. S. (2015). The slippery slope: How small ethical transgressions pave the way for larger future transgressions. *Journal of Applied Psychology*, 100, 114-127.

—2021.8.30 受稿 2022.1.20 受理—

オンライン実験プログラムを用いた 反応変動性測定を試み

村井 佳比子 神戸学院大学心理学部

An attempt to measure response variability using an online experimental program

Keiko Murai (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

本研究では、Web 上で実施可能な反応変動性を測定する実験プログラムによって、提示された言語の影響を見ることで、Web で収集したデータの利用可能性を検討することを目的とした。Web 上で実施可能な3つの実験プログラムを作成し、67名（平均年齢25.5歳、標準偏差3.1）を対象に実験を実施した。その結果、プログラム途中で言語提示がない場合は高い変動性が保たれるが、「どのように押すと得点が上がりましたか」という質問を提示したプログラムや、さらに「いろいろ押してみたのですね」といった言語刺激を提示したプログラムでは、全体として反応変動性のうち周期性が上がり、変動性が徐々に低下することが示された。一方、参加者ごとの変化を確認したところ、プログラム途中で言語提示がある場合、変動の個人差が大きいことがわかった。これらの結果は先行研究を支持するものであり、さらに検証が必要であるものの、対面と同様に Web 上でデータ収集可能であることが示唆された。

Key words: response variability, online experimental programs, translational research

キーワード：反応変動性、オンライン実験プログラム、基礎と応用の橋渡し研究

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2022, Vol.4, No.2, pp.67-71

問題と目的

心理臨床における面接場面において、セラピストとクライアントの関わりは言語的なやりとりが中心となる。その関わりによってクライアントの面接場面での発言の変化が生じたとしても、その発言の変化が実際の行動や反応にどのような影響をもたらすのかについては、実証することが難しい。これまでの研究では、セラピストの面接技術がクライアントの言語行動の変化に関連することは検証されているが、クライアントの発言の変化と行動変化との関連は十分に検証されていないことが指摘されている (Magill & Hallgren, 2019)。心身の問題があるとき、不適切な固定化した行動が繰り返されるため、これを崩す関わりが必要になる。これについて村井 (2014a) は、反応する前に選択肢を提示することで、固定化した反応パターンを崩すことができる可能性を実験的に示している。また、選択肢の提示が固定

化したパターンを崩すメカニズムについて、自分の反応を「見る」という、モニタリングの効果との関連があることが示唆されている (村井, 2015; 村井, 2016)。さらに村井 (2020) は、臨床場面を想定した「自分の反応を見る」ことを促進する言語フィードバックの有無や種類によって、個体内に反応変化の差が生じるかどうかを実験的に検証するため、実験参加者に「どのように押すと得点が上がりましたか」と質問し、これに対して、聞き返しを実施した場合としなかった場合の影響を比較している。聞き返しとは、相手の発言を伝え返すことで、相手の発言の意味を変えずにそのまま返す「単純な聞き返し」と、相手の発言の背景を推測して、意味を付加して返す「複雑な聞き返し」がある (Miller & Rollnick, 2013)。検討の結果、聞き返しがない場合は高い変動性が保たれるが、聞き返しがある場合、変動性の程度が変化し、その変化には個人差があることを示している。しかし、これらの研究はすべて実験室で測定され

ており、実験室に来ることができる限られた参加者を対象としている。そこで本研究では、Web 上で実施可能な反応変動性を測定する実験プログラムを作成し、提示された言語の影響を見ることで、Web 上で収集したデータの利用可能性を検討する。

方法

実験参加者

調査会社に登録しているパネラーで、自宅にパーソナルコンピュータがあり、マウスとキーボードを使用できる者のうち、実験に同意し、かつ、最後まで実験に取り組んだ 67 名（18 歳～29 歳、平均年齢 25.5 歳、標準偏差 3.1）を対象とした。参加者募集時には実験の目的と内容を明記した説明書を提示、なんら不利益を被ることなくいつでも実験を辞退できること、個人情報を守られることを説明し、同意欄にチェックを得た。なお、本研究は神戸学院大学人を対象とする医学系研究等倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：HEB17-10）。

実験プログラム

実験用プログラムは、村井（2020）のプログラムを援用した、マウスの左右のボタンを 3 回押してポイントを獲得するものであった。このプログラムは、どのような組み合わせでマウスのボタンを押しても 50 パーセントの確率で得点上がるようになっており、50 試行で構成されるゲームが 5 回繰り返されるものになっていた。プログラムは JavaScript (jQuery) で作成され、実験参加者にプログラムの URL にアクセスを求めて、Web 上で実施してもらった。

実験実施にあたっては、村井（2016）を参考に、3 つのプログラムを作成した。プログラム 1 は、1 つのゲームが終わるごとに「どのように押したら得点が上がりましたか？」という質問が表示され、回答を入力するものであった (Fig. 1)。プログラム 2 は、プログラム 1 のうち、2 ゲーム目と 4 ゲーム目の回答後に「いろいろ押してみたのですね」「いろいろ試

してみたのですね」という文字がポップアップするものになっていた。この提示言語は、村井（2020）で複雑な聞き返し時に使用されていた言葉の中から、汎用性の高いものが選ばれた。プログラム 3 は統制群で、ゲームが終わるごとに「Enter キーを押してください」とのみ表示された。

実験手続き

実験参加者を、3 つのプログラムにランダムに振り分けた。プログラムの URL にアクセスすると、同意書が表示され、同意欄にチェックをすると、次の教示が表示された。

「これからマウスの 2 つのボタン（右・左）を 3 回押して、得点を獲得するゲームをしていただきます。好きな順序でボタンを 3 回押し終わると、ポイントが 10 点増えることがあります。できるだけ多くのポイントが得られるよう頑張ってください。」

次に操作の説明画面が表示され、3 試行の練習用ゲーム実施後、実験が開始された。最後まで実験に取り組んだ実験参加者には、獲得したポイントを 1 ポイント 1 円に換算し、調査会社を通して支払われた。

データの分析

村井（2014b）と同様に、参加者ごとに各ゲームの等確率性 U 値、周期性 C 値、反応パターン数を算出し、3 つのプログラムそれぞれの平均値を比較した。等確率性はデータのばらつきの指標で、U 値は全ての反応が等しく生起しているときに最大値 1 を示す。周期性はデータが生起する順序の規則性の指標で、C 値は規則性が大きいほど最大値 1 に近づく。各事象が起こる確率がすべて等しく、周期性が全くみられないとき、つまり等確率性 U 値が 1 に近く、周期性 C 値が 0 に近いほど変動性が高いということになる。反応パターン数とは、ある反応系列から次にどの反応系列に移行したかの組み合わせの数である。本実験においては 64 パターンとなり、反応パターン数はこの 64 パターンのうちいくつ生起したかを加算した。

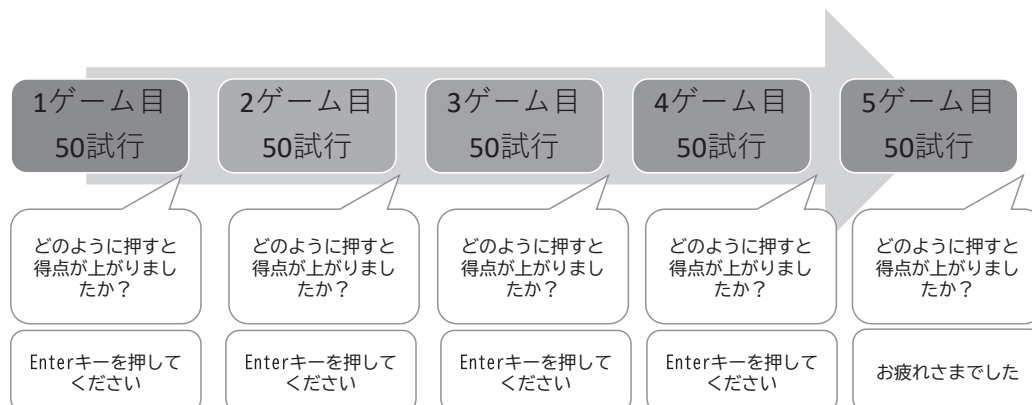


Fig.1 プログラム 1 の構成

結果

プログラム1, 2, 3, それぞれのゲームごとの等確率性, 周期性, 反応パターン数の平均値と標準偏差を Table1 から Table3 に示す。等確率性, 周期性, 反応パターン数について, 3つのプログラムと5回のゲームの平均値の差を比較するために, 繰り返しのある2要因の分散分析を行った (Fig. 2・3・4)。

Table1 等確率性の平均値と標準偏差

	game1		game2		game3		game4		game5	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
プログラム1 (n=23)	0.74	0.19	0.70	0.21	0.74	0.20	0.71	0.27	0.66	0.31
プログラム2 (n=23)	0.75	0.21	0.76	0.16	0.71	0.27	0.69	0.27	0.67	0.30
プログラム3 (n=21)	0.80	0.14	0.77	0.22	0.80	0.14	0.78	0.17	0.76	0.18

Table2 周期性の平均値と標準偏差

	game1		game2		game3		game4		game5	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
プログラム1 (n=23)	0.39	0.13	0.45	0.18	0.45	0.18	0.46	0.23	0.52	0.26
プログラム2 (n=23)	0.40	0.17	0.41	0.14	0.46	0.23	0.47	0.22	0.51	0.24
プログラム3 (n=21)	0.34	0.11	0.36	0.17	0.34	0.11	0.36	0.16	0.37	0.14

Table3 パターン数の平均値と標準偏差

	game1		game2		game3		game4		game5	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
プログラム1 (n=23)	20.91	7.69	19.26	8.32	20.48	7.36	19.83	8.66	18.35	9.59
プログラム2 (n=23)	20.96	7.23	20.26	6.00	19.52	8.89	18.35	8.56	18.09	8.92
プログラム3 (n=21)	23.38	6.45	22.00	7.97	23.52	5.84	22.24	8.02	21.14	7.84

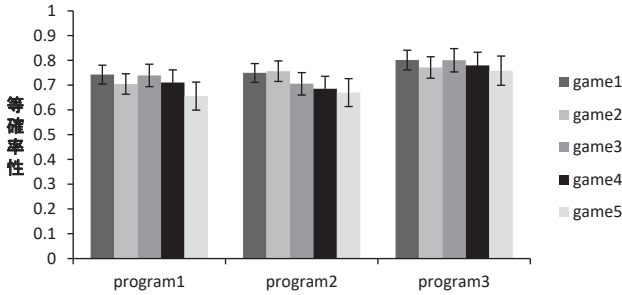


Fig. 2 等確率性の比較

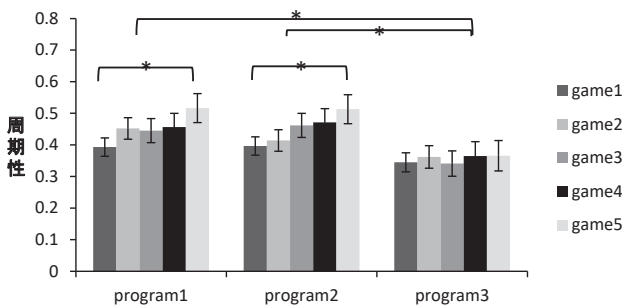


Fig. 3 周期性の比較 (* $p < .05$)

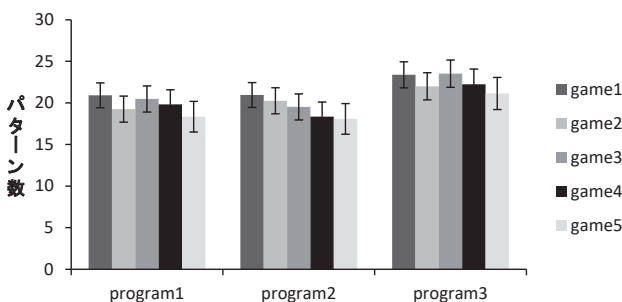


Fig. 4 パターン数の比較

その結果, 等確率性とパターン数には主効果, 交互作用ともに有意な差は認められなかったが, 周期性については, プログラムおよびゲームの主効果が有意であり, プログラム1および2はプログラム3より周期性が高く, プログラム1と2においては, ゲーム1よりゲーム5の周期性が高いことが示された ($F(2, 64) = 3.36, p = .04$; $F(4, 256) = 3.78, p = .02$)。

実験参加者ごとの反応変動性の変化を確認するために, 各プログラムの周期性の変化をグラフ化した (Fig.5 ~ Fig.7)。プログラム3では4名を除き, ほぼ0.2から0.5の範囲で推移しており, 比較的安定した変動性が維持されていたが, プログラム1および2では個々の変化が大きく, 個人差があることが示された。

考察

本研究では, 「自分の反応を見る」ことを促進する言語提示の有無による反応変動性の違いを, Web上の実験プログラムを使用して検証した。3つの実験プログラムを比較したところ, プログラム途中に言語提示がないプログラム3では高い変動性が保たれるが, 「どのように押すと得点が上がりましたか」という質問を提示したプログラム1や, さらに「いろいろ押してみたのですね」といった聞き返しの言語を付加したプログラム2では, 全体として反応変動性のうち周期性が上がり, 変動性が徐々に低下することが示された。一方, 参加者ごとの変化を確認したところ, プログラム1および2は, プログラム3に比べて変動の推移の個人差が大きいことがわかった。

プログラム実施中に, ゲームの遂行を求める以外の言語提示がなかった場合, 反応変動性が高くなることが示されており (村井, 2014a; 村井, 2016), 本研究のプログラム3において変動性が高くなったことは, 先行研究を支持する結果であるといえる。また, プログラム2について, 村井 (2020) ではゲーム後に「どのように押すと得点が上がりましたか」とたずね, 回答に対して聞き返しを行った群 (本研究ではプログラム2にあたる) の変動性には個人差が生じており, 本研究のプログラム2でも実験参加者ごと周期性のグラフに個人差の大きさが見受けられることから, 同様の結果であると考えられる。一方, プログラム1について, 村井 (2020) ではゲーム後に「どのように押すと得点が上がりましたか」とたずね, 回答に対して「はい, 結構です」とのみ応じて聞き返しをしなかった群 (本研究ではプログラム1にあたる) の変動性は高く, 本研究はこれと異なる結果となった。村井 (2020) では, プログラム1に相当する実験への参加者が3名であった。これに対して本研究のプログラム1への実験参加者は23名

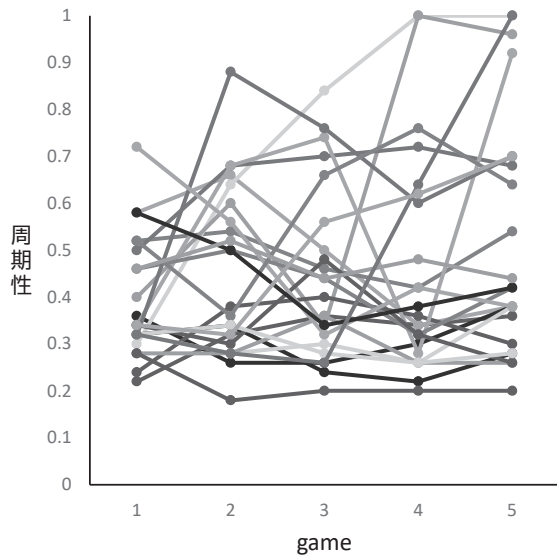


Fig.5 実験参加者ごとの周期性の変化：プログラム 1

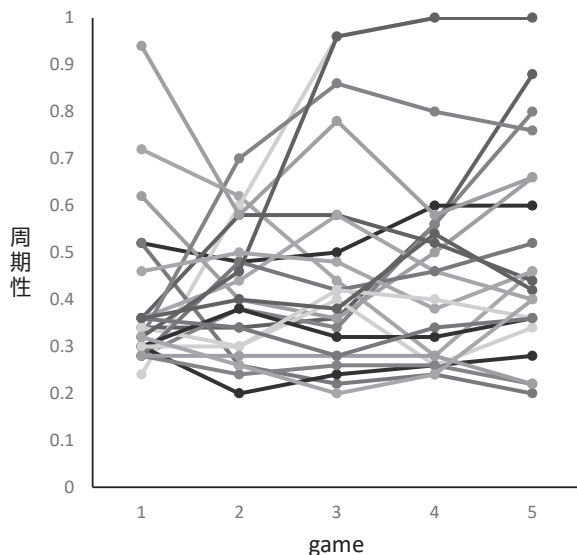


Fig.6 実験参加者ごとの周期性の変化：プログラム 2

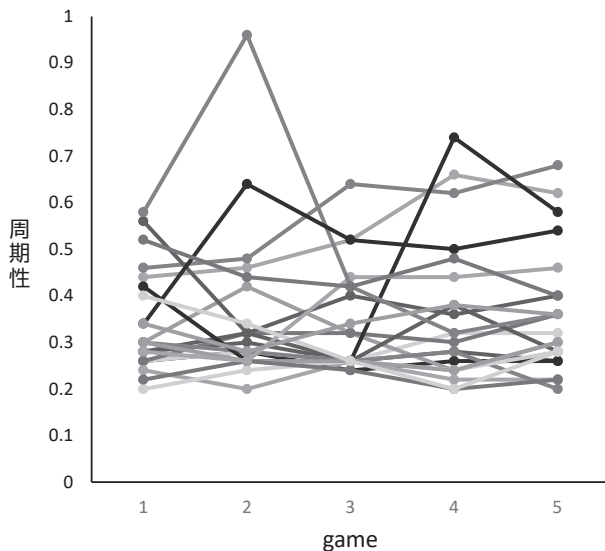


Fig.7 実験参加者ごとの周期性の変化：プログラム 3

で、このうち 8 名が周期性 0.2 から 0.4 で推移しており、高い変動性を保っていた。本研究も十分な実験参加者数とはいえないが、村井 (2020) と同様の変動性を示す実験参加者が一定数認められることから、村井 (2020) の実験参加者に偏りがあった可能性があり、結果の違いは実験参加者数の差によるものではないかと推測される。以上により、さらに検証が必要であるものの、提示された言語の反応変動性への影響を検証するため、対面と同様に Web 上で実験を行い、データを収集することが可能であると考えられる。

本研究結果について、プログラム 3 に関しては対面で実施した先行研究と同様の結果となっており、「どのように押すと得点が上がりましたか」といった質問や、これに対するフィードバックがない場合は高い反応変動性、つまり、いろいろな反応をいろいろな順序でランダムに押すという反応が維持されやすいといえる。プログラム 1 および 2 については、全体として等確率性とパターン数はプログラム 3 と有意な差はなく、いろいろな反応をいろいろなパターンで押していることが示唆される。一方、周期性については上昇する傾向が認められ、ゲームが進むごとに同じ順序で反応するようになるといえる。プログラム 1 とプログラム 2 に有意な差はなく、また、「いろいろ押してみたのですね」と聞き返しの言語提示が付加されたプログラム 2 のゲーム 2 とゲーム 4 の後の変動性にも明確な差は認められない。プログラムごとの平均値からわかることは、「どのように押すと得点が上がりましたか」という質問があると、繰り返し反応が増え、変動性が低下する傾向があるということである。これは、「どのように押すと得点が上がりましたか」という言語刺激によって、得点が上がる反応を繰り返し確認する行動が生じやすくなるためであると考えられる。

しかし、実験参加者ごとの周期性のグラフを見ると、プログラム 1 および 2 ともに、高い変動性が維持されている者が一定数いること、個々の周期性が段階的に上昇しているわけではなく、変化の個人差が大きいことが示されている。個人差を生む要因としては、①実験参加者の強化履歴の影響、②実験参加者の精神健康上の問題などが考えられる。村井 (2014a) では、他者から提示された教示に従うことで成功するという履歴があると、反応変動性が低下したまま回復しにくくなることが実験的に示されている。同様に、精神健康上の問題がある場合、得点が上がる反応を自分で考えるという教示によって、反応変動性が低下、繰り返し反応が多くなることが示唆されている (村井, 2014a)。本研究でも村井 (2020) と同じく、聞き返しの言語提示の反応変動性への影響は明確になっておらず、今後、提示言語の種類と個人の特性の関連に焦点をあてた検証が必要である。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない

引用文献

- Magill, M., & Hallgren, K. A. (2019). Mechanisms of behavior change in motivational interviewing: do we understand how MI works? *Current Opinion in Psychology*, 30, 1–5.
- Miller, W. R., & Rollnick, S. (2013). *Motivational interviewing : helping people change 3rd ed.* NY: Guilford Press.
- 村井佳比子. (2014a). 行動変動性に及ぼす強化履歴

の影響—選択教示使用の有効性の実証的検討—. *行動療法研究*, 40 (1), 23–32.

- 村井佳比子. (2014b). 行動変動性研究における不規則性指標. 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 15, 75–81.
- 村井佳比子. (2015). 注意と行動変動性. 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 15, 303–308.
- 村井佳比子. (2016). 反応変動性に及ぼす選択反応提示の効果. *行動療法研究*, 40 (1), 23–32.
- 村井佳比子. (2020). 言語フィードバックの有無と種類が反応変動性に及ぼす影響. *日本行動分析学会第 38 回年次大会論文集*, 28.

—2022.1.10 受稿 2022.1.20 受理—

両側頭頂後頭葉病変により視覚性注意障害を呈した 1 例

小久保 香江¹ 畠中 めぐみ² 宮井 一郎²

神戸学院大学心理学部¹ 森之宮病院神経リハビリテーション研究部²

A case of visual inattention with bilateral parieto-occipital lesion

Kae Kokubo¹ Megumi Hatakenaka² Ichiro Miyai²

Department of Psychology, Kobe Gakuin University¹

Neurorehabilitation Research Institute, Morinomiya Hospital²

両側頭頂後頭葉病変により視覚性注意障害を呈した症例を経験した。症例は 25 歳、右利き女性。頭部 MRI 画像にて両側頭頂後頭葉に病変をみとめた。視野欠損の有無の確認は困難で眼球運動制限はなかった。本例は単一の対象認知は良好だが、複数の対象を同時にとらえることが困難だった。視覚性注意の範囲は、音読、照合、模写など詳細な視覚的分析を必要とする場面でより狭まった。また、視覚対象が単一のまとまりをもてば、大きさ・複雑性に関わらず対象を同定できたことから、視覚性注意の範囲は、認知的処理の深さや目と手の協調運動などに影響されダイナミックに変化すると考えられた。視覚性注意障害のリハビリテーションは、症例の特性に合わせて見ることを意識する度合いを考慮しながら支援することが求められる。

キーワード：視覚性注意障害、背側型同時失認、リハビリテーション

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2022, Vol.4, No.2, pp.73-77

はじめに

視覚性注意障害とは、一度に複数の対象を視覚的に認知できないことをいう。視覚を介して複数の位置にあるものを一度に意識に到達させることの障害である（平山・横井，2013；平山 2017）。患者の視野は保たれており、形態・文字・顔などほとんどの対象を視覚的に認知することができるにもかかわらず、一度に限られた数の対象しか認知できない。視覚性注意障害では、見ることができる範囲は視野で決まるのではなく、対象の数で決まるといえる。一方、視覚以外の聴覚・触覚を介すれば、複数の対象を一度に認知することができる（平山，2015）。

視覚性注意障害は同時失認と同じ意味で使われている。視覚性注意障害は、処理レベルにより 3 つに分類される。一度に単一の対象しか視覚処理できない背側型同時失認（Balint 型同時失認）、逐次読みに代表されるような複数の対象をすばやく処理できず、

一つひとつ処理してやっと全体の意味理解に到達する腹側型同時失認、さらに、情景画において、個々の対象の認知は良好であるのに全体としてどのような場面か理解できない Wolpert 型同時失認である（鈴木，2010）。

日常生活において視覚性注意障害例はさまざまな困難を感じる。例えば、人混みの多い場所での単独歩行は難しく、本を読むこと、携帯電話の操作、書字など、一度に多くの対象を見なければならぬ作業は困難を極める。しかしながら、視覚性注意障害例に対する介入および経過の報告は少ない（小林・原・並木，2001）。

今回、われわれは、両側頭頂後頭葉病変により視覚性注意障害を呈した症例を経験し、症状の質的特徴とリハビリテーションについて報告する。

症例の概要

【症例】 25 歳，右利き女性，教育歴 12 年。

【主訴】 物が見えにくい，食事のお皿が一つしか見えない。

【現病歴】 X 年 Y 月 Z 日，夕方より激しい頭痛が出現。翌朝，意識障害を認めたため救急搬送された。MRI にて両側頭頂後頭葉中心に広汎な病変をみとめ，静脈洞血栓症を疑われ保存的治療を受けた。約 2 か月後，リハビリテーション目的で当院入院となった。

【神経学的所見】 視野欠損の有無の確認は困難。眼球運動制限なし。両側上肢巧緻性の低下。

【検査所見】 入院時の頭部 MRI 画像所見を Figure 1 に示す。両側頭頂後頭葉に病変を認めた。

【神経心理学的所見】

意識清明で検査に協力的だった。数唱は順唱 8 桁，逆唱 4 桁。MMSE28 点（書字 -1，構成 -1）。WAIS-R VIQ81 PIQ45 見当識・記憶は良好。失語，失行，半側空間無視，聴覚性消去現象，道順障害は認めなかった。

【本例の視覚性注意障害】

日常生活場面において以下のような問題がみられた。食事ではコップを手で倒してしまう場面が頻回にみられた。状況を聞くと，「食べようと思うとお皿が一つしか見えない」と答えた。また，テレビ視聴の難しさを「ドラマの役者はパッと見て分かる。深津絵理ちゃん！って思って目をみたら，鼻が消えてきて，台詞をって思うと口だけになって，さっき見た目と口を頭の中で合成してみるの。ニュースは画面隅のマドの情報をみるとそこだけになってしまう。小さい画面のテレビや携帯の画面のほうが見や

すい。」と説明した。リハビリテーションの時間を記載した予定表を提示すると，「数字や文字が書いていることは見えるが，分からない」と答えた。さらに，「リハビリテーションでじゃんけんをした時，2 人だと勝負がすぐにわかるけど，3 人だと，勝った！って思ってその後誰が何を出したのか確認しようとすると，分からない。誰が負けたのかわからない。30 秒ぐらい出しつづけてもらおうと分かるんだけど」と話した。

そこで，本例の視覚性注意障害の質的特徴を検討するため，詳細な視覚認知検査を施行した。

【詳細な視覚認知検査】 (Table 1)

1. 単一対象の視覚認知

高次視覚検査より，単一の形態・文字・相貌・色・図形の向きの視覚認知について検討した。結果は全て正答であり，単一の対象の視覚認知は良好であった。

2. 複数対象の視覚認知

A4 の紙に描かれた複数の丸の数を目だけで数える視覚計数課題は，3 つまでしか数えられなかった。5 つの丸が描かれた用紙を提示すると「1 つしか丸が見えなくなった。どこまで数えたかわからない」と回答した。

単語の音読課題では，提示した文字の大きさに関係なく，3 文字単語までは単語として音読できたが，4 文字以上の単語では，逐次読みとなった。状況図の説明課題では絵が表す全体の意味がつかめなかった。また，錯綜図の課題では絵の細部のみ注意が向けられ，包丁の柄の部分の指さして「口紅」，栓抜き穴の部分の指さして「鍵かな」と答えた。

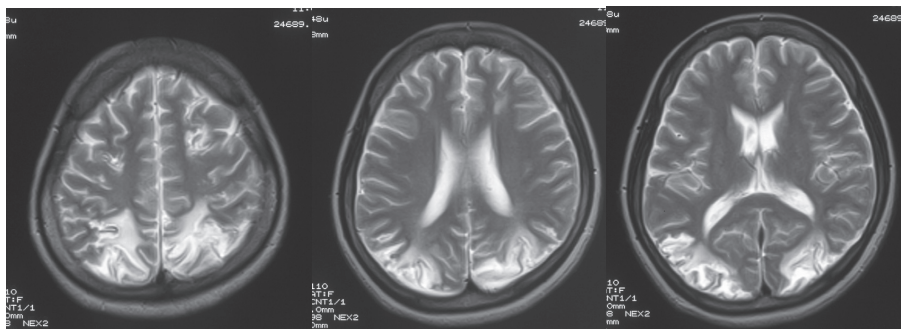


Figure 1 MRI 頭部 T2 強調画像所見
両側の頭頂後頭葉に病変を認める。

Table 1 詳細な視覚認知検査の結果

視覚認知課題	成績と反応
単一対象の認知	良好：単一の形態・文字・相貌・色彩・図形の向きの認知が可能
複数対象の認知	不良：文字は 1 文字ずつ逐次読み。1 つの対象しかわからない。 文字列を○で囲むと 6 文字まで単語として音読できる。
状況図	不可：各部分の認知のみ。全体の意味がつかめない。
錯綜図	不可：細部のみ注意が向けられ，包丁の柄を口紅，栓抜き穴の部分の指さして「鍵かな」と答えた。
視覚計数	不良：同じ形は 3 つ，異なる形は 6 つまで正答。
点を結ぶ課題	不良：2 点を結ぶことは可能だが，3 点になると時間を要した。

複数の点を結ぶ課題では、2点を結ぶことは可能だが、3点になると、点を見失ってしまい、結ぶまでに時間を要した。

3. 同時認知課題 (Figure 2)

複数の対象を同時に認知する課題を施行した。まず、1つの楕円が描かれたA4の紙を提示し、楕円の認知を確認した。その後、検査者が鉛筆の先を楕円の内外に置いて、被験者に鉛筆の先が楕円の内にあるか外にあるかを判断してもらった。

正答数は17/24と低下していた。楕円の外に鉛筆の先がある時に、楕円の内であると判断する誤りが見られた。

4. 対象への到達課題

軽度の視覚失調があり、対象の把握に時間を要した。

5. 模写課題 (Figure 3)

文字・図形の模写ともに形がまとまらず、点在した。ペン先がはなれるとどこまで書いたのか分からないと訴えた。文字が重なったり、大きく離れてバラバラになったりした。丸や三角の模写では、書きはじめと書き終わりの線が繋がらなかった。書字は開眼と比べ閉眼のほうが良好だった。

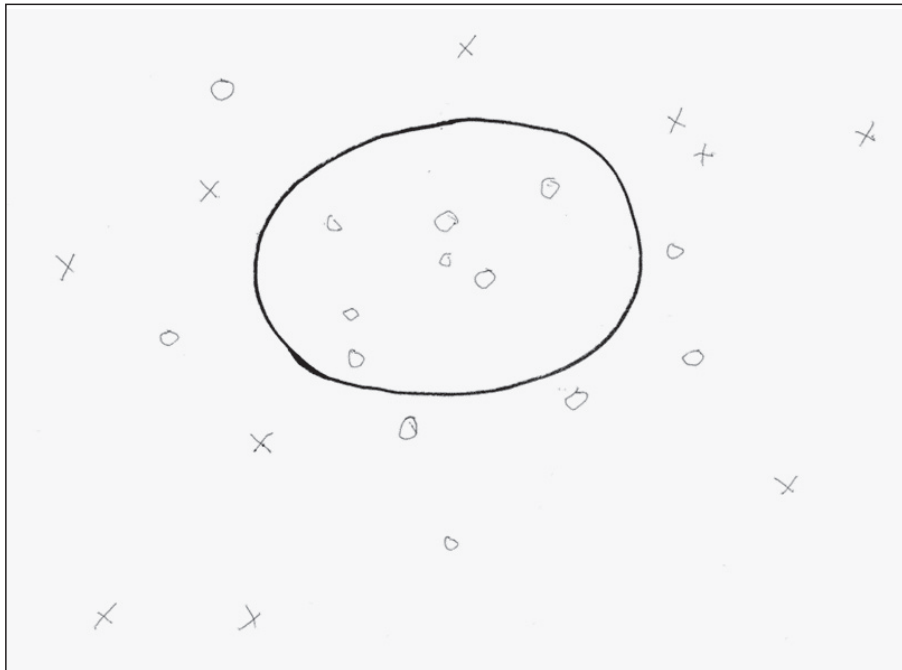


Figure 2 同時認知課題の結果

楕円の認知を確認した後、鉛筆の先を楕円の内外に置いて楕円の内にあるか外にあるかを判断する。○印は楕円の中、×印は楕円の外と判断した。正答数 17/24

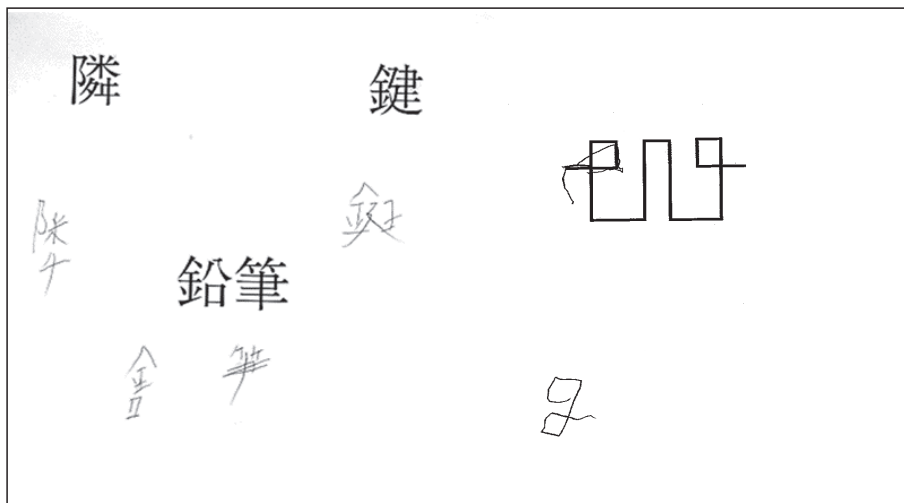


Figure 3 模写課題

文字と図形の模写は形がまとまらない。ペン先がはなれると、どこまで書いたのかわからないと答えた。

6. 時計の文字盤の記入課題 (Figure 4)

時計の文字盤を記入する課題では、枠から数字がはみ出してしまった。書いていると、枠が見えなくなったと答えた。

詳細な視覚認知検査より、本例は対象の大きさと複雑性に関わらず複数の対象を同時に捉えることが困難だった。また、詳細な視覚的分析を必要とする場面（音読・照合・模写）で視覚性注意の範囲はより狭まり、課題遂行が困難となった。

【本例のリハビリテーション】

入院時は、背もたれのない椅子の着座に時間を要すなど、自己身体定位の障害もみられ、食事や歩行を含め病棟生活において見守りを要していた。リハビリテーションでは主に生活動作の練習と視覚認知課題を行った。理学療法では病棟内・病院周辺の歩行練習、机や椅子がある部屋での着座動作と移動の練習を、作業療法では目と手の協調運動を伴う動作（食事、トイレや入浴動作、携帯操作）の練習を、言語療法では、文字の音読、書字、物品認知課題と視覚的探索の練習を行った。心理師は、評価終了後、本人より1日の予定を確認したという希望があったため、リハビリテーション予定表を自ら確認できるように工夫した。本例は複数の対象を同時に認知することは困難だが、単一のまとまりをもてば複数の対象でも認識しやすくなるのではないかと考え、予定表の時間および担当者名を線で囲み提示した。すると、6文字まで単語として認識し、予定表を自ら音読できるようになった。また、ベッド周りの生活

物品を見つけやすいように、引き出しごとに異なる色のシールを貼った。化粧品は1つのボックスにまとめて収納し、化粧水・乳液のボトルは色と形を変えて選択しやすいようにした。本例は色の認知が良好であったため、ノートなど同じ形の対象を複数使用する場合は、表紙の色を変えて、必要なノートを自ら選べるように環境を整えた。さらに、本人が症状や今後の生活について不安をかかえていたため、症状について説明した。

入院から約4か月後（発症から約6か月後）、視覚認知検査検査では大きな改善がみられなかったが、着座、食事、整容など日常生活動作は改善し、自宅退院となった。

考 察

本例は両側頭頂後頭葉の損傷により視覚性注意障害が出現した。単一の対象認知は良好だが、複数の対象を同時にとらえることが困難だった。視覚性注意の範囲は、音読、照合、模写など詳細な視覚的分析を必要とする場面により狭まった。一方、視覚対象が単一のまとまりをもてば、大きさ・複雑性に関わらず対象を同定できることが特徴的だった。

本症状は背側型同時失認と考えられる。本例の視覚性注意の範囲は一定でなく課題や状況により変化した。特に、詳細な視覚的分析を必要とする場面では視覚性注意の範囲が狭まったことから、背側型同時失認例における視覚性注意の範囲は、認知的な処理の深さや目と手の協調運動などに強く影響され、ダイナミックに変化するといえる。これまでに、背

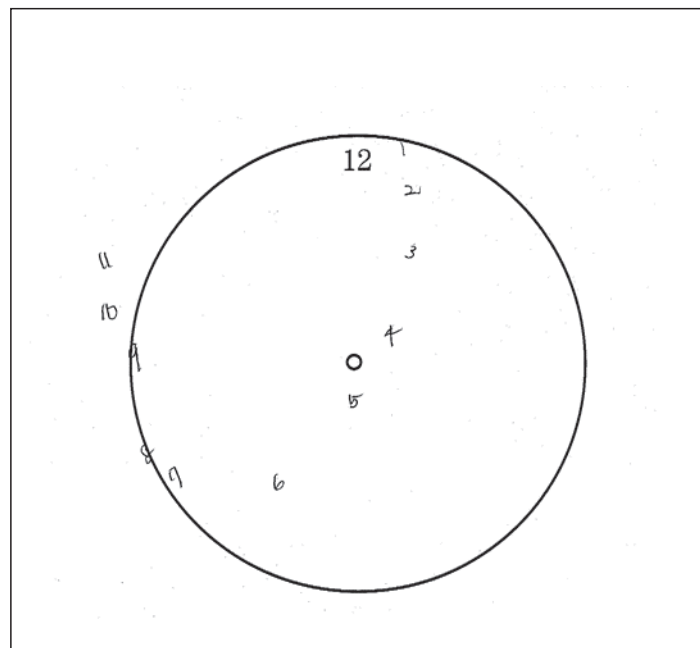


Figure 4 時計の文字盤の記入課題

時計の枠から数字がはみ出してしまう。書いていると、枠が見えないとのこと。

側型同時失認例において見えるものに注意するほど視覚性注意の範囲が狭まることが報告されている (Harvey, 1995; 鈴木, 2010)。

本例は、文字列を線で囲むと単語として音読できるなど視覚対象が単一のまとまりをもてば認識することができたことから、背側型同時失認における「1つ」の単位は変化するといえる。複数の対象であっても1つものとしてまとめることにより、認識されやすくなると考えられる。

大脳における視覚情報処理は3つの流れが想定されている。後頭葉から側頭葉に向かい、対象を同定したり対象についての知識を呼び出したりするために色や形を分析する腹側系、後頭葉から下頭頂小葉に向かい、対象の位置や運動を分析し対象を意識することに関わる腹背側系、後頭葉から頭頂間溝や上頭頂小葉に向かい、対象の位置や運動、形を分析して、対象に向けた行為の無意識的なコントロールに関わる背背側系がある。腹側系の流れの損傷では視覚失認が生じる。腹背側の流れの損傷では、失運動視症、視覚性注意障害、半側空間無視が生じる。背背側の流れの損傷では、視覚性運動失調、把握の障害や自己身体定位障害が生じる (平山, 2015)。本例の病変は、両側の頭頂後頭葉接合部から下頭頂小葉および上頭頂小葉まで及んでいた。本例は入院時、視覚性注意障害に加えて自己身体定位障害および軽度の視覚失調も認めており、視覚情報処理の腹背側系と背背側系が障害された可能性が示唆される。

本例のリハビリテーションでは、主に日常生活動作の練習と視覚認知課題を行った。視覚性注意の範囲は状況により変化するため、リハビリテーションでは、症例の特性に合わせて見ることを意識する度合いを考慮しながら支援することが求められた。脳血管障害および頭部外傷後の視覚性注意障害に対するリハビリテーションと経過については、視覚性注意障害の改善はみられないものの日常生活動作の改善を認めた例、着座など身体定位障害の改善がみられた例の報告がある (笠原・豊倉・田中・西村・石田, 2006; 野村・瀬々・甲斐・吉川・中島, 2019; 清水・下坂・高橋・平林, 1989)。本例も発症から約6か月後、食事や整容などの生活動作は改善したが、視覚性注意障害は残存したことから、長期的な支援が必要であると考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

謝辞

本症例報告の作成にあたり、ご指導とご協力をいただきました森之宮病院の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- Harvey, M. (1995). Psychich paralysis of gaze, optic ataxia, spatial disorder of attention. Translated from Bálint (1909). *Cognitive neuropsychology* 12, 266-282.
- 平山 和美 (2015). 視覚背側経路損傷による症状の概要 高次脳機能研究, 35, 199-206.
- 平山 和美 (2017). 高次脳機能障害の理解と診察 (pp.104-108) 中外医学社
- 平山 和美・横井 香代子 (2013). バーリント症候群 *Clinical Neuroscience*, 31, 1299-1302.
- 笠原 隆・豊倉 穰・田中 博・西村 葉子・石田 暉 (2006). 脳外傷後の Bálint 症候群に対するリハビリテーションの経験 リハビリテーション医学, 43, 358-364.
- 小林 勇矢・原 寛美・並木 幸司 (2001). 頭部外傷により発症した Bálint 症候群の一例 認知リハビリテーション, 6, 125 - 130.
- 野村 心・瀬々 敬仁・甲斐 祥吾・吉川 公正・中島 恵子 (2019). 自己身体定位障害が残存したまま自宅退院となった Bálint 症候群の一例——体性感覚を用いた動作の意識化と長期支援の有用性——高次脳機能研究, 39, 373 - 378.
- 清水 順市・下坂 充・上條 一晃・高橋 紳一・平林 秀光 (1989). 視空間性知覚障害を伴った一症例の作業療法 作業療法, 8, 132-137.
- 鈴木 匡子 (2010). 視覚性認知の神経心理学 (神経心理学コレクション) 医学書院

—2022.1.14 受稿 2022.1.20 受理—

心の健康教育とメンタルヘルス・リテラシー ～「予備」のレトリックからフォーカシングを捉え直す～

岡村 心平 神戸学院大学心理学部

A Review of Mental Health Education and Mental health Literacy: Rethinking Focusing for the Rhetoric of “Preparing”.

Shimpei Okamura (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

公認心理師の業務の1つである「心の健康教育」は、その対象を広く国民全体とし、かつ他の業務にも潜在的に含まれているなど、心理師の業務においてある種の遍在性を帯びている。これはヘルス・プロモーションの推進や、Jorm の提唱した「メンタルヘルス・リテラシー」に関する国際的な動向と連動している。本論では、まず、患者が自身の疾病のリスクを「実感」して行動を変容することを促すために、医療者がいかにレトリックを用いているかをめぐり磯野 (2021) の議論を参照し、心の健康教育において、特にうつ病や薬物防止の啓蒙表現におけるレトリックの使用について批判的に検討した。また、伊藤 (2020) のウェルビーイングに関する視点をもとに、能力を個人に帰属させる「予防」的な能力観に対比的に提示される、対人的なネットワークやコミュニティの中で実現される「予備」的な能力観から、心の健康教育について再考した。最後に、「予備」的視点による心の健康教育の可能性を探索的に検討するために、フォーカシングの活用可能性について考察した。

Key words: mental health education, mental health literacy, rhetoric, focusing, bodily feeling.

キーワード：心の健康教育，メンタルヘルス・リテラシー，レトリック，フォーカシング，実感

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2022, Vol.4, No.2, pp.79-89

1. 公認心理師と心の健康教育

日本における心理専門職の在り方は、2017年に公認心理師法が施行されて以来、未だ変化の渦中にあると言ってよい。特に、公認心理師の登場以前より大きく変化したのは、その業務内容が法律により規定されているという点であろう。東畑 (2020) が指摘するように、国家資格化に伴って臨床心理学という学問、あるいは有資格者がその業務を行う場は「権力が作用する場」となった (p.101)。心理職の専門性への説明責任がいつそう問われていく現状がある。

この「権力が作用する場」は医療機関の面接室や、学校、企業のカウンセリングルームなどに限定されない。公認心理師法の第1条において「この法律は、公認心理師の資格を定めて、その業務の適正を図り、もって国民の心の健康の保持増進に寄与することを目的とする」(下線部は筆者)と規定されている通り、

公認心理師の業務の対象者は広く国民全体であり、その際立ったものが「心理教育」や「心の健康教育」と呼ばれている業務である。公認心理師法の第2条では、公認心理師がこの名称を用いて(名称独占)、「保健医療、福祉、教育その他の分野において、心理学に関する専門的知識及び技術をもって」、以下の4つの業務を行うと規定されている。

- 一 心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その結果を分析すること。
- 二 心理に関する支援を要する者に対し、その心理に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと。
- 三 心理に関する支援を要する者の関係者に対し、その相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと。
- 四 心の健康に関する知識の普及を図るための教

育及び情報の提供を行うこと。

(公認心理師法 第 2 条 下線部は筆者による)

これらは実際の業務としては①心理アセスメント、②心理支援（心理療法・カウンセリング等）、③コンサルテーションや他職種連携、④心の健康教育（心理教育等）の 4 つに概略できるだろう。①と②は要支援者に対して行われ、③は要支援者の家族やその支援の連携先の他職種を含む関係者に対して行われる。一方、④の心の健康教育においては、その業務の対象は、相談機関にアクセスされた要支援者やその関係者に限定されず、特定の対象者を持たず、広く「国民」全体となる。

『公認心理師現任者講習テキスト（2018 年版）』において明記される通り、「第 4 項に含まれる業務は、心理に関する問題を抱えていない人々を対象として、公認心理師の側から積極的に働きかけ、予防のために教育や啓発を行なっていくことであると理解される」（p.222）。これは、アメリカの Institute of Medicine (IOM) の予防の 3 つのカテゴリー（普遍的予防、選択的予防、指示的予防）のうち、「一般大衆、あるいは、リスクが高まっていると判断されていない人々（集団）」を対象とする「普遍的予防」に位置づけられる（Muñoz, Mrazek & Haggerty, 1996）。心の健康教育は、広く「人口全体」に対して行われる実践である。

このような公認心理師の業務における「心の健康教育」の明記は、近年の予防医学の発展による「治療から予防へ」という動向に由来している。World Health Organization (WHO) は、1986 年のオタワ憲章における新しい健康観に基づく健康戦略、ヘルス・プロモーション (health promotion) を提唱している。ヘルス・プロモーションは、「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義され、世界各国でこれを踏まえた健康増進政策が取り組まれている。日本でもヘルス・プロモーション政策として、2000 年度より「21 世紀における国民健康づくり運動（健康日本 21）」が実施され、その後も継続政策として、2013-2022 年まで「健康日本 21（第二次）」が行われている。

2003 年には、国民の健康維持・増進と生活習慣病の予防などを目的として「健康増進法」が施行された。本法には生活習慣病対策の保健指導や受動喫煙防止などの項目が含まれるが、第四条にて、広く本法が定める健康増進事業を実施するもの（健康増進事業実施者）の責務として「健康増進事業実施者は、健康教育、健康相談その他国民の健康の増進のために必要な事業（以下「健康増進事業」という。）を積極的に推進するよう努めなければならない」（下線部は筆者による）と明記されている。このように、日本の健康増進事業においてこの「健康教育」はその業務

において重要な位置づけとなっている。

「健康日本 21（第二次）」の目標項目のうち、社会生活を営むために必要な機能の維持・向上に関する目標には、(1) こころの健康、(2) 次世代の健康、(3) 高齢者の健康が挙げられ、このうち (1) こころの健康に関しては、①自殺者の減少（人口 10 万人当たり）、②気分障害・不安障害に相当する心理的苦痛を感じている者の割合の減少、③メンタルヘルスに関する措置を受けられる職場の割合の増加、④ 小児人口 10 万人当たりの小児科医・児童精神科医の割合の増加、という 4 つの小項目が挙げられている。この政策は、公認心理師がその業務として実施することが求められる「心の健康教育」のその内実や実態にも反映されている。「令和 3 年版 公認心理師試験出題基準・ブループリント」では、心の健康教育に関する事項は 24 の大項目うちの最後の項目「24 その他（心の健康教育に関する事項等）」の「(3) 心の健康に関する知識普及を図るための教育、情報の提供」に挙げられているキーワードの例は、「健康日本 21、こころの健康対策、うつ病、薬物依存症、心的外傷後ストレス障害、PTSD、自殺予防、心理教育、支援者のメンタルヘルス」である。つまり心の健康教育は、過去数十年の国際的な予防医学の展開、ヘルス・プロモーションの推進、国内の健康増進政策と連動し、公認心理師の主要な業務の 1 つに位置づけられている。

一方で、心の健康教育という実践の広義性は、広く国民へ向けて行われるというその対象だけでなく、実際にその業務を実施しうる場面の幅広さからも指摘できる。上原（2007）が心理教育の包括的な定義として、心理的な「病気や問題について、何かを伝えること」だと指摘していることを踏まえ、東畑（2020）は心理教育の機能を、一般的に想定される心理教育の研修場面に限定されず、アセスメントや面接場面にも含まれるなど、心理職に「不断に行なっている」ものだと強調する（東畑, 2020, p.104）。確かに、インテーク面接や心理アセスメントのフィードバック場面は、心理職は要支援者の抱えている問題についての説明を行い、今後の支援の方針を提示することになる。その際、治療同盟を形成するために、情報をわかりやすく提示すること自体が、ある種の心理教育と捉えることができる。「インフォームドコンセントは倫理的問題であると同時に、治療に実質を持たせるために不可欠であり、そこに心理教育を欠くことはできない（東畑, 2020, p.105)」。さらには面接室を超えて、要支援者だけでなくその関係者、広く社会に向けて、どのように「心理支援」という実践を広報するかも含めて、心理教育は心理専門職の実践の広域にわたって機能しているのである。東畑（2020）はこれを「心理教育の遍在性」と表現しながら、その問題点も含めて、医療人類学の視点を参照しながら批判的に検討している。

本論を進めるにあたり重要な指摘は、心の健康教育は現状、国の健康増進政策の1つであり、公認心理師の4つの業務のうちの1つであるだけでなく、心理専門職としての業務のさまざまな場面に「遍在」しているながら、それに比して心理専門職の養成課程においては学ぶ機会がわずかだということにある。公認心理師養成課程では、大学院において「心の健康教育に関する理論と実践」が必修科目となっているが、先述の資格試験のブループリントにて「24 その他」に位置づけられているように、実際に支援現場で求められる度合いに比べ、学ぶ機会は比較的少ない。もちろん、関連法規や心理学・医療的な基礎知識などの総量と比較すれば、心の健康教育における必須の「知識」や「理論」の総体は限定的はあるが、心の健康教育に関する「実践」面の養成機械の少なさは検討すべき課題だと言ってよい。

実際に、大学院を修了してすぐの新任者が、現場で研修講師をするように求められて、どのように研修を企画、準備し、実践していけばいいのかわからず困ったという意見を聴くことは少なくない。土井(2015)は、産業分野を目指す心理職を目指す心理職が少ない現状にある理由の1つとして、産業臨床の現場で「ほぼ必須」の業務である、「研修の実施が苦手」という声の多さにあると指摘し、心理専門職として研修業務を引き受ける際の注意点や立案、実施までの詳細をまとめている。

特に産業分野では、「健康日本21(第二次)」でのメンタルヘルスに関する措置を受けられる職場の割合の増加への取り組みや、2015年より施行されたストレスチェック制度の動向とも関連して、心の健康教育を含む予防的な取り組みはますますニーズが高まっている。一方で、上記のように心の健康教育の「遍在性」は産業分野に限ったことではなく、今後多くの領域で心理専門職の業務でも重要視されていくと考えられる。

2. メンタルヘルス・リテラシー

心の健康の保持・増進のために、広く一般市民にどのような知識やスキルが必要かを示す概念として「メンタルヘルス・リテラシー (mental health literacy)」がある。メンタルヘルス・リテラシーとは、ヘルス・プロモーション研究の登場したもので、1990年代にオーストラリアのジョーム (Jorm, A. F.) らが提唱したものである。以下に、中村(2021)の記述を参考にしながら、メンタルヘルス・リテラシー概念の提唱までの背景について概観する。

中村(2021)によれば、もともとは1970年代に、より包摂的に心身の健康全体を包括する概念として「ヘルス・リテラシー」という発想が登場したことに端を発する。これは当時のアメリカにおいて、識字率と健康アウトカムとの関連が指摘されて以降に提唱されたもので、文書が読めないことにより、健康

に関する情報を入手できない、あるいは理解できないことが健康への悪影響を及ぼしていると考えられていた。

1986年のオタワ憲章以降、後にヘルス・プロモーションの概念が発展していく中で、ヘルスリテラシーは、より積極的に自分自身の健康を保持増進させるスキルという概念として拡張されている。中村(2021)は、WHOのヘルスプロモーション戦略で「セルフケア」が重視されており、「ヘルス・リテラシーはセルフケアを可能にする個々人のエンパワーメント戦略」を担うものとして重視されている。ヘルス・リテラシーの概念は、現状として「各自のリテラシーを向上させるような社会の設定やそうした社会資源にアクセスする能力」を含めた広義の意味を含んでいる一方で、「その概念が包括的なものへと拡大しているため、十分に整理されていない部分があり、包括的な測定やその活用については検討の途上にあるといえる」という(中村, 2021, p.88-89)。

さらに中村(2021)は、世界各国で実施されていったヘルス・プロモーション戦略において健康増進事業にける「メンタルヘルス支援」の不在が課題として挙げたことが、メンタルヘルス・リテラシーという概念が提唱されるに至る契機となったと記述する。1993年にオーストラリア政府が現状の公衆衛生上の目標に関して発表したレポートでは (Nutbeam et al., 1993)、ヘルス・リテラシーは「より良い健康を保持・増進するための情報にアクセスし、理解し、使う方法」として定義され、個人に関するこれらの能力や知識を高めることを今後の課題として明記し、各種の身体疾患に関するヘルス・リテラシーの向上のための目標と対象について記述されたいたものの、この中には精神疾患は対象として含まれていなかった(中村, 2021, p.90)。

これを受けて Jorm et al. (1997) は、ヘルス・リテラシー概念の身体疾患のみならず、精神障害へと拡張させ、メンタルヘルス・リテラシーという概念を提唱するに至っている。はじめはこの概念は「精神障害に関する知識と信念で、精神障害の認識・管理・予防を助けるもの」という定義がなされていたが (Jorm et al., 1997)、その後も発展を続けており、現在は以下の5つの要素から構成されるものと定義づけられている (Jorm, 2012)。すなわち、①精神障害の予防法に関する知識、②精神障害が深刻化しつつある時にそれに気づくこと、③援助先や治療段階に関する知識、④比較的軽度の段階で、自分でできる効果的な対処方法に関する知識、⑤精神障害になりそうな人や精神的な危機状態にある人を支援できるファースト・エイドのスキル、の5点である。

公認心理師の4つの業務の1つである「心の健康教育」として想定されている内容の多く部分が、Jormらの提唱したメンタルヘルス・リテラシーの向上のための取り組みと重なっているものの、より特

記すべき差異も見受けられる。特に、①～④の心の健康教育を受けた本人の適切な精神障害の理解を促すこと、あるいはセルフケア能力の向上を目指す部分だけでなく、⑤のより多く社会に向けた啓発活動、一般市民が精神的な危機状態にある人を支援する際のファースト・エイドのスキルを教育する視点は重要である。日本においては、産業領域における職場における4つのケアとして「ラインによるケア」が提示されているが、Jormのメンタルヘルス・リテラシーでは、職場環境における人間関係だけでなく、より広い人間関係において、メンタルヘルスにおける相互扶助的なリテラシーの向上を目標づけているように見受けられる。広く一般市民を対象とした心の健康教育の在り方を構想する際には、こういった精神疾患の理解だけでなく、市民レベルでの支援方略、ファーストエイドのリテラシーを高める取り組みは今後、さらに求められていくと考えられる。

中村(2021)は、メンタルヘルス・リテラシーという概念やその使用から見出させる、心の健康教育という実践について考慮すべき問いを4点指摘している。1点めは「心の健康教育によって知識は増えるのか」あるいは「知識を増やした結果、本人の精神的健康の保持増進に役立つ行動が増えるのか」(p.94)という問いである。心の健康教育は、メンタルヘルスに関する知識を増やすことを「善」として設計されている取り組みである。一方で、メンタルヘルス・リテラシーの向上が、実際の支援要請につながるというエビデンスは示されておらず(児玉・志渡・池田, 2018)、また知識啓発が精神障害へのスティグマを減らすわけでもない(樫原・河合・梅垣, 2014)という。知識が増えることが、果たして精神疾患の「予防」や、精神障害への「正しい理解」へと結びつくのかは、引き続き慎重に検討する必要があるようである。

2点めの問いは、心の健康教育が「教育」という営みである以上、その教育効果や意義が問われる必要がある。特に「教育で用いる用語(例えば「こころの病気」と言うか、「心の病」と言う、「脳の神経伝達物質の不調」と言うか)が与える影響」(p.94)など、どのような表現方略で教育すれば教育効果が得られやすく、知識の定着が見られるのかなど、教育方法論や教育効果に関する基礎的な研究の必要性が指摘される。

3点目は、そもそも「メンタルヘルスがいい状態とは何か」を教育提供者自身がどう考えるかが問われなければならない、ということである。元々は精神疾患の知識や予防対処に限定されていたメンタルヘルス・リテラシーの概念は、「よりポジティブで積極的な精神状態を目指すものになりつつある」(p.95)。いわば、メンタルイネス(心の病気)の知識を啓発するだけでなく、本来の意味でメンタルヘルス(心の健康)とは何かが問われる必要性が高まっているのである。

これは、単なる疾病の有無による心身の健康(health)ではなく、WHOが定義する健康の定義における「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態(well-being)にあること」におけるウェルビーイング(健康)とはどのようなものか、という問いにも関連している。東畑(2020)が心理教育を、心理学的に定義される「健康」を布教、あるいはマーケティングする営みであり、心理学的な正しさに基づく「ある種の生き方を他者へと押しつけていくこと」を意味すると指摘しているように、心の健康教育という実践が教育である以上、そこには、ある種の健康や幸福への方向性を示すことになる。どのような健康観に基づき、自分たちが心の健康教育を行っているのか、その功罪を常に省察することは心理専門職に求められる職業倫理である。

これに関連して4点めの問いは、他職種との連携や心の健康教育の多様性への問いである。他職種連携が公認心理師の業務としても際立って重視されている以上、心の健康教育もまた地域社会の中で、多くの専門家と共に連携して取り組まなければならない。心の健康教育は多くの分野に遍在しており、従来より公衆衛生学や保健医療分野で発展してきた予防医学的な心の健康教育だけでなく、学校などの教育現場、産業分野、福祉や司法分野のそれぞれで、求められる心の健康教育の在り方、内容も方法も異なる。その中で、心理専門職がこれらをどのように担っていくのかを検討する必要があるだろう。

3. 心の健康教育におけるリスクの「実感」とレトリックの使用

ここまで確認してきたように、心の健康教育は、公衆衛生学や予防医学における「予防」という発想の展開に即して心理専門職の実践の1つとして位置づけられてきた経緯があり、現状においても国の健康増進政策の一翼を担っている。心の健康教育のねらいは、心身の不調や精神疾患がもたらす諸々の「リスク」を適切に理解し、それらを回避したり、適切な対応策を実行できるように、メンタルヘルス・リテラシーを広く一般市民に対して提供することにある。このとき、メンタルヘルスに関する諸々のリスクを、心の健康教育の受け手がいかに「実感」できるのかは、心の健康教育の教育効果やメンタルヘルス・リテラシーの向上を捉えるために重要であろう。

医療現場におけるリスクの「実感」について、磯野(2021)は自身のフィールドワークをもとに論じている。例えば、ある当事者は原因不明の体調不良により受診し、線維筋痛症と診断されいわゆる「西洋薬」を服薬したが症状が改善せず、かえって体調も悪くなったことで西洋薬へのリスクを「実感」して忌避し、漢方薬を処方してもらうために漢方医の

もとを訪れるに至ったという。また別の例では、ある拒食や過食の当事者は、栄養学や生理学の知識を学び体型コントロールを実践したことで、食べ物についてその味わいや食感などの実感よりも、カロリーや体型変化のリスクとしての「実感」が先行されてしまったと語る (p.32-39)。

磯野はこれらの事態を、人類学者のギアツが精神分析家のコフォートの用いた「<近い=経験 (experience-near)> / <遠い=経験 (experience-distant)>」という概念区分 (ギアツ, 1991) を援用して、予防医学におけるリスクの実感について考察している (P.39-43)。磯野 (2021) によれば、<近い=経験>とは「自分や自分の仲間が見たり感じたり考えたり想像したりすることを表現する際に、自然に無理なく使い、他人が同様に使った場合にもやはり容易に理解できるような概念のこと」を指し、<遠い=経験>とは「何らかの専門家が、その科学的、哲学的、また実際的、目的を果たすために用いるような概念のこと」を指す。先の例でいえば線維筋痛症などの医学用語や診断名、あるいは栄養学や生理学の知識は<遠い=経験>であり、自身の体調の変化の機微や、実際の食事の味わいや食感などは<近い=経験>となる。

磯野はリスクの実感をめぐる現代社会の特徴として、専門知識などの<遠い=経験>がメディアやインターネットを通して、人々の<近い=経験>に容易に入り込み、「現実の実感のあり方を刷新し続ける」ことにあると論じる。実際に、漢方医を訪れた前者の当事者はその後、漢方薬を服薬しても元々の体調不良は改善されず、「顎関節のずれ」を修正するという別の治療法を試すに至っている。つまり、線維筋痛症という<遠い=経験>から、顎関節のずれという別の<遠い=経験>へと刷新して、体調不良という実感が塗り替えられていることがわかる。また、日常の身近な<近い=経験>よりも、<遠い=経験>に価値が置かれ場合、<近い=経験>は容易に放棄されてしまう。後者の当事者が、食べるという<近い=経験>ではなく、消化するという<遠い=経験>による概念を用いて食事を理解することで、食事が一連の消化プロセスとして刷新されているのである。

服薬の忌避や摂食障害をめぐる語りの中には、磯野が示した通り、どのようにリスクが「実感」され、専門知識であるはずの<遠い=経験>が、日常で実感される<近い=経験>として書き換えられていくのか、そのプロセスが見出される。一方で、予防医学における医学的なリスクの教育、ヘルス・リテラシーの向上は、多くの一般市民にとって<遠い=経験>であるはずの医学的な知識が、その教育の受け手にとって<近い=経験>となることで実現する。医学的な「正しさ」をもって、病気のリスクという<遠い=経験>を、多くの人が実感できる<近い=経験>に変換する営みが、予防医学的な介入なので

ある。磯野 (2021) は、「<近い=経験>を、より正確であるとされる<遠い=経験>で塗り替え、介入対象の現実の実感を介入側が適切だと考える形に変えることが、予防医学における介入の根幹にある」(p.42) と指摘する。

では、予防医学的介入ではこのような医学的な「正しさ」を伴った知識 (<遠い=経験>) を、いかに実感を伴ったリスクとしての認識 (<近い=経験>) へと変化させようと試みられているのか。磯野が目指するのは、診療場面において医療者が用いる「レトリック (rhetoric)」である。レトリックとは、直喩 (例：君は薔薇のように美しい) や隠喩 (例：君は僕の太陽だ) などのような比喩表現を含む修辞技法として知られる。佐藤 (1992) はレトリックの機能として①説得 (討論で用いられる修辞)、②魅惑 (詩や文学で用いられる修辞)、③発見 (新たな洞察をもたらす修辞) などを挙げている。磯野は佐藤のいうレトリックに③の発見的な使用として特徴づけられる「常識的な文のかわりに、いささか異質な、ちょっと目立つ表現形式」である「ことばの《あや》」の機能に注目して、医療現場におけるリスクの実感の醸成プロセスを記述する。

医療現場では、医療的なエビデンスに基づく説明方略 (<遠い=経験>) により、医療者が患者に対して病気や治療のリスクを説明するという印象を持たれやすい。磯野 (2021) は不整脈の1つである心房細動の治療現場におけるフィールドワークで、循環器専門医が患者に対して疾患のリスクを説明する際に、どのような言葉を用いているかを調査した。心房細動は自覚症状がある場合もない場合もあり、これ自体が患者にとって致命的な影響を与えることは少ないが、心房の中に血栓ができやすくなり、これが脳の血管に飛んだ場合には、脳梗塞の中でも致死率が高く、重篤な後遺症が残すことの多い心原性脳梗塞を引き起こすリスクが高まるという (p.49)。そのため心房細動患者は、ガイドラインによる一定の基準に合致すると、多くの場合は抗血栓療法の治療が開始される。ただし、抗血栓療法で用いられる抗血栓薬は、直接的に不整脈に効果があるわけではなく、服薬しても心房細動の動悸が和らぐことはないため、その効果を患者自身が日常生活で感じることは難しい。患者は心房細動による脳梗塞のリスクを実感しづらく、抗血栓療法や心原性脳梗塞は患者にとって<遠い=経験>となりやすいのである。

磯野 (2021) は、心房細動患者に対してその疾患のリスクを実感されやすいように、循環器専門医がある種の「レトリック」を用いており、むしろ「レトリックなしにこのリスクの実感を醸造することは難しい」(p.51) と指摘する。心房細動によって引き起こされるリスクを患者自身が「自分ごと」として引き受けることを促すために、医療者はしばしば、元プロ野球選手・プロ野球患者の長嶋茂雄氏の名前

を持ち出すのだという。長嶋氏は、2004年に心房細動による心原性脳梗塞を発症し、その後は右半身の麻痺と言語への後遺症と共に生活を送っており、全国に広く報道された。実際に、この出来事以後、磯野がインタビューをした4名の循環器専門医が「心房細動及び抗血栓治療の説明がしやすくなった」(p.55)と回答している。例えば診療においては、この疾患を説明する際に「長嶋さんみたいに血栓ができる可能性があるので…」とその名前が使用される。この言い回しは直喩的なレトリックであり、あくまで長嶋氏の名前は「ことばの《あや》」として使われている。

一方で、磯野(2021)による患者へのインタビューにおいても、「自身が飲んでる薬の名前は知らない一方で、『長嶋さんみたいになるかもしれない』という未来はかれらの脳裏にはっきり刻まれている」との印象を語る。「長嶋さんのようになるかもしれない」というレトリックが、『『自分も彼のようになるかもしれない』という驚きを伴う発見を患者にもたらし、それがリスクの実感の種とな』るように機能しているのである(p.61)。

もう1つ、心房細動の治療をめぐるレトリックに「血液サラサラ」という表現がある。例えば、抗血栓治療で用いられるワーファリンなどの治療薬は、「血液サラサラになる薬(治療)」などにパラフレーズされて用いられる、医療者が頻繁に使用するレトリックである。これは、治療薬を服薬することで「血液のサラサラ度が上がって出血しやすい」というような治療薬のリスクを伝える際にも用いられるという。しかし「血液サラサラ」という表現は薬理学的には不正確であり、それまでの患者の血液がドロドロで、それが内服によってサラサラになるわけではない(p.63)。重要な点は、「厳密に言えば不正確なこの表現を専門家が好んで使い、それが患者の治療意欲を充実させることに貢献している」のである。

「サラサラ」という際に用いられるオノマトペはレトリックの一種であり、液体や物体がスムーズに流れる際の擬態語である。オノマトペはある種の質感を表現する際に効果的な表現形式であり(岡村, 2016, p.63)、医療者が患者に対して行うリスクコミュニケーション、患者に自身の病気のリスクの「実感」を促す際に、レトリックが効果的に用いられるのである。医療現場では、これらのレトリックの使用にリスクの実感へと向けた一定の方向性が付与される。例えば、抗血栓薬には大量出血時のリスクが伴うが、これを指して抗血栓薬を「血液ドバドバ」になる薬とは説明されない(p.68)。実際の治療のリスク・ベネフィットを換算して、血液が止まりにくくなるリスクを引き受けて、脳血栓のリスクを軽減させるように促すためにレトリックが用いられる。磯野(2021)はこのような事態を「サラサラというレトリックが、血が止まりにくくなるという経験の意味を、恐

怖から効果の実感へと書き換えている」と記述する(p.66)。

以上のように、医療者は医学的な「正しさ」を背景に患者のリスクの実感を醸造するために、時にレトリックを用いて介入する。心の健康教育においても同様に、心理学的な「正しさ」を根拠として、そのリスクを実感するために、さまざまな介入が「教育」という枠組みで実施され、時にレトリカルな説明方略が用いられている。ただしそこには、中村(2021)が指摘するように「メンタルヘルスがいい状態とはどのような状態か」というある種の心の健康への価値観が含まれており、その「正しい」方向へ向かう導きとして、東畑(2020)の指摘する「ある種の生き方を他者へと押し付ける」ための介入となる。心の健康教育において、どのようなレトリックを用いて発信するかは、その業務を進める上で重要な要素となる。

例えば、20世紀初頭の日本において盛んに取り組まれた「うつは心の風邪」キャンペーンはその実例である。うつ病という、当時の日本においては耳慣れなかった精神疾患の啓蒙を図っているキャンペーンは、うつを「風邪」のレトリックを用いることで「誰でも罹患しうるもの」というメッセージを伝える啓発活動であった。BBCが2014年に報じているように(Harding, July, 2016)、製薬業界の介入が背景にあったと指摘できるが、うつ病を含む気分障害の診断は4年間で倍増し、抗うつ剤市場は2006年には従来の6倍の規模に急成長することになる。

一方で、「うつは心の風邪」というレトリックは、うつ病を風邪のように「市販の薬を飲めばすぐに治るもの」であり、ごく一般的な悩みや憂うつさと同義のものとして誤用されるようになった(渡辺, 2009, 井原, 2012, 檜原・河合・梅垣, 2014)。その結果、このレトリックがうつ病の罹患が自殺のリスクの増加につながるという、その疾病リスクの「実感」を低下させる方向へと作用し、また「うつ病は風邪と同様にかかる人間の自己責任」というように、うつ病への「スティグマの軽減を図って安易に実践を行うだけでは、うつ病とその罹患者に対してさらなる偏見や誤解を生む恐れもある」(檜原・河合・梅垣, 2014)。「うつは心の風邪」キャンペーンは、いわばうつ病について広く一般市民へと向けた当時の心の健康教育の一環であったが、レトリックが発見的でかつ教育の受け手に対して影響力を持つ以上、その実施においては絶えざる省察が伴われなければならない。

同様に、心の健康教育に関連する例として、1980年代に日本民間放送連盟(民放連)が作成した薬物使用防止に対する啓蒙広告での「覚醒剤やめですか? それとも人間やめですか?」が挙げられる。放送当時はテレビなどでも頻繁に流されていたが、「人間やめですか?」という表現は、薬物依存からの回復の

ために治療を受けている当事者への差別表現であると批判され、薬物報道ガイドライン（特定非営利活動法人ASK）には、「『人間やめますか』のように、依存症患者の人格を否定するような表現は用いないこと」という項目が含まれている。

精神科医の松本俊彦氏はこの広告表現をめぐるインタビュー（「ナショナルジオグラフィック Web 版」, 2017）の中で、この差別的な表現を含む啓発広告により「薬物依存に陥った人たちが社会的に猛烈に排斥されるがゆえに、治療のきっかけすらつかめないということが極めて頻繁に起きている」と指摘する。松本氏はある父親が覚醒剤の使用で逮捕されたのち、その子どもが「きっと自分も人間ではない」と考えて自暴自棄になり、覚せい剤を使ってしまったようになった例などを挙げ、「予防教育も行きすぎると、リスクの高い子たちのリスクをより高くする」ことにつながりかねないと警鐘を鳴らす。「人間やめますか?」というレトリックは、予防教育の機能として薬物の使用から遠ざけることへの一定の効果があつたと想定できるが、同時に薬物依存者の回復への手立てやその事件を排斥することを後押しした、とも指摘される。

先述のように、ここでレトリックの主題として挙げたうつ病、自殺予防、薬物依存は、令和3年度の「公認心理師試験・ブループリント」の心の健康教育に関するキーワードにも挙げられており、今後も公認心理師が実践する心の健康教育の主たるキーワードである。心理学の知見をもとに、心の健康に関するリスクを多くの市民が「実感」できるように促すことには、心理専門職による教育実践として、ある種の「正しさ」という一定の方向性を強いているということを自覚しておく必要がある。予防医学での実践と同様に、効果的な心の健康教育には、レトリックが欠かせない。そして上記のように、そのレトリックに本来的に含まれている専門的な正しさの方向性と、それが教育の受け手に届いたときに付随して生じる別の危険性（うつ病の啓発運動がうつ病の軽視につながり、薬物への啓発運動が薬物依存者の回復を阻害するなど）を孕んでいることを、常に自覚することが求められる。

4. 「予防」と「予備」：能力主義的視点の再検討

前章までで取り上げたように、心の健康教育は、心の健康をめぐる諸々のリスクを「実感」して、必要な行動変容を促すことで、個人のメンタルヘルス・リテラシーを高めることを目的としたはたらきかけだと言える。この「リテラシー」という表現は、これ自体が一種のレトリックとして求められている。通常はいわゆる識字能力（literacy）、読み書きができることを意味する語が、メディア・リテラシーやITリテラシーなど、「ある分野に関する知識やそれらを活用する能力」を比喩的に意味するに至っている（岡

村, 2018, p.147）。

リテラシーをいうレトリックを用いる際、その背景にはある種の能力主義的な視点が存在する。ある問題が生じているのは、個人の問題に対するリテラシー、理解能力や遂行能力が低いから十分ではないためであり、個人のリテラシーを高める必要がある。このような視点は、問題の所在を「個人」の能力に紐づけて考えることになり、それは自己責任論の発想を呼び込むことにもつながる。メンタルヘルスの問題が生じているのは、個人の「リテラシー」が低いからであり、またそのリテラシーを高める努力を、個人は行わなければならない。実際に、健康増進法の第二条（国民の責務）では「国民は、健康な生活習慣の重要性に対する関心と理解を深め、生涯にわたって、自らの健康状態を自覚するとともに、健康の増進に努めなければならない」と自身の健康の維持増進は個人の責務とされている。

このような健康、ウェルビーイングをめぐる「予防」と「能力」の関係に対し、伊藤（2020）は「予備」というレトリックを用いて再検討している。伊藤は、チクセントミハイのいう「フロー」の状態、つまり自身の能力（skill）と挑戦目標（opportunities for action）とが適合している際に、人はウェルビーイングを感じると捉える（p.147）。よって、自身が現在の状況、往々にして困難な問題を含む状況を「統制できるはずだという感覚」があることが、個人のウェルビーイングを高め、その人の潜在的な能力を引き出し、フローをもたらしうる。挑戦すべき課題と、「きっとできるはずだ」という当人の感覚のバランスが、ウェルビーイングにつながるのである。

一方で、伊藤（2020）はさまざまな障害の当事者へのインタビューを通じて、当事者が「挑戦する機会」を周囲の人間が奪ってしまう場合が多いと指摘する。周囲は善意のつもりで介入していても、「『危ないからやめた方がいい』『きっと失敗するからやっつけよう』」という発想で、周囲が当事者の「失敗する権利」を奪ってしまうのである。伊藤は「何かに挑戦しようとする、先回りしてリスクの芽が摘まれてしまう。それはつまり、幸福を享受するチャンスの少なくとも一部を剥奪されることに他ならない」（p.148）と強調する。そのため、能力を、「個人」に属するという発想ではなく、周囲との関係性、ネットワークの中で生成されるものという視点で捉える、新たな能力観が必要となる。

伊藤（2020）は若年性アルツハイマー認知症の当事者である丹野智文氏が、職場など日常生活の中で取り組んでいる「失敗できる環境づくり」の例を紹介する。丹野氏には、顔がわからなくなること（上司など身近な人であっても）、物忘れがあること、文字が認識できないときあることなど、認知症の症状がある。しかし、周囲の人にあらかじめ「できること」とともに「できないこと」を伝えていくことが

大切だという。「周りが勝手に決めつけるから、できることとできないことを自分から言っていくことが一番の環境づくり」だと丹野氏は強調する (p.150)。顔を忘れてしまうことは、人間関係に影響を及ぼしかねないが、この「失敗できる環境づくり」はそのような問題を解消するのである。

でも丹野さんは、そのことで人間関係を傷つけたことは一度もない。なぜなら、そう、自分が忘れる可能性がある、ということ周囲に伝えているからだ。「初めて会った時も、『ごめんね、伊藤さん、次に会ったときは忘れてるからね。声かけてね』って。そう言っておけば、どこかで会ったときに『このあいだ取材した伊藤です』『ああそんなんだ』ってなるでしょ」(伊藤, 2020, p.151)。

できることだけでなく、できないことをあらかじめ共有することは、能力というものを再検討する際に示唆的である。できることを共有することは、本人の「挑戦」を支え、本人の挑戦する機会、つまり「失敗する権利」を奪わないことにつながる。そして、できないことを伝えることは、能力を個人に属するものとして閉ざさず、周囲とのネットワークの中で実現される「できる」ことという、新しい視点をもたらす。たとえ、個人の思い出す能力が低下していても、つまり「丹野さん自身が忘れてしまっても、周囲が丹野さんのことを覚えていれば、そして丹野さんが忘れるかもしれないということがわかっているならば、人間関係にヒビが入ることはない」(p.153)という。

このように、能力を個人に帰属されるものとしてではなく、ネットワークの中で実現されるものとして捉え、当人が「失敗できる環境づくり」、すなわち挑戦でき、ウェルビーイングを感じられる環境づくりに、自治体として取り組む実践例として、伊藤(2020)は大牟田市の「認知症 SOS ネットワーク模擬訓練」を挙げる。これは、認知症の方が行方不明になった際に、行政・地域住民などが協力して発見し、保護するための訓練を行うものであり、実際の訓練のみならず、地域住民の見守ろうという意識の醸造や、セーフティネットの構築に役立っているとして、全国の自治体で広まりつつある。いわば、認知症の当事者自身が「失敗できる環境づくり」のために、当事者というよりもむしろ周囲の地域住民がそのネットワークの重要性を「実感」できる取り組みとも言えるだろう。これは、「どうせ失敗するのだから」と先取りして対応するよりもむしろ、当事者の「きっとできるはずだ」というウェルビーイングの感覚を最大限、尊重するための姿勢である。その際に重要なのは、「本人にとっての意味を尊重しつつ、しかし決定的な事故につながらないようなネットワークをあらかじめ構築して備えておくこと」である (p.156)。

このような姿勢を、伊藤は「予防」という言葉と対比させ、「予備」というレトリックを用いて表現する。

予備は、予防とは異なる。「予防」は、ネガティブな出来事(失敗)が起こることを未然に防ぐことである。これに対し「予備」は、ネガティブな出来事が起こることを許す。起こってもいい、ただし決定的な失敗にならないようにする。その安心感があれば、誰もが安心して失敗できる。失敗できる環境とは予防ではなく予備のある環境であり、ここに社会としてのウェルビーイングを高める手がかりがあるのではないか(伊藤, 2020, p.156-157)。

心の健康教育について考える際にも、「予防」的視点だけでなく、伊藤の提案するこの「予備」的視点をもつことは多くの示唆を与える。予防的視点は、精神障害のリスクを事前に広く一般市民に対して「実感」されやすいように促し、個々のメンタルヘルス・リテラシーを高めてメンタルヘルスの不調や精神障害の罹患を未然に防ぐためのアプローチである。このアプローチは問題から人々を遠ざけるために効果的ではあるが、問題の所在を個人の能力に帰属させる視点を含み、「うつは心の風邪」や「人間やめますか?」の標語のように、障害理解への弊害や、当事者への偏見、不理解を生む。さらには「未然に防ぐ」という想定が、当事者やその関係者にとっての「失敗できる環境」を醸造しにくくさせるという問題も指摘できる。

一方で、予備的視点をふまえた心の健康教育は、ネットワークの中で実現される能力観に基づき、当事者や関係者のウェルビーイングを、「失敗できる権利」を保障する。これは、予防的視点が Caplan (1964)の予防区分における「第一次予防」に対して、予備的視点は個人の能力を関係性の中で引き出しながら、ウェルビーイングを感じながら社会の中で生活していくための「第三次予防」を含む介入だと捉えることもできるだろう。これは、Jorm (2012)によるメンタルヘルス・リテラシーの要素のうちの「精神障害になりそうな人や精神的な危機状態にある人を支援できるファースト・エイドのスキル」と矛盾するものではないが、より発展的に「失敗できる環境づくり」を重要視するところに、予備的視点の新しさがある。

予防的視点と予備的視点は、優劣関係にはなくどちらも重要であり、相補的な関係でもある。それは、感染症対策として、予防的対策(手洗い・マスク着用・三密の回避)と予備的対策(医療機能の充実・重症病棟の拡充)の双方が重要であるのと同義である。ただし、従来の心の健康教育は、予防的観点の充足を中心に進められてきたと推察される。伊藤(2020)が「そもそも人が発揮する能力なんて、誰と一緒に

仕事をするかによって大きく変わるものだ。引き出してくれる人がいなければ、潜在的な能力も目覚めることがない」(p.154)と指摘する通り、個人に帰属し、個人が自己の責務のもとで向上させるべき能力としての予防的なメンタルヘルス・リテラシーだけでなく、地域社会やコミュニティのネットワークの中で実現しうる予備的なメンタルヘルス・リテラシーの可能性についても、今後はさらに検討する必要があると考えられる。

5. 「予備」的な心の健康教育としてのフォーカシング

最後に、「予備」的な心の健康教育を構想する際のモチーフとして、フォーカシング実践を取り上げる。フォーカシングはユージン・ジェンドリンによって開発された心理療法技法として広く知られているが(Gendlin, 1996)、元々はカウンセリング場面だけではなく、セリフヘルプ技法、あるいは一般市民が他者を支援する方法として考案された経緯がある。実際に、『フォーカシング(第2版)』の原著は新書サイズの普及版(ペーパーバック)として刊行され、後半部分の第3部では他者の支援のためのリスニング論が、第4部はコミュニティ論が展開されている(Gendlin, 1981/2003)。幅広い読者層へと向けて、セルフケアだけでなく、市民相互のケア、コミュニティ・ウェルネスの向上を志向している『フォーカシング』は、現在でいう「心の健康教育」に類する実践的な取り組みの先駆けでもあった。

また、公私ともにジェンドリンのパートナーであったヘンドリックスは、“Revolutionary Pause という名称で知られるフォーカシングのエッセンスを普及させるためのムーブメント”(Hendricks-Gendlin, 2003)の中で、「フェルトセンス・リテラシー(felt sense literacy)」というレトリックを用いている。これはフォーカシング実践の中核概念である、身体的に漠然と感じられる有意味な感覚である「フェルトセンス」を感じることを能力として捉える発想である。リテラシーというレトリックによって、フェルトセンスを感じることを、人間が文字を覚えることのように「自然なプロセス」であり、「基本的なレベル」の難易度のものであり、かつ多くの人々が「学ぶことのできる」ものであることを強調するものである。Jormらのメンタルヘルス・リテラシーの概念と同様に、ある種の能力を普及・教育する際のレトリックとして、ヘンドリックスもこの「リテラシー」という発想に着目したのである。一方で、本稿で確認したように、メンタルヘルスに関する能力は、個人に帰属する「予防」的発想だけでなく、地域社会や対人関係のネットワークの中で実現される「予備」的発想からも検討する必要がある。フォーカシングが、元々はコミュニティ・ウェルネスを志向していたことから、フェルトセンス・リテラシーを「予備」というレトリックから検討することは有益な試みで

あろう。

伊藤(2020)のいう「予防」とは、失敗やネガティブな出来事が生じないように未然に防ぐ策を講じることであった。レトリカルに言えば、例えば水難などで溺れることのないように、水辺に近づかないこと、水難などで海の危険を事前に伝えておくことや、溺れている人を見つけた際にどうすればいいかを教育するなどが想定される。これに対して「予備」は、ネガティブな出来事が起こるのをある程度許容し、それが決定的な失敗にはならないように備え、安心感を持てるようにしておくことであった。これはいわば、もしもの時のための「着衣泳」を覚えること、水面での安全な浮かび方を知っておくことなどが想定されるだろう。水辺に近づかなければ溺れることはないが、それでは実際に溺れたときにうまく対応できる(泳げる)能力は身につかないとも言える。リスクについて知ることと、リスクを避けることは、必ずしもイコールではない。

岡村はフォーカシングを「うまく悩むコツ」と表現しているが(「夢ナビTalk, 2020」)、フォーカシングはフェルトセンスを活用することにより、自身の問題や現在の状況の「悩み」との新しい付き合い方を学ぶプロセスであると言える。いわば、「いかに悩まずに済むか」という予防的な視点ではなく、「問題が悩みが生じたときに、その悩みといかにうまく付き合い、上手に悩むことができるのか」を志向しているのがフォーカシングなのである。溺れることに備えて泳ぎ方を覚えるように、悩みに備えてうまく悩む方法を練習しておくことは、「予備」的発想によるフォーカシングと言え、これは「悩むことのできる環境」、「悩むことのできるコミュニティ」を許容するという視点を含んでいる。

もちろん「うつは心の風邪」という表現がうつ病を一般的な悩みと同一視され軽視された経緯からもわかる通り、悩むことのリスクやその他のメンタルヘルスの知識などの「予防」的視点はメンタルヘルス・リテラシーにおいて欠かせない。先に指摘したように、予備的視点と予防的視点は相補的であり、その予防的にリスクを実感し、かつその上で、ウェルビーイングを感じられるよう、個人やコミュニティへ必要な情報や教育を提供することは、今日の心の健康教育において求められることであろうと考えられる。

土井(2015)は「臨床心理士の強みは、体験型ワークを実施できること」(p.43)であると指摘する。臨床心理士の業務には、「臨床心理学的地域援助」という心理教育やコミュニティ支援の要素が含まれているが、この体験型ワークという強みは公認心理師の業務でいうところの「心の健康教育」においても同様であると言える。研修場面の多くの参加者が、メンタルヘルスを「自分とは関係のない話」と捉えられやすい中で(土井, 2015)、いかに「予防」的に、必要なだけの情報提供をリスクの「実感」を伴って

行い、かつ「予備」的にセルフケアだけでなく、ラインケアやコミュニティの中での相互的なメンタルヘルス・リテラシーを向上を提供できるか、その鍵となるが参加者自身の「体験的な学び」であると考えられる。今後は、心の健康教育の実践が、予防的な情報提供の場としてだけでなく、いかに予備的な体験型の学びの場となりうるのか、教育や研修のプログラムや方法論のさらなる検討を行っていくことが課題である。

利益相反

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

付 記

本研究は 2020 年度 神戸学院大学健康科学助成金研究助成事業の助成を受けて実施された（研究代表者：岡村心平「メンタルヘルスにおける『身体性 (embodiment)』に関する調査研究」）。

引用文献

Caplan, G. (1964). *Principles of Preventive Psychiatry*. New York: Basic books.

土井晶子 (2015). 産業臨床を目指す心理士に求められること——「メンタルヘルス研修」の立案と実施—— 神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要, 8, 39-44

Gendlin, E. T. (1981/2003). *Focusing (2nd)* Rider: London.

Gendlin, E. T. (1996). *Focusing-Oriented Psychotherapy*. New York: Guilford Press.

ギアツ, C. (著) 梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美 (訳) (1991). ローカル・ノレッジ 解釈人類学論集 (SELECTION 21) 岩波書店.

Hendricks-Gendlin, M. (2003). Focusing as a force for peace: The revolutionary pause. Keynote address for the 15th Focusing International Conference, Germany.

井原裕 (2012) 「こころの風邪」はうつ病ではない 最新医学 67 (3) pp.464-467

伊藤亜紗 (2020). 予防から予備へ: 「パーソンセンタード」な冒険のために 渡邊淳司・ドミニク・チェン (監修・編著) わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために BNN pp.147-157

Jorm, A. F., Korten, A. E. Jacomb, P.A. Christensen, H. Rogers, B. & Pollitt, P. (1997). "Mental health literacy": A survey of the public's ability to recognize mental disorders and their beliefs about the effectiveness of treatment. *Medical Journal of Australia*, 166, pp.182-186

Jorm, A. F. (2012). Mental health literacy: Empowering the community to take action for better mental health. *American Psychologist*, 67, 231-243

櫻原潤・河合輝久・梅垣佑介 (2014). うつ病患者に対するスティグマ的態度の現状と課題——潜在尺度の利用可能性への着目. 心理学評論 57 (4) pp.455-471

児玉壮志・志渡晃一・池田望 (2018). うつ病のメンタルヘルスリテラシーに関する系統的文献レビュー 社会医学研究 35 (2) pp.1-12

Muñoz, R. F., Mrazek, P. J., & Haggerty, R. J. (1996). . Institute of Medicine report on prevention of mental disorders: Summary and commentary. *American Psychologist*, 51(11), 1116-1122

中村菜々子 (2021). メンタルヘルス・リテラシー 久田満・飯田敏晴 (編) こころの健康教育 (コミュニティ心理学シリーズ 第 1 巻) 金子書房 p.86-97

日本心理研修センター (監) (2018). 公認心理師現任者講習会テキスト [2018 年版] 金剛出版.

岡村心平 (2016). 心理臨床とメタファー 池見陽 (編) 傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング ナカニシヤ出版 p.59-66

岡村心平 (2018). フォーカシングにおける交差の機能に関する研究: 心理療法・メタファー・なぞかけ 関西大学 学位論文 34416 甲第 685 号

佐藤信夫 (1992). レトリック感覚 講談社学術文庫.

東畑開人 (2020). 心理教育の人類学——予防・布教・マーケティング 榊原英輔・田所重紀・東畑開人・鈴木貴之 (編著) 心の臨床を哲学する 新曜社 pp.101-118

上原徹 (編) (2007). スキルアップ心理教育 星和書店.

渡辺洋一郎 (2009). うつ病はこころの風邪? 心と社会 40 pp.15-19

BBC News (by Harding, C.) "How Japan came to believe in depression" (<https://www.bbc.com/news/magazine-36824927>) (最終閲覧日: 2022 年 1 月 7 日)

厚生労働省「公認心理師法」(https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80ab4905&dataType=0&pageNo=1) (最終閲覧日: 2022 年 1 月 7 日)

厚生労働省「健康増進法」(https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=78aa3837&dataType=0&pageNo=1) (最終閲覧日: 2022 年 1 月 7 日)

厚生労働省「健康日本 21 (第二次)」(https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kenkounippon21.html) (最終閲覧日: 2022 年 1 月 7 日)

ナショナルジオグラフィック Web 版「研究室に行ってみた 研究者 松本俊彦 第 2 回 “覚醒剤やめますか? それとも人間やめますか?” の弊害」(<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/>)

web/17/040500003/040600002/) (最終閲覧日：2022年1月7日)

日本心理研修センター「令和3年版 公認心理師試験 出題基準・ブループリント」(http://shinri-kenshu.jp/topics/20210416_1938.html) 最終閲覧日：2022年1月7日)

特定非営利活動法人 ASK「薬物報道ガイドライン」(<https://www.ask.or.jp/article/8753>) (最終閲覧日：2022年1月7日)

夢ナビ Talk2021「岡村心平 自分の悩みという『な

ぞ』に興味をもち、それを探求するコツを知ろう」(https://yumenavi.info/lecture.aspx?University=V&SearchMod=4&SerKbn=3&ProId=WNF026&Page=1&GNKCD=g010212&Keyword=神戸学院大学&back=telemail.jp%2Fshingaku%2Fsmt%2Fdaigaku%2Fyumenavi.php%3Fgakkou_code%3D10001601&CLGAKOCD=016010&mxorder=&gakubunm=&gakkannm=&From=portal) (最終閲覧日：2022年1月7日)

—2022.1.30 受稿 2022.2.4 受理—

コロナ禍における学生の飲酒，ゲーム，SNS などの嗜癖行動

兵庫教育大学大学院学校教育研究科 野田 哲朗

松島 第 2 回の心理学部学術講演会を開催いたします。野田哲朗先生，どうぞよろしくお願ひいたします。

1 シーバーン災害としてのコロナ禍

野田 皆さんは，恐らく阪神・(淡路)大震災とか東日本大震災の経験はないと思います。私とか，恐らく松島先生も，阪神大震災というひどい震災を経験しています。ですから，これは傲慢に聞こえるかもしれませんが，災害については，大概分かっていると思っていました。しかし，今回の新型コロナウイルスというのは，新たな災害です。

どんな災害かというところ，「シーバーン災害」と言って，「C」が「化学 (chemical)」，「B」が「生物 (biological)」，「R」が「放射性物質 (radiological)」，「N」が「核 (nuclear)」，「E」が「爆発物 (explosive)」です。テロとか，そういった災害を想定して，こういうのを考えたらしいです。

この中で，今回「B」に分類されるはウイルスです。本当に未知のウイルスで，私たちも非常に恐怖におののきました。自然災害の場合は，被災者の人たちは本当に大変です。私も被災したときは本当に大変でしたが，その後，私は元気に災害支援に行ったりしていました。しかし，今回はみんな

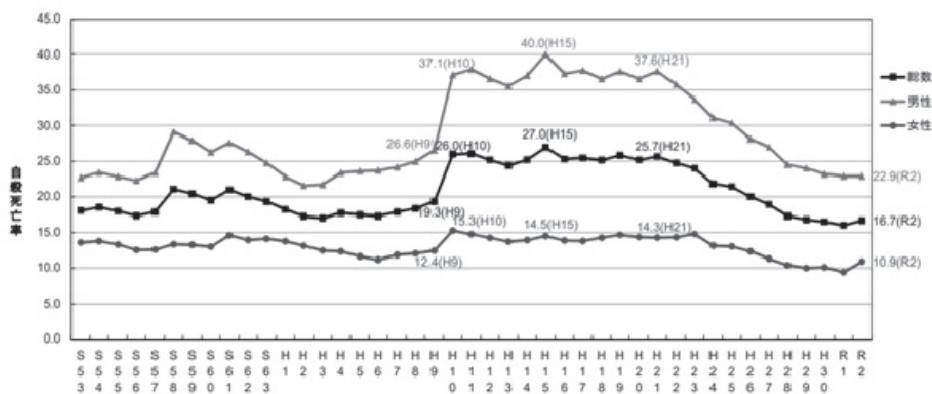
なが被災者になってしまいました。

特に学校では，私の大学でもそうでしたが，学生の感染を何とか予防しなくてはならないということと，自分自身も感染する恐れがあるということです。大震災だと，外部の支援者が被災地に行つて被災することはまずありません。でも，東日本大震災で発生した原発事故では，支援者も被災する可能性がありました。そういう災害をシーバーン災害と呼んでいます。

私はこれまでいろんな仕事をやってきました。精神科医でもあります。公衆衛生医として大阪府で自殺対策などもやっていました。1998 年辺りですごく自殺が増えていました。このとき，男性だけでも，16,416 人から 23,013 人に一挙に増え，増加者は中高年男性が占めました。

何とかこの自殺を減らそうと思って，いろんなことをやってきました。幸いこの 10 年ぐらひは下がってきていました。ところが，2020 年のコロナ禍で，一応，男性の死亡者数 (14,055 人) は横ばいですが，女性 (7,026 人) が増えました。

これは少しおかしいというか，理解が非常に難しいです。何が難しいかというところ，女性の自殺は経済問題にはあまり影響を受けることがありませんでした。



注「自殺死亡率」とは、人口10万人当たりの自殺者数をいう。

資料：警察庁自殺統計原簿データ、総務省「国勢調査」及び「人口推計」より厚生労働省作成

図 1 自殺死亡率の年次推移

皆さんは経験していないと思いますが、1990 年代の初めにバブルが崩壊します。「リストラ」という言葉があって、簡単に言うと、人員整理です。男にとって非常に辛いのは、やはり仕事を失うことです。そのときの影響がこの辺りに出てきて、「それで自殺者が増えたんじゃないか」と言われています。

ですが、一応、最近は安定してきていたわけで、下がってきていました。女性はあまり変わらず、女性も一緒に減ってきていたのですが、去年は女性の死亡率が上がってしまいました。

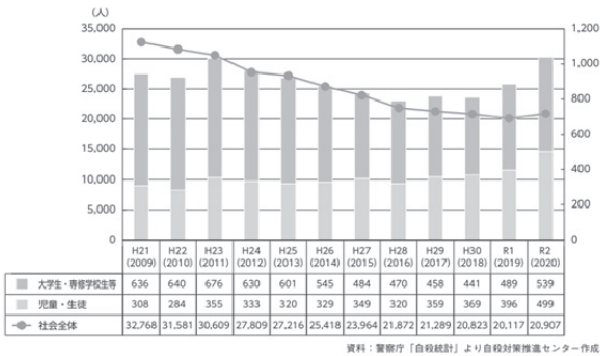
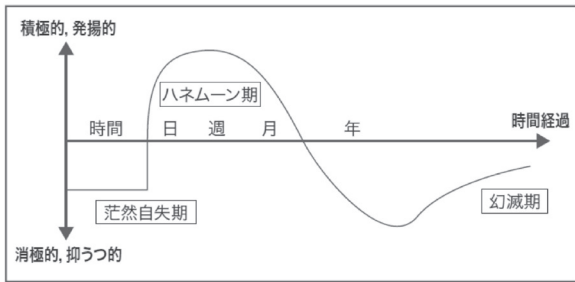


図2 学生・生徒の自殺者数の推移

特に気を付けなくてはいけないのは、学生・生徒です。小学生、中学生、高校生、大学生の自殺者が増えました。このピンク色（大学生・専修学校生等、2020年539人）の所や青色（児童・生徒、2020年499人）の所も増えています。本来、子どもたちの自殺は少ないですが、増えています。異常なことが起きています。



岩井圭司作

図3 災害反応の経過

これが一般の災害の反応です。大震災を例にしますと、最初はショックを受けて、茫然自失になるのですが、しばらくすると、言葉としてはあまり良くないですが、「ハネムーン期」や「ユートピア期」と言う時期が来て、みんな元気に頑張ってしまう。

私も阪神大震災で死ぬような思いをしました。私は芦屋（市）のほうに住んでいて、死ぬのではないかと思うぐらいの地震被害を受けました。最

初は、本当に茫然自失です。大阪の実家に一度避難したのですが、当時私は大阪府の職員だったので、「被災地の灘区を支援してください」との指示が出て、本当に、何が起きているのか分からない所に入っていました。

こんなことを言うと非常に失礼だけど、親族が亡くなって皆さん茫然自失状態がずっと続いているのかと思っていたら、結構元気にされているんです。それは、何とか頑張って生き延びていこうという、一つの反応だったんですね。

でも、その状態がずっと続いてしまうと、幻滅期になって、いろんな病気になってしまいます。実は、自殺は、こういった大きな震災があっても、すぐには起きません。阪神大震災のときも、2年か3年後に、「若干男性が増えたな」というデータが出ています。東日本大震災でも、最初はそんなに増えていませんでしたが、しばらくしてから増えました。でも、それほど顕著には増えていません。

ということで、コロナ禍での自殺というのは、想定外でした。つまり、ハネムーン期がありません。特に、皆さん覚えていますか。2020年の4月、5月の第1回目の緊急事態宣言のときは、もうどうなるのかなと思いませんでしたか。このときは結構つらいです。あとでこの辺のデータをお見せします。

2 コロナ禍と学生のメンタルヘルス

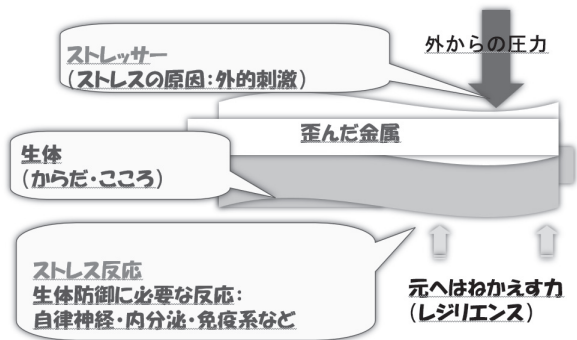


図4 ストレッサーとストレス反応

皆さんはストレスの勉強をされていると思いますが、この概念を覚えておいてください。金属に例えて、外からの圧力を「ストレス」と言います。ストレスで金属がゆがみますが、元へ跳ね返す力を「レジリエンス」と言います。

実は、私は、先ほど講演会場を間違えて、「えらいことやってしまったな」ということで、すごいストレスを感じました。焦っていたので運転が危なかったです。ポートアイランドのキャンパスから、今はハーバーランドの私の大学のキャンパスに来ているのですが、自律神経がやられたの

でしょう。胃が痛い。これはストレス反応です。ということで、今、胃が痛いような状況で、皆さんに話しています。

今までこんな研究をしてきました。あまり大学の名前を出すと良くないので、近畿圏内の3大学で、今まで4回調査をやってきました。ですが、回答率はどんどん悪くなります(49.2%→36.9%→32.6%→29.8%)。

この1回目と2回目の調査したものを、つい最近、英語の論文にしました。これはオープンで手に入りますので、もし興味がありましたら、読んでください。1回目、2回目のデータをまとめた論文です。

皆さん、「K6」は習いましたか。これは、国民健康栄養調査にも使用されているうつ・不安障害スクリーニングテストです。私は、東日本大震災の被災地支援を、コロナ禍になるまでは、年に1,2回行ってました。この「K6」は、アメリカのケスラーと言う人が作った尺度で、これは非常に簡便ですが、非常に精度が高いです。

K6使って、点数の高い人に対して介入するというのをやってきました。皆さんもやってみてください。

表1 K6 うつ不安スクリーニングテスト (K6)

過去30日の間にどれくらいの頻度で次のことがありましたか

	0点	1点	2点	3点	4点
1 神経過敏に感じましたか	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
2 絶望的だと感じましたか	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
3 そわそわ、落ち着かなく感じましたか	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
4 気分が沈みこんで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
5 何をしても骨折りだと感じましたか	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
6 自分は価値のない人間だと感じましたか	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも

引用：大野裕他「一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究」(平成14年度厚生労働科学特別研究事業)

例えば、「1. 神経過敏に感じましたか」で、「全くない」は0点、「少しだけ」は1点、「時々」は2点、「大抵」は3点、「いつも」は4点です。ほかに、「2. 絶望的だと感じましたか」、「3. そわそわ、落ち着かなく感じましたか」、「4. 気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか」、「5. 何をしても骨折りだと感じましたか」、「6. 自分は価値のない人間だと感じましたか」の全部で6項目です。

どうでしたか？

点数を足しても5点以上あると問題です。10点以上だと、鬱・不安障害が疑われ、13点以上だと、重度の不安障害が疑われることとなります。

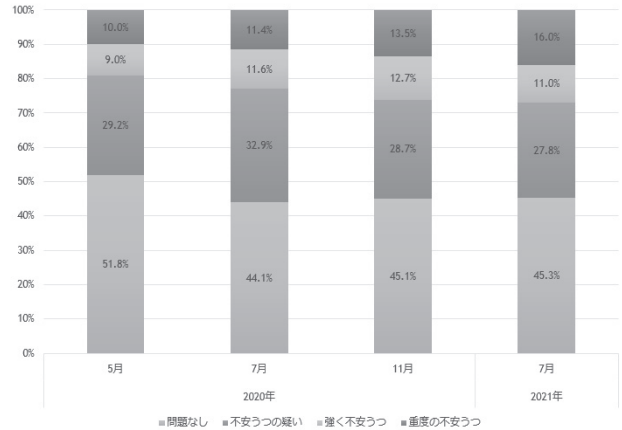


図5 K6 重症度の推移

先ほどの「K6」です。2020年の5月が緊急事態宣言の1回目です。これから何が起きるのだろうかというときです。そのあとも3回調査をしています。

赤い所を見てください。最初(5月)は重度のうつ不安が10.0%でしたが、だんだん増えてきました。特に、2020年の11月、これは後期の授業中ですが、一年生とか、今年二年生の方は本当に気の毒です。学生らしい生活ができなかったと思います。ですから、後期はどうかと思って調べてみたら、やはり重度のうつ不安障害を示す割合が高い(13.5%)のです。

そして、2021年の7月です。今年3回目の緊急事態宣言が、5月から6月にかけてありました。それが明けたあとに採ってみました。そうしたら、やはり16.0%となり、高いのです。これは、13点以上の人たちです。先ほどのテストで13点以上ある人は、若干心配なので、早めに相談してください。

これは意外と気が付きません。私は、兵庫教育大学の学生に関しては、去年から学生に、「しんどかったら相談してね」と言って、点数の高い人々にはメールを送りました。そうすると、「しんどいです」というメールを送ってくれました。もともと繊細な人、しんどかった人が、このコロナ禍でしんどくなる傾向にあります。

私はZoomでもカウンセリングをやっていましたが、希死念慮が出てきている人が少しずつ居ます。そういう人たちは、やはり早く病院に行ったほうがいいので、そう勧めたりしていました。メンタルなことは、自分では意外と気が付きません。だから、もし、気が付いた人が居れば、早めに相談してください。

多くの学生は何を思っているかという、恐怖感や怖いと感じている人たちも居ますが、やはりストレスを感じている人が多いです。「新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐための日常の変化についてストレスを感じる」：「非常によく当てはま

る」15.2%)。今、日常生活が大変で、これは教員も大変です。学生さんにうつしてはいけませんので、Zoomでの研修会をやったり、授業を工夫しなければいけません。今までこんなことはやったことはありません。教員にとっても大変ですが、学生も大変です。こうしたCOVID-19への意識がK6の点数に関係しているというのが、私のデータです。

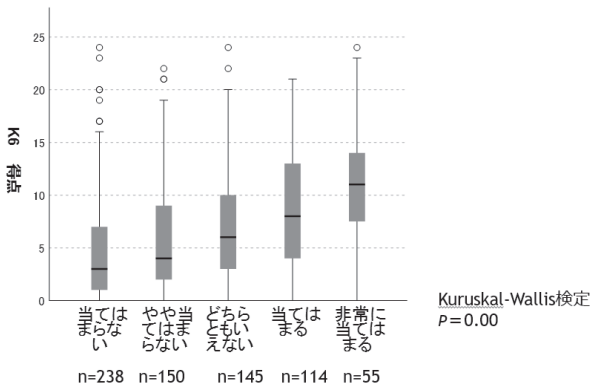


図6 保護者と自身の収入減と K6 の関係 (2021 年 7 月)

今回、7月にやってみました。親御さんの収入とか、バイトができなくなって収入が減りました。そうすると、収入減が非常に当てはまる人ほどK6得点が高くなります。皆さんは統計を習っていると思いますが、K6点数は正規分布していませんのでKuruskal-Wallis検定をやりますが、「当てはまらない」という人たちは、親の経済も自分の経済もあまり問題ないけど、「非常に当てはまる」という人たちがどんどん増えていっています。親や自分の経済問題がK6を上げることがわかりました。

また、オンライン授業についての捉え方については、いろいろありました。「対面で授業を受けたい」と言う人と、「自宅で授業を受けているほうが楽だ」と言う人と両方居ますが、全体の700人ぐらいで見ても、「授業形態の変化に付いていけない」と言う人もかなりいました。

アルコールとか喫煙も調べましたが、あまり影響はありませんでした。今の若い人は、飲酒、喫煙する人が少ないですね。ただ、先ほどの英語にした論文では、2020年の最初の緊急事態宣言中に、たばこを吸えないということで、ストレスが上がっていた人が居ました。恐らくですが、普段吸っている人が緊急事態宣言で吸いにくい状況になると、やはりストレスが高くなると思います。

今、最近は若い人「飲まない」と言いましたが、アルコールは危険な物質なので、体質的に合わない人にとっては危険な飲み物です。若いときから、飲み方がおかしいという人が結構居るので、もし、飲み方がおかしいことを自覚したらやめないと駄目です。気を付けてください。

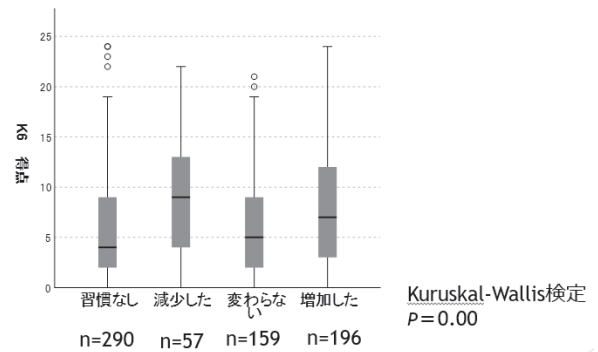


図7 緊急事態宣言後のゲーム時間と K6 の関係

ゲームに関しては、これも不思議です。「習慣なし」を参考値とすると、「減少した」とか「増加した」という人たちもストレス反応のオッズ比が上がります。これは何なのでしょう。一つは、できなくなるような状況になってしまっていて、しんどくなるというのも考えられるし、やはり鬱状態になってしまっていて、できなくなるということも考えられます。

だから、どちらが先か分かりません。鬱状態になってゲームができなくなったのか、ゲームをやっているけど何かしんどくなってやれなくなったのか分かりませんが、いずれにしても、「増加した」よりも「減少した」と言っている人のほうが多いです。

ゲームは基本的には悪いものではありません。これによっていろんな人と付き合えますし、空間認知が良くなるという研究もあります。最近では、ゲームで、いわゆるADHD、注意欠陥・多動性障害の人たちの治療に使ったり、私たちの精神科では、統合失調症とか認知症の患者さんに、ゲームを使って認知機能を良くするみたいなこともやっています。決して悪いものではありません。

見てみますと、増加してしても減少しても多いです。つまり、上手に使ってほしいということです。

SNSですが、これも「減った」と「増えた」で上がります。これは2021年の7月の段階ですが、皆さん、コロナ禍で人と会えなくなります。そうすると、このSNSというのは、一つの頼りです。恐らく、ゲームもオンラインでやるでしょう。そうすると、仲間ができたり孤独が減ったりして、うまく使っていればいいツールだと思います。SNSもそうです。

今、ゲーム障害は病気として認められるようになりましたが、SNSは、まだ病気としては認められていません。ただ、私自身、SNSはすごく使っています。ほとんど依存状態です。どうでしょう、皆さんもそうじゃないでしょうか。どこからが障害かということですが、生活や職場で支障が生じ

ると障害ということになります。

いいものも採ってみました。読書はそんなに問題はありません。ただ、依存症はあります。私、大学の先生もやっていますが、精神科医としては、主に、アルコール、薬物、ギャンブル、そういったアディクション系の治療を中心にしています。そうすると、読書依存症の人も居ます。本ばかり読んでいて、家族が怒るとか、そういうのもたまにあるけど、ほとんど問題になりません。これも、むしろ減少すると良くないわけです。やはり鬱状態になってしまって、恐らく読めなくなったのではないのでしょうか。

本を読むのは大変なことです。今、皆さんはどうでしょうか、本をあまり読まなくなりましたでしょう。SNSとかツイッターとかを使っている人は多いと思いますが、今は300字以上になると、もう読まなくなる。「今、本が本当に売れなくなっちゃった」と本屋の人が言っています。

いずれにしても、読書時間が「減少した」というのは、ひょっとしたら、鬱状態になっているのではないかという、一つの指標になると思います。

PTSDを皆さんはご存じですね。このPTSDは、もとは「戦争神経症」と言っていました。今日は戦争の話をしているとややこしいので、深くは話しませんが、「死ぬような体験をしてしまうと、みんなおかしくなるよ」ということが昔から言われてきました。

皆さんは知らないと思いますが、ベトナム戦争が1975年に終わっています。そのときの帰還兵がおかしくなっていました。また、当時、DV、要するに、家庭内暴力とか虐待の問題が顕在化しました。それまでもずっとDVありましたが、「これはひどいよ」ということを女性とが言うようになったのです。また、大人たちは子どもの虐待に気づきだしました。

だから、「戦争神経症」という病名にせずに、「Post Traumatic Disorder」にしました。これが1980年です。これも心理の皆さんだったら知っていると思いますが、DSM-III（精神障害の診断と統計マニュアル）という診断基準に初めて入りました。

日本では、戦争がずっとなかったために、専門家の多くはPTSDにはあまり興味がありませんでした。だけど、阪神大震災のときに、こういう病気になるんだというのに気が付いて、その後、本格的に研究が始まりました。

今回、2020年の緊急事態宣言のときを思い浮かべてもらって、この「IES-R（PTSD評価尺度）」を記載してもらいました。これは、ネットで簡単に出てきますので、ぜひ調べてみてください。無料で使えます。

24項目ぐらいありますが、25点以上あると

PTSDの疑いということになります。2021年7月の段階で調べました。去年の4月、5月の緊急事態宣言は、やはり怖かったのでしょうか、PTSDの疑いが16.7%ありました。私は大人にも調査していますが、大人の調査でもこのぐらい出てきて、やはり多くの方が、緊急事態宣言はトラウマチックだったことが明らかになりました。

今、三つの大学で一緒に研究をしています。この大学は大阪の大学です。大阪は、緊急事態宣言とかコロナ禍の問題がとて大きくて、PTSD疑いの学生が多くなったのではないのでしょうか。実は、この二つは、どちらかに兵庫教育大学も入っていますが、兵庫県の田舎の大学ですが、どちらかという、2020年の4月、5月は、まだのんびりしていました。都会の大学の皆さんはどうでしょう。皆さん、去年の4月、5月、どうだったかなということ一度思い出してほしいです。

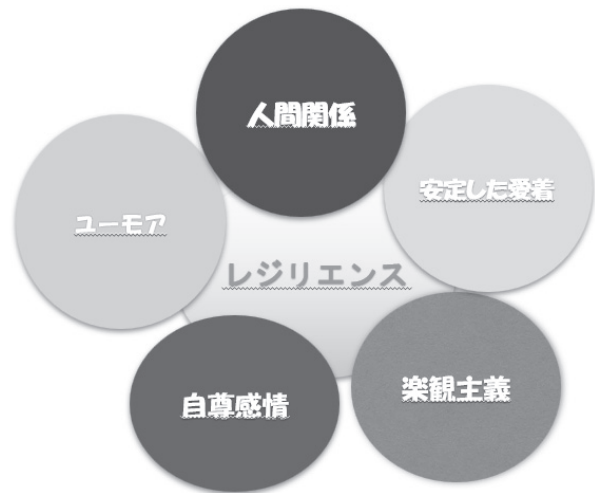


図8 レジリエンス

先ほど「レジリエンス」という概念を言いました。これも皆さん勉強していると思います。要するに抵抗できる力です。同じようなストレスがかかっても、何とか跳ね返せる人と、それでしんどくなる人が居ます。これも世界的に研究され始めたのは2000年前後だと思いますが、今も随分研究されています。

この図を見ると、いい人間関係とか、何でもユーモアに変えられるとか。私は、今日大きなミスをしましたが、とてもユーモアに変える気にはなりません。最近少し失敗が多いので、これはまずいなと思って、自尊感情がだんだん低下しています。なぜか失敗が多いです。少し疲れているのかもしれませんが。

今、私たちは、「この『愛着』という言葉を使うのはあまり良くないね」と言い始めています。なぜかという、子どもがうまくいかなかったら、「親

の愛情が足りないから」なんて簡単に言って、私たち専門家は親御さんを非難するということをしてしまいます。「これは『アタッチメント』という言葉にしておいたほうがいいね」と言っています。ボウルビィが「アタッチメント」を言い出したのですが、「日本語訳が良くなかったのではないか」と言っています。

要するに、何かうまくいってなかったら、愛情が足りない。もう、親は親で一所懸命頑張っていたりします。でも、「足りない」と言われたら、「どうしたらいいの？」みたいな。むしろ親御さんを苦しめる言葉でもあるので、「これは少し気を付けて使おうかな」と言っています。

やはり子どものときに、あまりいい成育環境じゃなかった人たちは、人を信じられなくなりますし、なかなかユーモアに変えられなくなりますし、失敗ばかりして怒られてばかりいると、自尊感情が育たなくなります。

今回大変でした。コロナ禍で 2020 年から、文科省が、「リモート授業でいいから、課題を出してください」と言うので、課題を出していたら、2020 年の 4 月、5 月、6 月、前期の学生たちは、課題を全部こなさなくてはいけないと思って、まじめな人ほどしんどくなってしまいました。

発達障害の方は、怒られてばかりいるので自尊感情が低下します。私は、学生をできるだけ怒らないようにしています。特に、人前で怒ると、自尊心がすごく下がってしまいます。だから、叱るときは、本当に気を付けて叱らないといけません。何かあったら、個別に注意するとか、そんな形でやっていかないと、このレジリエンスが下がってしまいます。

このレジリエンスですが、「日常生じる困難や問題を理解したり予測したりできる」という予測可能性です。皆さん、これはどうですか。「全く当てはまらない」、「やや当てはまらない」、「どちらかといえば当てはまらない」、「どちらとも言えない」、「どちらかといえば当てはまる」、「やや当てはまる」、「非常によく当てはまる」。点数で言いませんが、自分がどの辺りか覚えておいてください。

「日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができる」は、問題解決能力です。これも自尊心が高い人は、何とかやれるのではないかと思います。私は先ほど大失敗して、パニックになって、「3 時の段階で、これからそちらのキャンパスまで、どうやって行くのよ」みたいな。そんなときに、松島先生が、「Zoom でやりましょう」と言ってくれたので、「ああ、助かった」と思って、急いで、このハーバーランドまで車で走ってきました。何とか解決策を見つけられました。

「人生で生じる困難や問題の幾つかは、向き合い、取り組む価値があると思う」は、失敗しても、こ

の問題は向き合って取り組む価値があるか、そう思えるかどうかです。

この 3 つの項目を **Sence of Coherence** (首尾一貫感覚)、すなわち **SOC** は、レジリエンスとほぼ同じ意味になるだろうと私は捉えています。イスラエルのアロン・アントノフスキーと言う人が 1970 年代ぐらいに言い出しました。

アウシュビッツなどの強制収容所からの生還者を研究して出てきた概念です。非常に嫌なことで、心理とか精神医学をやっていく人間にとっては、ナチスの犯罪行為の勉強は欠かせません。本当にひどいことをやりましたが、いろんなことを教えてくれます。

アントノフスキーは、強制収容所から解放された人たちの中で、元気な人はそんなに居ないと思えますけど、何とかやっていける人と、もうへなへなになる人が居て、その違いの研究をしています。

「把握可能感」、「処理可能感」、「有意味感」の 3 項目です。日本人が世界的に簡単にしようとして 3 項目にしました。要するに、問題を、こんなことが起きると把握できるかという「把握可能感」、何かあっても、何とかできるという「処理可能感」、そして、失敗とかミスがあっても、これに対して意味を持ち、感じられるかという「有意味感」です。今まで研究してきましたが、この 3 項目が高い人は、やはりストレス反応が少ないです。

3 アディクションについて

アディクション(依存症)が今日、大きな課題になっています。「アディクションになる要因」というのを、取りあえず押さえておきたいと思えます。一つは、体質があります。先ほどお酒の話をしました。アルコールも、飲めない人は本当に飲めませんが、飲める人の中でも、最初から体質に合わない人、飲んで暴力的になる人が居ます。

私の精神科医としての仕事の一つに「司法精神医学」があります。事件があって、動機が奇妙なとか、理解しにくい事件があると、精神鑑定をやります。それを頼まれてやりますが、その中で、アルコール犯罪はかなり多いです。日本だけでなく世界的にアルコールについては、厳しいので有罪になりますが、本人は全然覚えていない、いわゆる「ブラックアウト」が起き、その間に興奮状態になって、人をど突いたりします。いわゆる「酒乱」というやつです。これは厳密に言うと、私は、罪に問えないと思っていますが、社会は非常に厳しいので、罪を問います。ですから、体質的に合わない人というのがいますが、これはどの依存症に対してもそうです。ゲームに対してもそうだし、いろんな薬物がありますが、薬物に関して、体

質的に合わない人というのがいます。それと、やはり家庭環境です。今日は、この辺の研究のことも、あとで話します。

まず、依存性のあるもの、例えばお酒とかゲームがあるわけです。だから、これがなければ依存症にならないかという、何かの依存症になる可能性はあります。例えば、イスラム教の国は、酒を提供していませんし、飲んではいけないことになっていますが、ほかの依存になったりする人が居ます。違法薬物に手を出したりとか、そういった方向に行くことがあります。

だから、本人はいろいろ選べるのに、こちらに行ったのではなく、体質や環境で依存症になってしまうので、自己責任の病とは言えないと、私たちは言っています。

アルコール依存症になってしまった人は、最初から、飲み方がおかしい人が多いです。体質ですね。普通に飲んでいてなってしまう人も確かに居ますが、それも気の毒です。

例えば、ラットパーク実験というのがあります。これは、追試をしたらそのような結果にならなかったという批判もありますが、興味深い実験です。ネズミを楽園のような所と孤独な環境のところに置いて、麻薬のヘロインを与えます。楽園のネズミは全然ヘロインを使いませんが、孤独なネズミは使ってしまいます。ですから、環境が良ければ、依存性薬物なんか使わないということになります。そういったラットパーク実験というのがあります。つまり、アディクション形成には、社会的な要因が大きいということです。

皆さんは「巨人の星」という漫画を知らないでしょう。人間の価値観はどんどん変わってきます。アメリカで虐待が問題になりだしたのは、1960年代ぐらいです。親が子どもをど突くというような子どもへの暴力は、実はずっと昔からありました。

「巨人の星」には星一徹と言う父親がいて、息子の星飛雄馬がいて、お姉さんがいます。漫画では、星一徹が家で飛雄馬をなぐってます。こういう漫画を見ても、当時は、普通だなと思っていましたが、今だと、これはもう家庭内暴力です。星一徹はすごいスパルタ教育で飛雄馬を巨人の星に育てていくのですが、当時は何もおかしいと思いませんでした。

一つの絵では、星一徹はお酒を飲んでいます。ちなみに、星一徹はアルコール依存症になっていたかもしれません。調べましたら、星一徹は、戦争に行っている設定になっています。先ほどベトナム戦争の話をしました。PTSDというのは、自分ではほとんど気が付きません。だけど、アルコール依存症とか薬物依存症になって、精神科医療機関を訪れます。

ですから、私たち専門家が見つける必要があります

ます。PTSD 自体はかなり存在すると思いますが、気づくことなく、ずっとつらい思いをしている人が多いわけです。その中には、アルコールや薬物にはまってしまっている人がいるということです。



Felitti, 1998

図9 児童期の逆境体験 (ACE)

18歳までの児童期の逆境体験が成人後のメンタルヘルス、心身の状況に影響を与えることを1998年にアメリカ人のフェリッチが報告しました。子どもの時にこういうしんどい経験をする、「社会的・情緒的・認知の障害」とか「健康リスクのある行動」、これが薬物だったりアルコールだったりします。そして早死にしてしまいます。

アルコール依存症という病気があります。先ほど、「若い人たちは、最近お酒を飲まなくなった」と言いましたが、実際、こういう逆境体験を受けて、しんどくなってしまって、早く依存症になっている人も居ます。恐らくお酒が体質的に合わなかったんだと思いますが、私は、20代の学生も患者さんで診ています。

アルコール依存症という病気になると、平均死亡年齢が50代ぐらいです。

「ACE (逆境的小児期体験)」は10項目あって、その項目数の該当数が多いほど、アルコール依存症になったり薬物依存症になりやすくなるといわれています。

私の自慢話をします。(「児童期の逆境体験(ACE)が青年期以降のメンタルヘルスに及ぼす影響についての横断的研究—嗜癖傾向に着目して—」)は、皆さんの先輩にあたる北村くんが、兵庫教育大学大学院に来てくれて、私のゼミ生になってくれて、大学院を卒業してからすぐに論文にして投稿して、ストレス学会の学会賞を受賞しました。学会誌は査読があり、なかなか通らないものですのでこれはすごいことです。

彼のやってくれた研究ですが、これは兵庫教育大学の学生に、最初入学のときに採りました。大学院生とか、305人が協力してくれました。今はデータを採るときは、LGBTQの皆さんが居るので、性別で「答えたくない」という人も居ます。日本の

場合は、ACE スコアが 1 点以上は、全部で 23.9% です。アメリカはこの辺りがむしろ逆転しているぐらい多いです。

	男性全体 (n=128)	女性全体 (n=175)	全体 (n=303)
身体的虐待	2 [†] (1.6)	4 [†] (2.3)	6 [†] (2.0)
心理的虐待	0 [†] (0.0)	9 [†] (5.1)	9 [†] (3.3)
性的虐待	1 [†] (0.8)	3 [†] (1.7)	4 [†] (1.3)
心理的な養育の放棄	5 [†] (3.9)	6 [†] (3.4)	11 [†] (3.9)
家族構成員のアルコールや薬物の乱用	4 [†] (3.1)	3 [†] (1.7)	7 [†] (2.3)
家族構成員の被暴力的扱い	11 [†] (8.6)	17 [†] (9.7)	28 [†] (9.5)
家族構成員の精神疾患や自殺	8 [†] (6.3)	11 [†] (6.3)	19 [†] (6.3)
両親の離婚別居	18 [†] (14.2)	11 [†] (6.4)	29 [†] (10.0)
身体的な養育の放棄	2 [†] (1.6)	2 [†] (1.1)	4 [†] (1.7)
家族構成員の服役	0 [†] (0.0)	1 [†] (0.6)	1 [†] (0.3)

注) 欠損値があった等の理由で2名を除外, ()内は%

北村, 野田: 小児期の逆境体験(ACE)が情緒的およびメンタルヘルスに及ぼす影響, ストレス科学, 2020

表 2 ACE の各項目の経験有の度数と割合 (全体, 男女別)

10 項目あり身体的暴力とか、精神的暴力とか、性的被害も結構あります。例えば、「あなたの父、母、あるいは同居する大人（両親以外）にアルコールや薬物乱用者が居ましたか」とか、「あなたの家族に慢性的な鬱病の人が居たり、精神病を患っている人が居たり、自殺の危険のある人が居ましたか」とか、「あなたの両親は離婚、別居をしましたか」と聞きます。

また、離婚とか別居は決して悪いことではないけど、子どもにとっては大きなトラウマになります。あとは、ネグレクトとかです。

ACE スコアが高い人ほど注意が必要です。男性と女性で違います。男性は、抑鬱（よくうつ）、不安、過敏とかで高いです。また、嗜癖（しへき）問題、アルコールとか、そういった問題にも関係してくるということを論文の中に書いてあります。女性の場合、大学院生も居ますので、「10代・20代」で不安・過敏が高いです。

「メンヘラ」という言葉がはやっていますが、若いときは、より繊細だし、精神的に不安です。特に、コロナ禍で先行きが分からないでしょう。だから、今も調べていて、将来に直面している四回生の皆さんがしんどそうです。

今、「トラウマ・インフォームド・ケアをはやせましょう」と言っています。みんなでトラウマに気を付けましょう。心理をやる皆さんは、ぜひ、この概念を知っておいてください。何がトラウマになるかというのは分からないのですが、私たちは、トラウマを見る視点を育てる必要があります。

「目の前の支援を必要としている人が、もしかしたらトラウマを有しているかもしれないという視点を持って対応する」。例えば、私たちは、今まで安易に、課題をしてこない学生に「課題をちゃんとやってこい」と怒ってきました。でも、ちゃんとやれない人は、ひょっとしたら何か障害があるのではないかと、トラウマがあるのではないかと気

づく必要があります。特に、ADHD 系の方は、なぜか時間どおりにできません。ですから、もし周りや本人が学生の障害に気が付いたら、そういった人たちが何かうまくいなくても、怒るのではなくて、支援する方向で見えてあげる必要があります。これがトラウマ・インフォームド・ケアです。これを何とか、「特に、小学校、中学校、高校ではやらせたいな」と、今頑張っています。

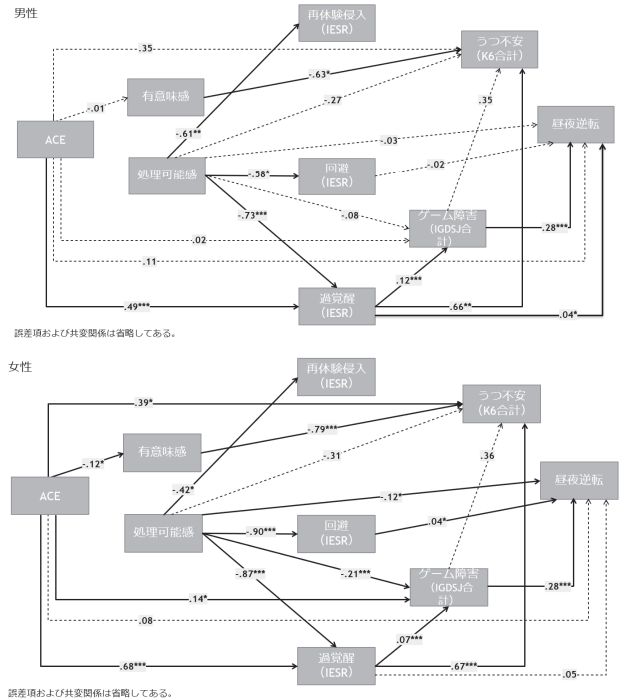


図 10 K6, ACEs, IGDS-J, IES-R, SOC 関係のパス図

先ほど、K6 は資料で見せました。この K6 に対して、ACE 点数とか、ゲームとか、PTSD とか、この「SOC（センス・オブ・コヒアランス）」は何かというと、「レジリエンス」で、先ほどの首尾一貫感覚です。これが高い人ほど K6 が低いです。

男性と女性では少し違っていて、ACE 項目は、男性は過覚醒です。もう眠れなくなる、頭がいつもかっかくなるという、これにすごく影響を与えています。子どものときからあまりいい環境で育たないと、こちらに来て、ゲーム障害になります。また、昼夜逆転の人は、メンタルヘルスが非常に悪いです。だから、ゲーム障害になっていて昼夜逆転になるという、この図ではそういうふうになりました。

女性は、より問題が多いです。先ほどの ACE 得点が高いと有意味感が低くなります。自分のミスとか失敗といったものに意味を持ってない。また、過覚醒が強くなります。PTSD で一番困るのは、過覚醒は、いつでもそわそわしていて落ち着かない、眠れない、悪夢を見るといった状態をつくります。そして、ゲーム障害 (IGDS-J) のほうにも行きます。簡単に言うと、ACEs が鬱にも関係してくるとい

ことです。

とにかく、こういったことで、学生のメンタルヘルスが非常に悪くなっています。今回、喫煙、飲酒と鬱不安レベルの関係は認められませんでした。ゲーム時間、SNS使用時間は、増加していても減少していても駄目です。緊急事態宣言は、非常にトラウマティックイベントでした。こういったところも注目してほしいということです。

4 究極のアディクション？スマホ・ゲーム障害

アディクションの中で、特にスマホ・ゲームについて話します。電車に乗るとみんなスマホを見ている。私もそうです。嗜癖という概念ですが、気分を変える目的のために、ある行動が強迫的に繰り返す現象です。これからカジノが作られます。大阪ではつくりたがっているようです。私たちは、こういうのをつくとアディクションが増えるので、反対だけど、「つくる」と言い出したら仕方がありません。何とかそういう病気にならないように予防していくしかないと思っています。

今までは、物質アディクション、酒とかたばことか薬物、これは依存性があるから分かりやすいです。プロセスアディクションは行動嗜癖です。今、病気として認められているのは、このギャンブルです。これは「DSM-5」で認められるようになりました。ゲームは、今度「ICD-11（国際疾病分類第11版）」という診断基準で認められるようになりました。

そのほか、例えば、SNSは今のところ分かりません。依存性はありますが、どのくらい障害が出ているかが今は分からないので、まだ病気としては認められていませんが、どんどんいろんなことが病気とされていきます。

実は、兵庫教育大学の大学院生が調べてくれましたが、今、ポルノも研究されています。性依存の問題、実は、痴漢行為も嗜癖に近いです。これは、被害者が出ているので、アディクションという見方だけでは済まないところがあります。だけど、こういったものが、これから病気という視点で見られていくかもしれません。皆さん、興味のある人は、ぜひ、この辺の研究もやってください。

このスライドに「物質依存」と書いてあります。これは「物質嗜癖」という言葉を使ってもいいですが、取りあえず、「行動嗜癖」のほうを「嗜癖」というふうにしておこうかと、今のところ学会では言っています。面倒くさいので、全部「依存症」と言ってもいいですが、「依存症」は少し古い言葉になりつつあります。どちらかというと、今は「アディクション」という言葉が主流になりつつあります。

皆さん、これから生きていくのも大変です。「シンギュラリティー」という言葉は知っていますか。本当かどうかは知りませんが、2045年に、AIが人間の知能を抜いてしまうそうです。

「ソサエティー5.0」という言葉をご存じですか。狩猟社会から、農耕社会、工業社会、情報社会、そして、将来的に目指しているのは、AI、ITで生活が豊かになる超スマート社会です。

コロナ禍になってなかったら、オンライン授業はまだまだ主流になっていなかったと思います。コロナ禍でZoomで授業をするようになり、図らずもSociety5.0社会が進んでしまいました。

しかし、若い人にとってこれからの社会は決して楽ではありません。なぜかということ、AIで消えていく仕事がたくさんあるからです。例えば、弁護士とか裁判官は超エリートですが、要らなくなるそうです。ですから、皆さんはどの仕事を選んだらいいかの選択が大変です。

大学教員が今後、必要になるのか不安です。なぜかということ、リモートで授業をやれます。私も兵庫教育大学で授業をやっていますが、ハイフレックスで、学校と自宅の両方で授業をやるようにしたところ、学生は学校にあまり来てくれません。

こうなってくると、東進ハイスクールの林（修）先生みたいな教え方がすごくまい人がみんなを教えたら、ほかはもう要らなくなってしまいます。「これはちょっとやばいね」と言って、私たち教員は危機感を感じています。

例えば、事務員が要らなくなって、ビッグデータの分析やAIの開発を手掛けるデータサイエンティスト、ゲームクリエイター、こういった所は要するというわけです。ゲーム問題に関係してきますが、こういうのを開発していくことによって、いろんなことができるようになります。要するに、物作りとか、とにかく高度なことをやれる人たちです。

あとは、幼稚園とか小学校の先生とかは、大事だから残るみたいですけど、「医者でも、AIでやれるような所は、もうどんどん要らなくなる」と言われています。歯医者さんは要ると思います。「こういった対人サービスは、意外と残るんじゃないか」と言われています。メディア関係など、こんな所も、これからもっと使われるのかもしれない。

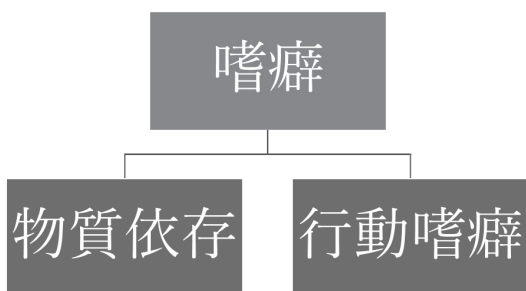


図11 嗜癖、物質依存、行動嗜癖

AIによって消える仕事が増えますので、どんな仕事を選ぶかも大変です。

「ゲーム自体、悪いものじゃないよ」と言いました。本来はいいものです。脳トレはできるし、教育にも使えます。ただ、ビル・ゲイツとか、Mac(マック)を作ったスティーブ・ジョブズは、自分たちでパソコンやアイパッドや 아이폰 を作ったりしているのに、「自分の子どもには、12, 3歳までは与えない」と言っていたみたいです。やはり彼らは、早期に子供に渡すとまずいということが分かっていました。

だけど、今はそういうことも言ってもらえません。Society5.0を目指すということで、小学校、中学校、高校で、児童生徒にタブレットを渡すようになりました。あれは、もっと先に渡す予定でしたが、コロナ禍の影響で、2020年に子どもたちに一挙に渡すことになりました。将来的には教科書も要らなくなって、タブレットで勉強することになります。

ですから、子供たちからタブレットを取り上げるのは無理ですし、スマホを取り上げるのも無理です。それでゲーム障害になると、もう大変なことになります。

最近、フェイスブックが「メタ (Meta)」に名前を変えましたが、フェイスブックを使っている人だけでも、全世界で30億人くらい居るらしいです。今、仮想空間は訳の分からない世界になってきています。皆さん、ビットコインとかイーサリアムといった仮想通貨は知っていますね。私は、何であんなものに価値があるのか分かりませんが、ゲームとかビジネスがこの仮想空間でできるようになり、ゲームで稼げるようになりました。

フィリピンはコロナ禍で経済状態が悪くなっていますが、「ゲームでお金を稼いで、家を建てている人も出てきた」と聞きます。だから、「ゲーム自体が悪い」と言っていられなくなりました。問題は、問題のあるゲーム使用者、つまり、ゲーム障害にならないようにするしかないということです。

エンタメとかショッピングも、何か訳が分からなくなっています。普通はタレントのキャラクター物を買ったりしますが、あれが仮想空間ですごいお金になっています。また、仮想空間で土地を買うとか、もう想像を絶していて、付いていかれません。ただ、これも付いていかないと仕方がない世界になってきています。

eスポーツをオリンピックの公式競技にしようという動きがあるそうです。今、ゲームを一所懸命に頑張っている人たちの中に、プロゲーマーを目指している人が居ます。今年のオリンピックを見ていて驚いたのは、スケボーです。あれは、昔は不良の遊びで、「何やってんの？」みたいな感じでしたが、それが今やオリンピックの正式競技になっ

ています。

もっと言えば、皆さんだったら、ビートルズはすごいと思っていると思いますが、私が子どものときは、先生が、「ビートルズなんて、あんな不良の音楽は聞くな」と言っていましたし、ボブ・ディランも不良に見えましたがノーベル文学賞です。ということで、皆さんの価値観は新鮮だと思えますが、私たち世代の価値観は、だんだん古くなっています。

危険なマッチアプリも気を付けてください。これも難しいです。危険なものはやってほしくないですが、特に、去年はコロナ禍で、今は学生が恋愛もできなくなって、結構アプリで知り合って、恋愛していることもあるらしいです。危険じゃないものはいいですが、危険なものはやってほしくありません。

ミクチャー。これは患者さんに教えてもらいました。今はお金を稼ぐのが大変です。こんなのを使ってやれとは言いませんが、若い人は先の方に行っています。こういった所に登録すると、一部の人は、音楽を演奏して投げ銭をもらえてお金になるそうです。今は経済状態がどんどん悪くなってきていて、経済状態が悪くなった人が何とかしようとしているわけです。バイトをしても、緊急事態宣言で飲み屋がやってなかったりして、どうやって稼いだらいいのか問題です。だから、一部の人はこういった方向に行っているみたいです。私は、これは、「いい」とは言いません。「危険なことはやめましょうね」ということを言いたいです。

例えば、藤井聡太くんはすごいですが、社会のためにどんなふう役に立っているのか、私には分かりません。藤井くんはAIを使って将棋の研究をしているそうですので、AIが藤井君に勝つように発達して行って、AIが進んでいくのかもしれない。

だけど、彼らみたいな人たちは、きっとオタクだったのでしょ。彼の棋士番号は307です。プロの棋士制度ができたのが戦後らしいですが、今まで307人ほどしかプロになっていません。もう亡くなっている人もたくさん居るから、今、現役で食えている人というのは、恐らく100人ぐらいでしょう。

今、子どもたちのなりたい仕事に、ユーチューバーとかeスポーツの選手があります。大人は、「そんなのは絶対無理だ」と言いますが、どうなんでしょう。一部の人はプロになって、社会のためになっているのでしょ。だけど、これはごく一部です。

例えば、高校野球も、先ほどの「巨人の星」も、あんなむちゃくちゃなことをやってプロになっていくわけですが、うまくいかなかったら、障害に

なってしまうかもしれません。だから、見極めが難しいなと思いつつながら、「何でも駄目だ」と言うのでは、伸びる人がつぶされてしまいます。

ちなみに、eスポーツで一番稼いでいる人は、10億円稼いでいるらしいです。2番目で6億円とかで、「何なの？」という感じです。こういう非常に複雑な社会になっています。

今、「ネット・ゲーム依存について考えよう」とか言っています。香川県だったら、条例を作って、1日何時間以上やっちゃいけないと。ただ、これを守れば先ほど言ったような、eスポーツの選手はつくれません。今、スケボーをやっている人たちは、きっと小さいときから危ないことをずっとやっていたのでしょ。それでオリンピックの選手になっているので、難しいです。規制、規制とやっていると、子どもが伸びないことになります。

一方で、明らかに言われているのは、ゲーム時間が4時間以上になってくると、成績が落ちてくるというデータも出てきているので、上手に使えるということです。

神経伝達物質について覚えておいてほしいと思います。特に、今日覚えておいてほしいのは、ドーパミンです。これは「快感神経伝達物質」とも言われています。セロトニンも覚えておいてほしいです。鬱病(うつびょう)とか不安障害の人たちは、セロトニンが少なくなります。ドーパミンというのは、どうも快感のあるときに過剰に依存が起きるのではないかとということです。

今、脳研究がいろいろ進んでいます。線条体という所からドーパミンが出て、側座核に行くのですが、そこでやる気が出たり、快感を得たりします。ゲーム障害、ギャンブル依存症はプロセス依存だけど、やっていると、線条体からドーパミンが出続けて、側座核を刺激し続けます。また、前頭前野の機能をドーパミンが低下させてしまいます。そうすると、コントロールがうまくいかなくなります。つまり、止まらなくて、どんどんやり尽くしてしまう。ですから私たちは依存症を「ブレーキが壊れた状態」と言っています。

皆さん、「覚醒剤は怖い」と思っていると思いますが、覚醒剤、メタンフェタミンはもともと日本人が合成して開発した薬物で、ぜんそくの薬に使おうとしましたが、強すぎて使えなかったようです。

今、ADHDという病気の薬に使われています。なぜかという、そういう人たちはドーパミンが少ないわけです。だから、神経伝達のシナプスという所からドーパミンが出て、どんどん伝達していきますが、これが足りないから、ここをブロックするのが、今の覚醒剤で、コカインも同じ作用があります。

どうもドーパミンの出が悪いから、ゲームやギャンブルをやるのではないかと。ですからADHD系

の人は、ゲーム依存症とかギャンブル障害になりやすいと言われるのです。

また、うそをつくというのも、この辺をやられると、「上手にうそをつくのがうまくなる」ということが言われています。

通常は辺縁系(欲望)より前頭前野(理性)の働きが優勢なのですが、ドーパミンが出過ぎると、前頭前野の機能が低下してきて、この辺縁系、すなわち欲望のほうが勝ってしまうということです。

アルコール依存症、ギャンブル依存症、インターネット依存症の人の脳画像を見ると、例えば、依存を連想させるような刺激を与えると、一定の所が同じように刺激されます。健常者は、普段それほど刺激しなくても、ある程度働いています。しかし、依存症になると、普段から刺激が足りないため、それを求めてゲームやギャンブルをやるという理論です。

ただ、この研究で気を付けたいのは、もともと依存症になる前のデータがないわけです。だから、結果なのか、もともとそういう人だから依存症になるのか。これはもう、悪魔の証明で、今のところ証明できていません。だけど、取りあえず、脳の器質的な異常があることが分かってきています。だから、病気だよということです。

今はスマホをみんな使っています。ゲーム障害になると難しいのは、これはもう、生活の糧になっているし、かつ、私もそうですけど、このスマホがないと不安になってきます。これは何なのでしょう。電話がかかってくるんじゃないとか、いろいろ不安になります。もう依存が来ています。ただ、問題は、生活や職場で支障が出るかということです。

コンテンツ依存は、オンラインゲームとか動画に対する依存です。動画は今のところ依存症として認められていませんが、私はフェースブックをやって、「いいね」がたくさん付くと気分がいいです。要するに、承認欲求が満たされるわけです。また、今は動画のほうでも頑張ってる、生活の糧にしている人も出てきています。

つながり依存は、ネットを介した他者との交流です。これも適度だったらいいはず。特に、今回のコロナ禍でみんな孤立化しているので、本来はこれは非常にいいわけです。ただ、ひどくなると障害になります。

フォートナイトがすごいらしいです。こういうシューティングゲームは、特に男性がはまりやすいみたいです。

次に予防と治療についてお話しします。

ゲーム障害の定義(ICD-11) Definition of gaming disorder (ICD-11)

臨床的特徴

- ゲームのコントロールができない。
- 他の生活上の関心事や日常の活動よりゲームを選ぶほど、ゲームを優先。
- 問題が起きているがゲームを続ける、または、さらにエスカレートさせる。

機能的障害

ゲーム行動パターンは重症で、個人、家族、社会、教育、職業やほかの重要な機能分野において著しい障害を引き起こしている。

期間

上記4項目が、12ヵ月以上続く場合に診断する。しかし、4症状が存在し、しかも重症である場合には、それより短くとも診断可能。

樋口進

図 12 ゲーム障害の定義 (ICD-11)

ゲーム障害の定義です。「臨床的特徴」が、「ゲームのコントロールができない」、「他の生活上の関心事や日常の活動よりゲームを選ぶほど、ゲームを優先」、「問題が起きているがゲームを続ける、または、さらにエスカレートさせる」。「問題が起きているでもやる、学校に行けなくなってもゲームをやる」ということです。

「機能的障害」が、「ゲーム行動パターンは重症で、個人、家族、社会、教育、職業やほかの重要な機能分野において著しい障害を引き起こしている」。「期間」が、「上記4項目が、12ヵ月以上続く場合に診断する。しかし、4症状が存在し、しかも重症である場合には、それより短くとも診断可能」です。

本当は12ヵ月以内でもゲーム障害としたいのですが、診断基準を作るときに、ゲーム業界から「ゲームにそんな依存なんてないよ」と反対があり、「何とかこれをもっと短くしたかったのですが、12ヵ月以上にさせられた」と、聞いたことがあります。

ゲームズテスト (GAMES Test)

過去12ヵ月について、以下の質問のそれぞれに、「はい」「いいえ」のうち当てはまる方に○をつけてください。最後の質問については、もっとも当てはまる回答を一つ選んでください。なお、ここでいうゲームとは、スマホ、ゲーム機、パソコンなどで行うゲームのことです。

	質問項目	回答	
		はい	いいえ
1	ゲームを止めなければいけない時に、しばしばゲームを止められませんでしたか。	1	0
2	ゲームをする前に意図していたより、しばしばゲーム時間が延びましたか。	1	0
3	ゲームのために、スポーツ、趣味、友達や親せきと会うなどといった大切な活動に対する興味が著しく下がったと思いますか。	1	0
4	日々の生活で一番大切なのはゲームですか。	1	0
5	ゲームのために、学業成績や仕事のパフォーマンスが低下しましたか。	1	0
6	ゲームのために、昼夜逆転またはその傾向がありましたか(過去12ヵ月で30日以上)。	1	0
7	ゲームのために、学業に悪影響がたり、仕事を危うくしたり失ったりしても、ゲームを続けましたか。	1	0
8	ゲームにより、睡眠障害(朝起きられない、眠れないなど)や憂うつ、不安などといった心の問題が起きている、ゲームを続けましたか。	1	0
9	平日、ゲームを1日にだいたい何時間していますか。	0 2時間未満 1 2時間以上 6時間未満 2 6時間以上	

樋口進

図 13 ゲームズテスト (GAMES Test)

皆さん、ゲームズテストをやってみてください。これは資料に出していますが、5点以上あると問題です、疑いがありますよということです。今研

究しているのですが大学生でも4.5%、この「問題あり」が出ます。

依存症になるととにかく一番大事なものがゲームになります。家族が泣いていても、ゲームをし続ける、これが依存症です。

ゲーム依存になりやすい人(危険要因)は、「ゲーム時間が長い」、「ゲームにまつわる問題が多い」、「ゲームを肯定する傾向が多い」、「男性である」、「母子・父子家庭である」、「友人が居ない(少ない)」、「衝動性が高い」。衝動性が高いは、ADHDの人に多いですが、こういった人がはまりやすいです。また、ゲーム依存になりにくい人(防御要因)は、難しいです。最初から「社会的能力が高い」人は高いし、「自己評価が高い」も、ずっと褒められて大事にされている人は、自己評価も結構高いです。

例えば、こんなことも言われています。2、3歳の小さいときにお菓子を見せられて、我慢できる子は「行動のコントロールがうまくできる」けど、すぐ食べる子はうまくできない、そんな研究もあります。

「学校でうまくクラスに溶け込んでいる」とか、「学校が楽しいと感じる」とか、こういう人たちゲーム障害になりにくいという話ですが、その人の持った能力と言えてしまいそうです。

注意欠陥多動性障害(ADHD)とか自閉スペクトラム症(ASD)の人は、こだわりが強いので、一遍いいなと思ったら、ずっとやってしまうということなのです。

鬱病だからゲームやギャンブルをやる人も居ます。また、やっていて鬱になる人も居ます。うつ病が先かゲーム障害が先か。ニワトリが先か卵が先かのようによく分かりませんが、結構うつ病が合併するというのです。また、こういう人たちはゲームにはまりやすいので、回復も難しくなります。ですから、ならないようにするしかありません。早めに気づくことが大事です。

治療方法は研究が始まったばかりで確立していませんが、断ネットは絶対駄目です。例えば、スマホを取り上げるということをする親や進める医者があります。断ネットで家庭内暴力が始まったり、親子の断絶が起きてしまうことがあります。非常に厳しい病気だと思います。

というのは、アルコール依存症を例にすると、まず、家からお酒をなくすことをします。しかし、タブレットやスマホなしでは、私たちは、授業もできないし、学生たちに資料も渡せなくなってしまう。ですから、取り上げられないというか、家からなくせないという問題があります。

介入

治療法も確立していませんが、「3R (Record (記録), Replace (置き換え), Reward (褒める))」とか言っ

ています。実は、私はこの治療をやっていますが、若い子は乗ってくれません。なぜかという、完全に依存症になってしまうと、「もう、この世界で生きていけばいいや」と思ってしまうわけです。ですから、治そうという気になってくれないし、「もう、これでええわ」という感じです。先を見ようともしないし、もう見れなくなります。とにかく、ゲームさえあればいいと。だから、認知が完全におかしくなっているのです。

Record (記録)

「その日にゲームをいつやって、食事をいつしたかの記録を作しましょう」と、言ってますがなかなかやってくれません。

Replace (置き換え)

ゲームする代わりに、読書、音楽鑑賞、運動、芸術活動をしましょう、ということです。

Reward (褒める)

褒めてあげる。皆さんはもう大学生ですから、あからさまに褒められることは少ないと思いますけど、治療者としては褒めるということです。

相談治療機関ですが、全国的に兵庫県でしたら、神戸大学医学部附属病院の精神科とか、保健所とか、精神保健福祉センターに相談するしかないと言ったところです。

禁断症状が出てきます。そして、どんどん量が増えてしまいます。

今問題になっているのは大麻です。大麻はあとで詳しく話します。コカインは興奮系です。先ほど、「うまく使えばいい薬だ」と言いました。例えば、ジータムント・フロイトは、「頭が痛いから、今日はコカイン使った」と、当時は違法ではなかったもので、平気で使っていました。LSDは、ビートルズも使っていて、「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウイズ・ダイヤモンド」なんて名曲を作ったりするわけです。

専門家として覚えておいてほしいのは、薬というのは、基本的にはいいものだということです。違法薬物を使うと廃人になると言った脅かしのキャンペーンは偏見を煽るのでまずいのです。私は、薬物依存症になってしまった人たちを治療していますが、偏見を煽られると、そういう人たちはなかなか治療の場に来てくれません。違法薬物を使用したと言ったら通報されるのでは、なんて思うと、治療に来てくれません。また、薬物使用をちゃんとやってくれないと、正しい診断ができなくなります。例えば、覚醒剤を使っていると、統合失調症と同じような症状を出すことがあります。使用を言ってくれないと、統合失調症だと思って治療することになりますので、適切な治療にならなくなってしまいます。

私たち専門家は、偏見を減らしていかなくてはなりません。薬物をやったらすぐ廃人になるなんてあり得ません。例えば、大麻、マリファナは、先ほど言ったように、ボブ・ディランやビートルズが使ってましたが全然廃人になっていません。いまだにポール・マッカートニーは名曲を作っていますし、リンゴ・スターも名曲を作っています。むしろ、危ないのはアルコールです。

5 大麻などの薬物の問題

表3 依存性薬物の心身に及ぼす作用の特徴

表 依存性薬物の心身に及ぼす作用の特徴

中枢作用	薬物のタイプ	精神依存	身体依存	耐性	催幻覚	乱用時の主な症状	離脱時の主な症状	精神毒性	分類*
抑 制 剤	おへん類 (ヘロイン、モルヒネなど)	+++	+++	+++	-	鎮痛、鎮静、便秘、呼吸抑制、血圧低下、発汗	瞳孔散大、流涙、鼻漏、嘔吐、震戦、下痢、発熱	-	麻薬
	バルビツール類	++	++	++	-	鎮静、催眠、麻酔、運動失調、呼吸抑制	不眠、振戦、けいれん発作、せん妄 ¹⁰	-	向精神薬
	アルコール	++	++	++	-	鎮静、麻酔、運動失調、運動失調、呼吸抑制	不安、不眠、けいれん発作、せん妄	+	その他
	ベンゾジアゼピン類 (トリアゾラムなど)	+	+	+	-	鎮静、催眠、運動失調	不安、不眠、振戦、けいれん発作、せん妄	-	向精神薬
興 奮 剤	有精剤類 (トルエンシナー、揮発剤など)	+	±	+	+	脳球充血、感覚異常、情緒の変化	不安、焦燥、不眠、振戦	++	毒物前薬
	大麻 (マリファナ、ハシッシュなど)	+	±	+	++	脳球充血、感覚異常、情緒の変化	不安、焦燥、不眠、振戦	+	大麻
	コカイン	+++	-	-	-	瞳孔散大、血圧上昇、興奮、けいれん発作、不眠、食欲低下	脱力、けいれん、震戦、過熱、食欲亢進 ¹⁰	++	麻薬
	アンフェタミン類 (メタンフェタミン、MDMAなど)	+++	-	+	-	瞳孔散大、血圧上昇、興奮、けいれん発作、不眠、食欲低下	脱力、けいれん、震戦、過熱、食欲亢進 ¹⁰	+++	覚せい剤 ¹¹
	LSD	+	-	+	+++	瞳孔散大、感覚異常	不眠	±	麻薬
ニコチン (たばこ)	++	±	++ ¹²	-	鎮静作用は発汗、食欲低下	不安、焦燥、集中困難、食欲亢進	-	その他	

(注) 精神毒性、精神作用を記す作用。せん妄：不安、不眠、幻覚、幻聴、興奮、精神錯乱
 *1: 違法上の分類、*2: 離脱症状は軽はず、反跳現象と違う、*3: MDMAでは催幻覚(+）、*4: MDMAは、法律上は麻薬、*5: 薬として分類
 **1: 覚せい剤の分類上の位置を示す、ただし、覚せい剤の精神毒性は、上記の1の中で評価されるわけではなく、結果として個人の社会生活および社会全体に及ぼす影響の大きさを求めて、総合的に評価される。
 出典：依存性薬物と乱用-依存-中巻) p14、星和書店より

薬物の話に入ります。結構若いときから安定剤を飲んでる人も居るでしょう。私たちも、ベンゾジアゼピン系の睡眠薬を安全だと思って使ってきましたが、いつしか処方薬依存症者がたくさん出てきてしまいました。これは抑制系で、「ダウン系」と言います。ダウン系の薬物は、切れてくると、

CAGE テストというのがあります。

- 1 あなたは今までに、飲酒をへらさないといけなかったことがありますか
- 2 あなたは今までに、飲酒を批判されたたて腹が立ったり苛立ったことがありますか
- 3 あなたは今までに、飲酒に後ろめたい気持ちや罪意識を持ったことがありますか
- 4 あなたは今までに、朝酒や迎え酒を飲んだことがありますか

これが2項目以上当てはまるとアルコール依存症の疑いとなります。

英国薬物関連独立科学委員会による
「薬物の有害さ」に関する分析
総合有害得点が高かった上位10位の薬物

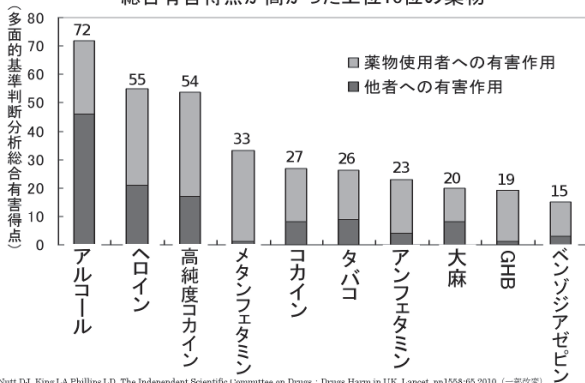


図 14 英国薬物関連独立科学委員会による「薬物の有害さ」に関する分析

これは、ナットと言う人が出したものですが、下の赤い色は他害性（他者への有害作用）です。日本人がよく使っている覚醒剤は、実は、あまり他害性がありません。私の患者さんには、覚醒剤依存症の人も居ますが、希死念慮がよく出ます。そして、鬱が出るので、自殺が多いのです。大麻もこんなもので、これはあまり言うと怒られるのですが、「たばことどちらが問題なの？」という感じになります。

ベンゾジアゼピン、これが実は、処方薬です。これを安易に処方し過ぎて、依存症をつくってしまいました。

とにかく、何やかんやで、アルコールはまずいよという話で、気を付けてください。不適切な飲酒で、アルコールはいろんな問題を起こします。

私達が使っている精神科の薬は、「抗精神病薬」、「抗鬱薬」、「気分安定薬」、「覚醒剤」、「抗不安剤／睡眠薬」と、こんな感じです。

今、大麻が問題になりつつあります。大麻取締法がありますが、これには使用罪はありません。今のところ使用しても罪にはなりません。日本では、違法薬物には使用罪がありますが、使用罪のある国はほとんどありません。

なぜかという、売る人が悪いわけです。アメリカでは、売っている人たちは処罰されています。でも、使っている人は病気だから、治してあげましょうという発想です。これは中国もそうらしいです。日本だけ、なぜか違法薬物の使用罪を作りました。

今度は大麻にも使用罪を作ろうとする流れが出てきていて、困っています。実は、大麻使用者は若い人に実に多いです。使用罪ができると、所持していなくても使用していると逮捕されます。初犯ですと執行猶予が付くことがほとんどですが、犯罪者となりますので仕事に就きにくくなります。

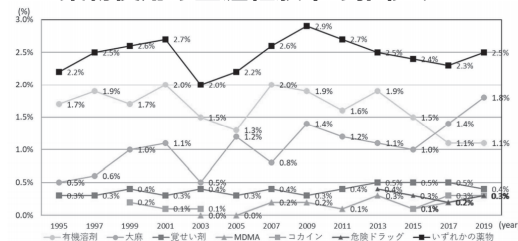
今度、少年法が改正されて、18歳、19歳が特定

少年になり、大人と同じ扱いをされます。そうになると、甘えは許されません。犯罪者になると大変です。

依存はどのぐらいあるのかということですが、常時使っていると、依存症になる恐れがありますが、それほど多くはないようです。つまり依存症にはなりにくいということです。精神病性障害というのはあまりありませんが、統合失調症になりやすい人がこれを使うと、発症しやすくなると言われていています。しかし、これも本当かどうかよくわかりません。とにかく気を付けてください、というのは、たくさんの方が使っているからです。

ADHD 治療薬として覚醒剤が利用されています。何を言いたいかというと、覚醒剤という薬を皆さんに正確に理解してほしいということです。「ピバンセ」と言う薬、これはまさに覚醒剤です。「コンサータ」も覚醒剤に近いです。一番効くのは「ピバンセ」らしいです。

薬物使用の生涯経験率の推移 (1995-2019年)



大麻経験者数の推計 (2019年)

推計値：対象者のサンプリング方法（二段階無作為抽出）に基づき、15～64歳の人口に当てはめた場合に統計的に算出される値。点推計値および95%信頼区間を示した。
①生涯経験者数：約160万人（119～202万人）
※これまでの人生で少なくとも1回以上の使用経験がある者。
②過去1年経験者数：約99万人（1.5～17万人）
※より現在の乱用状況を反映。国際比較で使われている指標。

薬物使用に関する全国住民調査2019（国立精神・神経医療研究センター）
https://www.ncnp.go.jp/nimhy/kubutsu/report/pdf/_WGFS_2019.pdf

図 15 薬物使用の生涯経験率の推移(1995-2019年)

「薬物使用の生涯経験率」ですが、「いずれかの薬物」で2.5%です。「有機溶剤」は1.2%で、だいぶ減ってきました。これもやめておいたほうがいいです。脳が溶けます。「覚醒剤」もどんどん減ってきていて、0.4%で、「大麻」が1.8%で上がっています。

大麻事犯における20歳未満の検挙人員

○ 大麻事犯における20歳未満の検挙人員は、5年連続で増加
○ 30歳未満の検挙人員のうち20歳未満が占める割合は23.5%

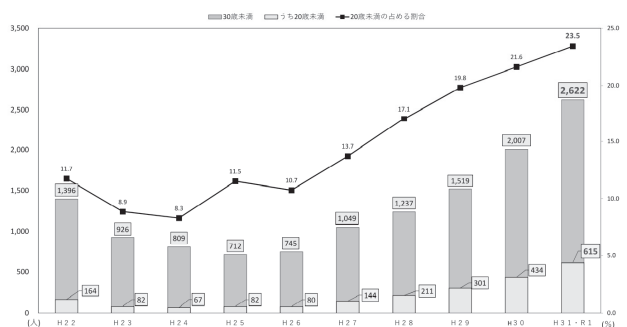


図 16 20歳未満の薬物事犯検挙人員の推移

一方で、今、警察がここを中心に取り締まって捕まえようとしています。データの見方は気を付けてください。本当に増えているのかどうかということです。今、ちょうど交通安全週間で、白バイとかがたくさん居ます。こういったときは、たくさん違反者が捕まります。今、大麻をひたすら捕まえようとしているので、それで増えているように見えているのではないかと思います。ですが、実際にはかなりの方が昔から使っています。

薬物事犯の検挙者で見えていくと、大麻が4,570人で増えていて、覚醒剤は8,730人です。かつては、よく使われていましたが、今はあまり使われなくなってきました。

30歳未満の検挙ですが、どんどん増えています。本当に使っている人が多いのかどうか分かりませんが、大麻事犯の検挙人員のうち、30歳未満の占める割合は57.4%です。こんなことになっています。

30歳未満の検挙人員のうち、20歳未満が占める割合は23.5%ということになります。

私は今、大麻の若い患者さんを診ていますが、日本でも相当簡単に手に入っています。先ほど、ACEという話をしました。ACE項目の高い人たちが、こういう大麻を使います。

PTSDという病気がありますが、ベトナム戦争で、みんな大麻を使いまくりました。要するに、不安感がすごく強くて怖いので、そういったときは大麻がよかったみたいです。だから、PTSDの治療でも大麻はいいみたいです。また、覚醒剤も実はいいです。興奮系で、かえってフラッシュバックが消えたりするということです。MDMAという薬は、今、アメリカでPTSDの薬として治験をしています。

何が言いたいかわかりませんが、実は、そういう鬱状態になったりする人たちは違法薬物に行きやすいです。例えば、大麻は鬱病にもよく効きます。あとは、てんかんです。てんかんでなかなか薬が合わない人たちに効きます。日本は、大麻をてんかんの薬として、今、治験をやっているところです。

世界的に言うと、カナダとかウルグアイは、大麻を合法化しています。では、合法化している国でどうなっているのか。大麻依存症が増えまくっているのかと聞いたら、合法化して少しの間は使う人が増えたいらしいですが、もうみんな飽きて、今はそんなに増えていないらしいです。

違法にしているのは、日本とかこの辺りですから、気を付けてください。アメリカは国としては違法ですが、州によって使えたりします。あとは、非犯罪化してしまっただけで、もう、捕まえるよりも必要な人には治療を、という流れになっています。

むしろ、こういう違法薬物は何が問題かというと、ギャングの資金源になってしまいます。日本

もそうです。いわゆる反社会的勢力にとって、違法薬物は大きな資金源になっています。だから、そういう違法薬物の資金源を絶つためにカナダでは合法化しています。

今、私が診ている患者さんは、アメリカとかカナダとか外国で大麻をやっていますが、多くの人たちは、恐らく依存にはならないと思います。先ほど、大麻の所で言い忘れましたが、「ほとんど依存症にはなりません」と書いてありました。ですが、一部の人たちは依存症になり、日本に帰ってきてもやめられず、捕まっています。今はコロナ禍で外国に行けません、外国に行って安易に手を出したらいけません。

ただ、正確に捉えてください。こういうことをやったからといって、廃人になることはまずありません。また、そういう偏見は、専門家として何とか取り去って、治療を受けやすいような社会をつくっていく必要があります。

ということで、今日は申し訳ありませんでした。皆さんに本当に不愉快な思いをさせてしまいました。私の言いたいことは、とにかく、皆さんがアクションにならないようにということです。ただ、ゲームやインターネットは、決して悪いものではないので、上手に使って、このしんどいコロナ禍を乗り切っていただければと思っています。ご清聴、どうもありがとうございました。

質疑応答

秋山 野田先生、ありがとうございました。

秋山 質問を受けたいと思います。

難波 貴重なお話を、本当にありがとうございました。ちょっと感想に近くなるかもしれませんが、コロナ禍で学生たちが結構しんどい思いをしているという調査が、かなり衝撃的でした。去年の前期なんかは、大阪の大学の学生たちが結構しんどい思いをしているというのは、やはりそうだったんだなと思いました。

ここからは質問です。例えば、震災とか津波という場合は、2、3年後に、またしんどさが出てくるということだったと思いますが、このコロナに関しては、先生として、今後の学生たちのメンタルに関して、何か見通しのようなものは持っていますか。

野田 これは本当に分かりません。さっきの「シーバーン災害」は、要するに、テロのために研究が始まっていますが、実際はそんなに起きてないでしょう。私は2009年の新型インフルエンザのときは経験していますが、そのときはメンタルヘルスにあまり着目していませんでした。SARSでは、外国はロックダウンしているでしょう。そうすると、PTSD症状を出しているというデータが出て

います。

あのとき、新型インフルエンザも1年で終わりましたし、SARS（重症急性呼吸器症候群）も一瞬にして通り過ぎました。今回は、2年間こんな状態です。日本は今のところ下がりましたし、本当にこれから第6波が来るかどうかは分かりません。だけど、オミクロンの問題とかもあります。恐らく、学生の多くは、特に繊細な学生は、非常に不安が強くなっていると思います。ということで、全然見通しが立たないというのが今の状態じゃないでしょうか。

2年間もしんどい状態ですから、後々コロナ禍が明けても、やはり、しばらくしんどいのではないのでしょうか。先生が言われるように、震災ですと、自殺者とかが出てくるのは2、3年後です。今は、持続的にストレス状態が来ていて、今年も自殺者は減っていないようですので、しばらく、本当に要注意です。特に、私たち教員は、学生たちをいかに守るかということかなと思っています。全然答えになっていませんが、よろしいでしょうか。

難波 いえいえ。ありがとうございます。

秋山 ありがとうございます。もう一つぐらい何か質問とかを受けたいと思います。

学生 貴重なお話をありがとうございます。ゲーム依存症になった人が、「この生活でええわ」と言ったりすることがあると言われていましたが、確かに、僕もそう思ったりしたことがありまして、そういう人たちには、どういった言葉かけというか、そういうのが大事なんですかね。

野田 どういったこと。あなたは抜け出せたんですね。

学生 僕は、はい。

野田 だから、実は、そういう学生というか、若い人が結構居ます。だって、ある程度ご飯を食べられて、一日中ゲームができて、しかも、友達がたくさんできます。さっきのシューティングゲームでも、チームができて。もうそれに生きがいを感じて、「これで一生行くわ」みたいな。

むしろ学生さんに聞きたいのですが、どうしたら抜けられました。これは答えはありません。本当にいい世界でしょう。

学生 そうですね。

野田 私も聞いていたら、そんな世界だったら、私も入れたら幸せになれるかなと思っています。普通は、これは将来、生活に困るなとか思えるでしょう。そう思えたらいいんだけど、その辺の感覚がなくなってるんじゃないかな。

学生 僕はその感覚がまだあったようで。

野田 だから、そこですね。

学生 はい。それで帰ってこれました。

野田 そこがあったから帰れたんですね。

学生 はい。

野田 これが、例えば、家が裕福だったりとか、もっと言えば、実は、私の若い患者さんだと、病気で生活保護を受けたりする人が居ます。そうすると、もう生活に困らないでしょう。「君、もう、これで一生行くの?」と言うと、「もう、これでいきます」と言うわけです。

だから、恐らく、その生活の危機感覚があるかないかというのも一つというか。もう完全にはまっちゃうと、将来のことを考えられなくなります。「お金がなくなったらどうのこうの」ということを親が言うと、爆発するし、例えば、治療者としてそういう言葉かけをすると、来なくなってしまいます。だから、難しいですけど、いい言葉かけはないですね。

とにかく、もし治療場面に来てくれたら、カウンセリングしながら、「これでいいわ」と言う認知の部分でも変えていくということかな。治療に乗ってくれたら、さっきのようなプログラムに乗せてやってもらえばいいのですが。

やはり、ギャンブル障害とかのほうが、まだ治療しやすいです。なぜかという、もう、すごいお金を使って破産しています。だから、治療に来るときは、ほとんど自己破産、債務整理をしている段階で、司法書士に勧められて治療に来てくれますが、ゲーム障害に関しては、ほとんどまだ子どもの段階で、親が居るし、全然困らないですからね。

ということで、今やれることとしたら、危ない人が居たら、早めにこういったスクリーニングテストをやって気が付いてもらうとか、言葉かけは、「将来困るよ」とか、そういう脅かしじゃなしに、話を聞いてあげる。やはり、何かしんどいことがあると思うので、話を聞いてあげる。それぐらいしかできないのではないのでしょうか。どうでしょう。

学生 ありがとうございます。

秋山 ありがとうございます。最後の質疑応答も、なかなか考えさせられました。それでは、あらためて野田先生に、今日は、本当に貴重な講演をありがとうございました。本当に感謝を申し上げます。と思います。

(終了)

参考文献

- 1) Noda T, Nagaura H, Tsutsumi T, Fujita Y, Asao Y, et al. (2021). A cross-sectional study of the psychological impact of the COVID-19 pandemic on undergraduate and graduate students in Japan. *Jour Affect Dis Rep.* 6, 100282.
- 2) 北村 智稀・野田 哲朗 (2020). 児童期の逆境体験 (ACE) が青年期以降のメンタルヘルスに及ぼ

野田：コロナ禍における学生の飲酒，ゲーム，SNS などの嗜癖行動

す影響についての横断的研究—嗜癖傾向に着目
して— ストレス科学, 35 (1), 88-96.

ご挨拶

心理学部長 秋山 学

心理学部は2018年4月に神戸学院大学における第10番目の学部として設立され、今年度、心理学部第1期生134名が卒業論文を提出いたしました。昨年度から続く新型コロナウイルス感染症による混乱が続く中で卒業研究を進めることは、従来とは全く異なる難しさがありました。こうした逆境を乗り越えるべく、いろいろな創意工夫を重ね、卒業論文を完成させたことが134名の卒業論文の題目から伺うことができます。今年度、卒業論文の優秀論文として選ばれた3編の論文の研究手法においても、その創意工夫の一端を垣間見ることができます。3編の論文では、質問紙調査に取り組んだもの、テキストマイニングを用いてインタビュー記録をまとめたもの、そして、プロスポーツ（サッカー）の勝敗という社会的に公開されたデータを活用したものと、バラエティに富んだ研究手法が用いられています。こうした多様な研究手法を活用する背後には、新型コロナ禍以前において日常的に行われていた卒業研究への取り組みが難しくなり、従来とは異なる視点・切り口からデータを集め、分析することが必要なほどの困難がありました。こうした窮地において、従来の枠組みを見直し、新たなアプローチを試みることは、心理学の可能性を改めて気づかせてくれるものです。今後の心理学部の発展においても重要な1年であったと感じます。

2020年に始まった新型コロナ禍により、第1期生の卒業論文への取り組みは、その始まりから、図書館の利用が制限されるなど学習環境の激変と直面しておりました。社会の在り方、常識が大きく揺さぶられる中で、執筆者自らの問題意識と心理学との関わりを探り、それを探求する営みは、執筆者自身にとっても心理学を学ぶ意味を深めていく時間であったと思います。新型コロナ禍において卒業論文に取り組み、それを完成させたことが卒業論文の執筆者自身にとってのよき思い出となることを願っております。

最後に、新型コロナ禍において混乱する社会情勢のもと卒業研究を進めていく困難を乗り越え、卒業論文を提出することができたのは、質問紙調査や各種実験、インタビューなどにご参加いただいた方々、各種資料の探索や収集を支えて頂いた図書館スタッフの皆様といった、多くの方々にご協力いただけたおかげであります。134編の卒業論文に刻まれた皆様の協力に深く感謝いたします。

担当教員名 秋山 学 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118002	北原 大揮	フィルムカメラとアナログレコードを用いた若者世代のノスタルジーの想起要因と所有・使用経験によるノスタルジー感情の変化について検討・比較	
C118025	原田 康平	購買行動における記憶の関連性	
C118028	村山 陸人	幸福度と運動習慣における関係	
C118032	伊藤 美寿々	社会的ジレンマの解消に関する研究	コロナ禍における手指消毒行動とマスク着用行動を例にして
C118043	石黒 有紗	セブンイレブンに対するブランドへの愛着と結びつき	
C118052	左座 善太	ゲームの結果が「縁起担ぎ」に及ぼす影響について	
C118072	浅井 紫妃	アイデンティティ発達段階が自己注目および適応感に及ぼす影響	
C118073	白川 夏帆	スターバックス店員の言葉遣いと顧客満足度について	
C118074	川口 詩乃	プレゼントの贈り手におけるモノへの価値と愛着について	
C118090	稲岡 伶奈	楽しいと思う買い物行動とは何だろうか	
C118091	上岡 大記	東京ディズニーランドで感じる非日常性とパークでの消費行動の関係について	
C118100	村上 陽菜	商品写真に対する印象評価について	
C118113	竹内 良輔	大学生におけるスマートフォンの利用と適応感の関係性について	
C118115	大埜 柊馬	正義感と攻撃性の関連について	
C118136	小山 のぞみ	家庭での食事を通して考える家庭生活への満足感	

担当教員名 岡村 心平 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118003	田中 愛梨	現代の姉妹関係における葛藤とその変化についての文献研究	『アナと雪の女王』を題材として
C118012	佐江 徹	アナログゲームが心理教育に与える影響の検討	「カウンセリングの極意」を題材として
C118022	中村 有杜	青年期における自己憐憫とセルフ・コンパッションの比較検討	
C118047	小玉 和瑚	一般的な「多重人格」観と「解離性同一性障害」概念の比較検討	人格統合の視点をアップデートする
C118057	森田 理紗	自尊感情の随伴性と主観的幸福感との関連	なぜ若者は SNS に夢中になるのか
C118070	楠田 咲耶	動作が笑いを引き起こす要因の分析	うける動画の共通点
C118081	森本 芹香	グリム童話『白雪姫』に見る現代の母娘間の葛藤	なぜお后は母親ではなく魔女に変貌してしまったのか
C118083	内海 晃	司法心理臨床における司法機能と臨床機能の乖離とその協働に向けて	
C118112	水田 優生	感情が楽曲の創作活動に与える影響についての一人称研究	日誌法による創作過程の省察
C118128	新井 杏子	心理療法における「空想」の意義	『ナルニア国物語』の時間描写からの検討
C118142	久能 賢人	大学生の自己呈示に係わる被服行動と性格特性の関連の検討	
C118147	矢野 千佳	パートナーの存在はファン活動にどのような影響を及ぼすのか	「推し」という表現の変遷から
C118150	唐牛 里紗	大学生の独自性欲求と曖昧性耐性が怒り感情に及ぼす影響	
C118156	森本 遥月	同性カップルの親が子どもに与える影響とその実情	同性婚をめぐる国際動向と里親制度に関する文献研究

担当教員名 定政 由里子 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118008	塩見 晶	メイク行動と性格傾向の関連について	
C118023	桑山 翔吾	一人暮らしと実家暮らしの大学生における心理的離乳の差と親の捉え方の違いについて	
C118026	宮井 秀寿	中学校3年間を不登校で過ごした後に全寮制の男子校に入学した生徒の自身の自己肯定感の検討	
C118037	真鍋 佑梨	女子大学生における化粧認知および化粧行動と自尊心の関連性	
C118039	小野 杏実果	「笑」と「w」の異なる表現形式とその有無がメッセージ文の印象に与える影響	
C118055	田代 実穂	所属部活動による性格印象のちがいの検討	
C118060	城戸 菜摘	楽器の違いによるリラックス効果の影響について	
C118096	松川 真大	目の大きさの変化による印象の変化と性格印象の関連性	
C118111	田淵 さやか	現代の母娘関係における友達親子の実態	
C118123	友利 麟太郎	学校内での「いじめ」と職場における「パワー・ハラスメント」の現状と対策についての文献研究	
C118126	今井 夢里亜	背景色が商品イメージに与える影響と購買意欲について	緑と紫に着目して
C118143	大中 初姫	販売員の立ち位置がお店の居心地に関して来店客に与える影響について	
C118158	藤川 啓允	現役大学生における自己の能力へのフィードバックがもたらす性差別態度の変化の検討	

担当教員名 清水 寛之 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118006	三上 和也	オタクと非オタクのオタクに対するイメージの違い	
C118011	西村 麻伽	認知症高齢者の介護に関する大学生の関心とイメージ	
C118017	川上 綾音	手書き文字の書き手に対する印象形成の自己評価と他者評価	
C118018	濱崎 萌果	侵入思考に対する抑制の意図及び確信度と思考コントロール方略との関連	
C118021	森 弥優	大学生における食事形態とパーソナリティ特性	
C118066	長田 亞弓	香りが人の印象に与える影響	
C118068	石丸 ゆき乃	子どもの頃のスポーツクラブの継続年数と家族のサポートの関連性	
C118076	松田 海星	運・不運の認識と自己肯定感との関連性	
C118093	絹川 隼土	大学生における被服行動と自己肯定感の関係	
C118098	五島 憲人	スマートフォン依存が精神的健康に与える影響に関する文献研究	
C118135	寺本 理緒	大学生における睡眠に関する意識調査	
C118153	古野 芳樹	消費者の購買意思決定に及ぼすインフルエンサーの影響	
5317130	岡谷 菜夏	大学生における日常生活の化粧行動と気分の変化	

担当教員名 竹田 剛 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118007	青木 菜緒	自己評価と評価懸念のあり方が自己主張へ与える影響について	
C118009	眞崎 唯	グループ所属の有無による友人関係が学校適応感に与える影響について	友人関係以外の学校適応感との関連性がある要因の探求
C118010	村上 晴香	認知機能障害と QOL の関連性について	身近な高齢者と関わる学生の視点から
C118013	田中 美帆	時間管理能力と生活様式が感情に及ぼす影響について	
C118031	松山 浩太郎	「終の看取り」にもたらす心理・社会的要因についての考察	
C118042	村上 叶夏	誇大性・過敏性自己愛と友人への期待度の関連性	
C118063	住友 彩夏	パーソナリティ傾向が SNS 上での攻撃行動に与える影響	芸能人に対する誹謗中傷の観点から
C118065	松井 彩	パーソナリティと色の彩度の関連性について	
C118089	谷口 暁斗	権威者の意見が個人の意思決定に与える影響と個人のコミュニケーション能力が持つ調整機能について	
C118097	松木 理紗	心理的援助経験が援助規範意識と共感行動に与える影響	
C118101	田中 翔馬	犯罪捜査で用いられるポリグラフ検査と隠匿情報検査 (CIT) に関する研究動向および今後の展望について	
C118106	水沼 陽菜	幼少期の言語獲得方法の差異が言語発達とアイデンティティ獲得に与える影響	
C118124	高井 赴	個人のパーソナリティ特性が怒り感情に及ぼす影響	
C118146	林 良美	過去の家族関係が達成動機に及ぼす影響について	現在の家族関係とソーシャル・サポートが持つ調整機能
5317138	嶋田 健希	ダークトライアドと攻撃性の関連性について	

担当教員名 中村 珍晴 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118001	谷内 開	サイコパシー特性による恋愛傾向の検討	
C118004	吉田 菜々夏	服装が他者に与える印象	
C118019	小橋 和明	スマホの使用が日中の眠気とスマホの行動嗜癖に及ぼす影響	
C118020	藤田 淳平	食器の種類が料理のイメージに及ぼす影響	
C118071	奥村 陸	団体競技と個人競技におけるスポーツ選手の性格の比較	
C118103	成瀬 さくら	女性の指が対人印象に及ぼす影響	
C118107	大塚 一将	食嗜好による性格特性の検討	
C118114	江下 慧	高校における部活動経験がコミュニケーション能力に与える影響	
C118117	藤原 日南子	スポーツ指導者の印象と女性バドミントン選手の動機付けとの関係	
C118125	太田 千尋	小説を読むことにより起こる共感の程度と男女差	
C118129	藤原 彩実	大学生アスリートにおける基本的心理欲求の充足が内発的動機づけに及ぼす影響	団体競技を対象とした検討
C118149	田口 道雄	サッカーにおけるホームアドバンテージの観客の有無による影響	欧州サッカーリーグの無観客試合をもとに

担当教員名 村井 佳比子 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118033	札幌 美羽	大学生の SNS における承認欲求と友人関係の関連	
C118038	藤原 涼夏	波および焚火に対する好ましさとその音に対する心理的評価との関連	
C118044	中村 琴美	青年期の社会的スキルと想起する活動の種類との関連	自由時間の活動に焦点を当てて
C118048	荻内 真菜	反抗期の有無と中学時代の家族関係および青年期の自我同一性の関連	
C118049	小西 柚	大学生の生きがい感と余暇活動に費やす時間と費用との関連	
C118053	菅野 綾菜	大学生の「くせ」と心理的欲求および完全主義との関連	
C118061	石橋 愛里	大学生の化粧に対するイメージと化粧前後の自己意識の差	
C118067	山根 梨瑚	青年期の友人関係における「キャラ」と親和動機との関連	
C118092	山田 祐実	大学生における性役割観の変化	
C118102	藤田 美優	音に対する感じ方と性格との関連	
C118118	堀 雪乃	大学生の知的障害者に対する受容的態度に関する研究	
C118121	羽賀 大輝	学童期の遊びの種類と青年期のソーシャルスキルとの関連	
C118133	由田 奏	児童期の養育者との関係と大学生の現在の自己肯定感との関連	
C118138	大植 菜央	気分が図形の印象に及ぼす影響	
C118152	末角 稔	青年期の居場所感について	

担当教員名 村山 恭朗 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118024	小西 桃花	マゾヒズムと現代における性の主体性について	
C118036	西山 実乃里	父親の意識と養育参加が子どもの発達に及ぼす影響	
C118050	松谷 果穂	香りが記憶と抑うつ気分 に及ぼす影響	
C118051	嘉ノ海奈津子	消費者の性格特性が消費行動に及ぼす影響	
C118058	向井 健太	人はなぜ浮気をしうるのか	心的飽和、進化論、文化・社会的知見から見る浮気の動機
C118084	鈴田 彩乃	過去の対人関係が自尊感情に及ぼす影響と対人不安との関連	
C118086	松尾 亮	日本の自殺の特徴とその考察	
C118088	山本 幸輝	国内におけるストレート層のLGBTQ+に対する態度の検討及びストレート層の態度がLGBTQ+のメンタルヘルスに及ぼす影響	
C118130	西角 杏菜	音楽がもたらす自尊感情について	
C118134	大野 ひめの	女子大学生におけるストレスへの対処能力が心の健康の維持・増進に及ぼす影響	
C118140	本澤 愛歌	SNSにおけるネガティブ感情の表出が及ぼす心理的影響	

担当教員名 毛 新華 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118016	辻 茉裕	外見魅力の差が犯罪者に対する感情に与える影響	
C118045	山口 さつき	協調性の高さが社会的迷惑行為に対する考慮に及ぼす影響	
C118056	島本 愛理	非対面コミュニケーション場面における自己開示の深さの違い	想定される場面と相手との関係性による観点から
C118059	森脇 将斗	親への愛着が被援助志向性に及ぼす影響	
C118079	羽野 佑香	スマホに対する依存度が対人コミュニケーションに与える影響	対面と非対面による自己開示の割合の違いに着目して
C118087	都築 駿汰	幼少期の攻撃行動が SNS での誹謗中傷に与える影響	
C118104	田井 智也	ファッションにおける Instagram の影響力	
C118110	芦田 優	SNS の使用頻度と承認欲求の関連に関する研究	
C118120	池田 圭純	相手との関係性と対人場面の種類が自己開示に与える影響	
C118122	中原 淳之介	大学生の選択的友人関係志向とスマートフォン利用の関係について	
C118127	明石 健太郎	人物の性格傾向が人物の魅力評価に与える影響	「ONE PIECE」の登場人物から考える
C118137	宮本 沙彩	友人関係志向が自尊感情と友人関係満足感に及ぼす影響	
C118144	東 玲那	ファン心理と性格特性による主観的幸福感の検討	
C118157	松田 涼	性格・性差が浮気の価値観に与える影響	
5317012	上羽 芹	一般的信頼と相手との関係性の違いが口コミの信用度に与える影響	

担当教員名 山本 恭子 先生

学籍番号	学生氏名	題 目	副 題
C118015	佐藤 壮	周囲の他者の服装が初対面の相手の印象形成に及ぼす影響	
C118029	佐々木 晨介	感情表出の抑制および偽装と交友関係の関連性	
C118034	武田 陸	試合における実力の発揮度とレジリエンスの関連性	
C118046	藤原 大雅	時間的展望が逸脱行動に及ぼす影響	
C118075	碓金 義騎	発話におけるフィラーと速度が他者の印象及び内容理解度に及ぼす影響の検討	
C118095	黒田 悠人	BGMのテンポの違いが作業効率に及ぼす影響に関する研究	
C118099	安達 汐音	テーマパークの非日常空間演出による幸福度の違い	
C118108	大柿 玲	アルバイトのハラスメント被害経験がストレス反応と攻撃性に及ぼす影響	
C118116	山本 瑛仁	LINEコミュニケーションと友人関係の関連に関する調査	
C118119	魚住 亮介	「新型うつ」に対する援助を促進・阻害する要因に関する研究	
C118132	畑 佑希乃	自尊感情と恋愛スタイルの関連性について	
C118141	伊勢木 颯太	友人関係における対人葛藤場面において自己嫌悪感が後の対人関係に与える影響	
C118145	泉谷 綺恵	攻撃性と友人関係の関連性の検討	
C118154	大橋 光	感情および勤勉性・神経症傾向がリスク行動場面での意思決定に及ぼす影響	

侵入思考に対する抑制の意図及び確信度と思考コントロール方略との関連

C118018 濱崎萌果

本研究は、場面想定法を用いて、侵入思考の増加を規定する要因として考えられる抑制意図の強さ、及び抑制確信度の高さと、侵入思考に対する5つのコントロール方略の関連について検討を行った。その結果、抑制意図が強くなるほど、気晴らし方略が行われている一方で、侵入思考の体験を他者と共有したり相談したりする社会的コントロール方略は行われなくなる傾向が認められた。また、抑制確信度が低くなるほど、侵入思考の意味を見直す再評価方略と、自分を責めたり罰したりする罰方略が行われている傾向が認められた。とくに、罰方略と抑制確信度との相関結果から、様々な侵入思考との関連が示されている罰方略が用いられる背景として、侵入思考を上手く抑制することができないと感じるほど侵入思考の生起頻度が増加し、その増加の原因を自己に帰属させることによって、自己を責めたり罰したりしてしまうという過程が推測された。

「終の看取り」にもたらす心理・社会的要因についての考察

C118031 松山浩太郎

本研究は、家族や親戚など看取る人と看取られる高齢者(当事者)の間で想いを伝え合えるのに必要な心理・社会的要因について考察することを目的とした。また、当事者やその周囲の人が「天へと旅立つ」ことが、死生観や生命に対する価値観の形成にどう関与しているのかを検討することを目的とした。本調査は大学生3名を対象にインタビューおよび質問紙調査を行った。ダイアログはテキストマイニングを用いて分析した。その結果、生前の関わりは参加者自身の人生における基盤を成していることに加え、死別後には心境や想いがその基盤と結びつき、生命観や人生観への認識が進んでいくことが読みとれた。また、人生基盤のあり方は、親しい間柄の人とのコミュニケーションの活性化が一要因として関連していることが読み取れた。これらのことから「人生会議」においては、情緒的なプロセスが伴うことに加え、出会いから別れに至るまで連続的に続くものであり、終末期以降のコミュニケーションにおいても様々な変化をもたらすことが読み取れた。

サッカーにおけるホームアドバンテージの観客の有無による影響

—欧州サッカーリーグの無観客試合をもとに—

C118149 田口道雄

スポーツの世界では、ホームチームの方がアウェイチームよりも有利だとするホームアドバンテージが指摘されている。ホームアドバンテージには習熟因子、移動因子、ルール因子、観客因子という要因が挙げられている。観客因子において、スポーツは観客がいることがほとんどであるため、観客の有無による影響を分析した研究は少ない。そこで本研究では 2020 年の新型コロナウイルスのパンデミックによって多数の試合を無観客で行ったサッカーの 3 リーグを対象に分析を行い、ホームアドバンテージの観客の有無による影響を検討することを目的とした。観客の有無およびホームアウェイを独立変数とした 2 要因分散分析の結果、リーグごとに違いはあったものの、ゴール数や勝ち点数といった選手のパフォーマンスと審判の判定による提示カード数において観客の有無やチーム条件に関わらないホームアドバンテージ、あるいは観客の有無によるホームアドバンテージがみられた。

老年期の幻覚妄想

—その臨床概念と現代における位置づけ—

8C20101 小笠原 梨湖

(指導教員 小久保 香江)

老年期には、さまざまな幻覚妄想が認められることが少なくない。高齢者では、意識障害や認知症が明らかでないが、幻覚妄想が前景に見られる病態がしばしば認められ、さまざまな名称で呼ばれてきた(古野・濱田, 2006)。この老年期に見られる幻覚妄想の臨床類型や診断体系について理解し、その病態を適切に捉えることは、治療などにおいて有用であると考えられる(上田, 2011)。高齢者の幻覚妄想状態の理解を深めるため、現代の操作的診断基準のみならず、過去の精神症候学的知見を参照することが有用であると考えた。

本研究では、老年期に出現する意識障害や認知症の存在が明らかでない幻覚妄想について、その精神症候学的知見を概観し、今日の診断基準においてどのような精神障害に分類されるかについて、その概念の変遷を整理した。また、若干ではあるが、各症候群の薬物療法と幻覚妄想状態の心理社会的治療について概観した。

結果、DSM や ICD のような現在広く使用されている操作的診断基準では、老年期特有の症状や幻覚妄想の内容について考慮されることが少なく、古典的には含まれていた要素が見逃されやすくなっていることが明らかとなった。また、老年期に出現する幻覚妄想について概観した結果、共通する要因として、女性に多いということと社会的孤立が明らかとなったことから、老年期の幻覚妄想の発症因子として社会的孤立と女性ホルモンが幻覚妄想に影響を与える可能性が示唆された。さらに、老年期の幻覚妄想には、認知症の前駆症状や認知症への移行が一部にあることが明らかとなった。

現在使用されている操作的診断基準では、老年期特有の症状や幻覚妄想の内容について考慮されることが少なく、古典的には含まれていた要素が見逃されやすくなっていると考えられる。老年期の幻覚妄想の背景には、患者の性格や環境など心理社会的要因と身体疾患や老化など生物学的要因などそれぞれの状況など複合的な要因を考慮し、患者の幻覚妄想という病態を見るのが重要ではないかと考えられた。このような、老年期特有の身体的心理的な状況を考慮し、治療につなげるのが重要であると思われる。古典的分類である臨床類型を参考にすることは、患者個人の状態を多面的に判断することにつながり、治療法の判断やサポートを行う上で有用であると考えられた。

Asexual の心理的負担

——インタビューを通しての考察——

指導教員 石崎 淳一

8C20102 亀井 愛姫

近年、性の多様性やセクシュアル・マイノリティへの関心が高まっている。日本では LGBT に比べて、その他のセクシュアリティに関する研究が少ない一方で、他者に性的魅力を感じないセクシュアリティ (Asexual) が存在することが明らかになってきている。

本研究では、Asexual について、先行研究から身体的、心理的疾患との関係についてまとめ、さらに、Asexual Spectrum に該当する方々にインタビュー調査を行い、セクシュアリティの幅や個人の心理的な負担を明らかにすることを目的とした。

本研究では、セクシュアリティに明確な定義が存在しないため、Asexual を「他者に対して性的魅力を感じない人」と定義し、また、Asexual に近いセクシュアリティとして Gray-(a)sexual や, Demisexual などの他者に性的魅力を感じにくいセクシュアリティについても調査対象に含めることとした。

本研究では、セクシュアリティを自認する前後での心の変化やセクシュアリティの悩み、カミングアウトについて 1 時間から 1 時間 30 分の半構造化面接を行った。インタビュー内容を、KJ 法を用いて分析した結果、Asexual という言葉の概念について、Asexual を自覚している人の中でも意見が異なる場合があり、それぞれが自分の考えを強く持っている印象を受けた。一方で、周囲の人に相談やカミングアウトをした際、また、セクシュアル・マイノリティのコミュニティに参加した際などに、自分の感覚を否定されるのではないかと不安に感じており、それが心理的な負担となっているのではないかと考えた。セクシュアリティについては他者に相談しづらく、また、セクシュアル・マイノリティのコミュニティがあることを知らない場合やコミュニティを知っていたとしても近くになく、近く存在していても自分のセクシュアリティに自信がないために参加できない場合などがあるため、セクシュアリティについての正しい情報や、交流会やセクシュアル・マイノリティのコミュニティなどで当事者の方と話すことができるような環境を提供することが重要となるのではないかと考えた。

社会変化と不登校現象との関連

8C20103 佐藤 早瑛 (指導教員 小山 正)

文部科学省 (2020) によると、2019 年度の小、中学校の不登校児童生徒数は 18 万 1272 人であり、過去最多を更新した。高木 (2010) は、戦後の高度経済成長などを含む急激な社会構造の変化と、それに伴う家族構造の激変が不登校の増加に関係していることを指摘している。しかし、不登校が我が国において問題になり始めて、今日に至るまで、高度経済成長など社会における変化と不登校との関連についての検討は少ない。

本研究では、社会の変化に伴う家族や教育の変化と、不登校現象との関連について、社会変化や不登校事象が記述された文献・資料を収集し、文献的考察により明らかにすることを目的とする。対象とした期間は、不登校児童生徒数の調査が始まった 1966 年～2019 年までとした。そして、不登校児童生徒数の増減に合わせて 5 つの時期 (横ばい期 1, 増加期 1, 増加期 2, 横ばい期 2, 増加期 3) に分け、不登校現象と、社会の変化とそれに伴う家族や教育の変化との関連について検討した。

調査の結果、1966 年～2019 年における主な不登校現象と、社会の変化とそれに伴う家族や教育の変化が明らかになった。横ばい期 1 (1966 年～1974 年) は、1950 年代半ばから始まった高度経済成長によって、社会・家族・教育において様々な変化が生じた。1950 年代半ばごろから不登校が確認され始め、1966 年度から文部省の不登校調査が開始された。増加期 1 (1975 年～1990 年) には、安定成長期やバブル景気に移行し、教育における問題の増加や不登校児童生徒数の増加、不登校の見方の転換、フリースクールの創設などが見られた。増加期 2 (1991 年～2001 年) には、バブル崩壊による景気・雇用の悪化が見られ、不登校現象では、不登校児童生徒数の急増や、学校外通所の出席扱い、登校拒否から不登校へ名称変更などが見られた。横ばい期 2 (2002 年～2012 年) には、景気の低迷が続き、リーマンショックと東日本大震災が生じた。不登校児童生徒数は横ばいであり、介入する姿勢が重視された。増加期 3 (2003 年～2019 年) には、景気低迷は続くが雇用情勢は回復した。不登校児童生徒数は急増し、学校外の教育機関の確保と休養の必要性が強調された。

以上の結果から、高度経済成長期や安定成長期、バブル景気、バブル崩壊などの大きな経済・社会変化と不登校児童生徒数との間には一定の関連があることが明らかとなった。このことから、不登校現象の背景には、家族問題や教育問題のみではなく、社会の変化という大きな現象が存在していることが分かった。

クリティカルシンキング志向性および確証バイアスがうわさの伝播に及ぼす影響

—不安要因と信憑性要因を考慮した検討—

8C20104 清水 友梨香

(指導教員 毛 新華)

本研究の目的は、うわさの伝播に及ぼす要因を明らかにすることである。Twitter での情報拡散および共有行動に焦点を当て、確証バイアスとクリティカルシンキング志向性との関連と、社会的不安の強い状態での確証バイアスの受けやすさを検証する。先行研究を踏まえて、仮説は①不安の高い状況では、クリティカルシンキング志向性の低さが確証バイアスを高め、うわさの伝播につながる、②信憑性の低い状況では、クリティカルシンキング志向性が高いほど確証バイアスが低くなり、うわさの伝播につながらない、の 2 点とした。

本研究は、大学生および大学院生に、社会的クリティカルシンキング志向性尺度、4 枚カード問題を用いた質問紙調査と、不安の高低と信憑性の高低で 4 種類に分類したシナリオ実験を行った。最終的な分析対象者は 130 名（男性 69 名、女性 59 名、その他 2 名、 $M = 19.37$ 歳、 $SD = 1.05$ ）であった。仮説の検討は SEM 分析を用いた。不安と信憑性の高低それぞれにおいて、情報拡散行動（リツイート）および共感行動（いいね）の可能性を検討した結果、どの群においても「確証バイアスの高さ」と「クリティカルシンキング志向性」には有意なパスは示されなかった。確証バイアスの高さと拡散・共感行動との関連については、情報の不安の高低に関わらず、確証バイアスの高さが拡散行動を高めるが、共感行動にはつながらないことが示唆された。したがって、仮説 1 は支持されなかった。また、情報の信憑性の高低に関わらず、確証バイアスが高くても共感を示さなかったが、信憑性が低い情報に限り、確証バイアスの高さが拡散行動を高めるということが示唆された。しかし、確証バイアスとクリティカルシンキング志向性の関連がみられず、部分的な検証に留まった。

これらの結果から、不安が高い状況では、正常な判断が鈍り、客観的に情報を取捨選択できず、情報拡散につながると推測される。一方、信憑性が高い情報では、確証バイアスの高さに左右されず、情報拡散行動はとらず、信憑性が低い情報では、確証バイアスが高い人ほど、情報に真実を見出そうとし、拡散につながると推測される。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、不安の強い状況での SNS による誤情報の拡散が顕著であった。意図に関わらず誤情報を発信、拡散することを防ぐうえで個人の認知を知ることが有用である。今後は、不安の操作や個人の不安の度合いの調査が課題となる。

2 型糖尿病患者のセルフケアの促進要因・阻害要因の検討

8C20105 下野 和花

(指導教員 山本 恭子)

2 型糖尿病はその発症や経過に生活習慣が大きく関与し、食事療法や運動療法をはじめとするセルフケア行動が、治療経過や生活の質を大きく左右する。本研究は、2 型糖尿病患者のセルフケア行動の促進要因と阻害要因を明らかにする目的で行った。本研究のセルフケア行動の定義は、食事療法、運動療法、薬物療法を中心とした自らが行う糖尿病の療養・健康管理のためのものである。

はじめに糖尿病の特徴や診断・治療についてまとめ、つづいてセルフケア行動の促進要因と阻害要因に関する文献研究をおこなった。先行研究を Google scholar で検索したところ、約 410 件の論文がヒットし、そのうち本研究の目的と合致または類似する内容の論文を集め、5 件を検討対象とした。その結果、セルフケアの促進要因は「糖尿病と向き合うこと」や「支援環境を形成すること」、「自己効力感を高めること」、「炭水化物を食べ過ぎない工夫」であった。一方、セルフケアの阻害要因は「糖尿病と向き合えないこと」や「支援環境が広がらないこと」、「制約による負担」、「炭水化物に関する知識のあいまいさ」などであった。これらのことから、セルフケア行動を促進する要因と阻害する要因は表裏一体であり、促進要因がいつでも阻害要因に変化する可能性があると考えられる。

以上のことから、セルフケアを長期にわたって継続するには、患者自身が糖尿病と向き合うこと、セルフケア行動に対する自己効力感を高めること、支援環境を形成することが重要になると考えられる。そのためには、2 型糖尿病患者に正しい知識を継続的に学んでもらう場が必要であると考えられる。セルフケア行動において成功体験を積み重ねることで取り組んだ効果を実感し、糖尿病への自己効力感を高めると考えられる。

また、医療者は患者への説明を発症時に行うだけでなく、治療を継続していくにあたっての不安や不満を聞き取り適宜治療への不安を取り去ることが必要であると考えられる。

また、患者はセルフケア行動を試みようとしているにもかかわらず、医療者の認識とはずれていることも明らかになった。医療者だけでなく、周囲の人の支援が得られていないと感じている患者は少なくない。心理師が周囲の人の協力を得るためにできることは、糖尿病について知ってもらう機会を設けること、家族にも面接の機会を設けることや食事療法・運動療法の体験の機会を設けることであると考えられる。

いじめ予防を目的とした感情理解を促す心理教育が小学生の共感性に及ぼす効果

8C20106 夏目 瑞希

(指導教員 道城 裕貴)

現代において、いじめは重要な社会問題である。国もいじめに対する問題意識を強く持っているということが窺われており、いじめの内容が、より残酷なものになると考えられる中学生になる前に、いじめ予防的介入をする必要があると思われる。従来はいじめに関する心理教育では、いじめに関する知識を与えたり、SST を実施したりすることが多かったが、渡辺・原田・齋藤 (2009) の指摘から、いじめ行為は否定しながらも、ネガティブな感情を否定することなく、理解し、受け止めるといった、共感性を高めるための他者、自身の感情理解に焦点を当てた心理教育の重要性が考えられた。

そこで研究 1 では、共感性を心理教育の効果指標とすることの妥当性について明らかにするため、小学校高学年 116 名に対して質問紙調査を実施し、共感性 (村上・西村・櫻井, 2014) と、自尊感情 (東京都教員研修センター, 2010)・社会的スキル (嶋田・戸ヶ崎・岡安・坂野, 1996)・ストレス対処方略 (山野・高平, 2013)・コミュニケーションスキル (東海林・安達・高橋・三船, 2012) との関連について検討した。その結果、共感性が高いほど適応的な特性・スキルがいずれも高くなること、不適応的な特性・スキルがいずれも低くなることが明らかになり、心理教育の効果指標として適切であることが示唆された。

研究 2 では、共感性を効果指標とした、感情理解に焦点を当てた心理教育を、小学校 5 年生 48 名に対して 1 回実施した。事前調査は心理教育実施の 1 週間前に、事後調査は心理教育実施直後に、共感性 (村上・西村・櫻井, 2014) を含む質問紙調査を行った。心理教育の内容は、著者が、約半年間の公認心理師養成課程の学外実習を通して、直接児童らと関わる中で把握したニーズや、教職員と 3 回協議した内容をもとに決定した。その結果、本研究の心理教育は、一部の対象児童らにとって効果があったということが示された。具体的には、共感性の「他者感情への敏感性」「他者のポジティブな感情への共有・好感」低群に対しては、一部の共感性の向上が認められ、共感性の「他者感情への敏感性」「他者のポジティブな感情への共有・好感」高群に対しては、一部の共感性を低下させることが示唆された。効果は一部においてのみ認められているため、心理教育の内容や実施方法、研究デザインなどを見直す必要があるだろう。一方、学校関係者や、児童らに対する調査から妥当性の確認がされ、対象児童らに適合した心理教育を作成することができた。

若年社員と中堅社員の電子メールにおけるコミュニケーション・マナーのズレが職場のメンタルヘルスに及ぼす影響

8C20107 成井 里緒

指導教員 村井 佳比子

本研究は、企業における若年社員と中堅社員の電子メールによるコミュニケーションのマナーに関する考え方や捉え方について調べ、その違いを検討することで、社内のコミュニケーションを円滑なものにする手がかりを得ることを目的とした。仮説は、「若年社員と中堅社員の電子メールのマナーにはズレがあり、このズレは職場でのコミュニケーションの一端を示すと考えられることから、上司もしくは部下との電子メールのマナーのズレが大きい場合、心身のストレスが大きくなる」である。企業（中小企業を除く）に正社員として勤務する者 680 名（入社 2-3 年目の上司のいる若年社員 367 名、勤続年数 10 年以上で 30 代から 40 代の部下のいる中堅社員 313 名）を対象としてオンラインによる調査を行った。

検討の結果、電子メールのメリット・デメリットに対する捉え方については、若年社員と中堅社員に大きな違いはなかった。一方で、中堅社員においては、自分の電子メールのマナーが適切でなく、部下のマナーも適切ではないと評価している場合、および、自分の電子メールが正確ではなく、部下のメールが正確であると評価している場合にストレスが高くなる傾向があることが示された。つまり、中堅社員は、自分自身の電子メールのマナーを低く評価していると、ストレスが高くなるということであり、仮説は一部支持されたといえる。多くの社員が電子メールに関する講習を受けたことがないと回答しており、自分なりのマナーでやり取りをしている可能性がある。自由記述からは、お互いに手探りで良好な関係を築こうとしていることがうかがえるが、それがかえって距離感を掴みにくくしていることが示唆された。

電子メールを用いる場面が増えた現代社会において、電子メールのコミュニケーションにズレが生じた状態が維持されていると問題になる可能性がある。若年社員と中堅社員の電子メールに対する捉え方や考え方の違いを解消するために、ビジネス場面での電子メールに関する授業や研修等を行うことが必要になると思われる。しかし、本研究の限界として、個人が抱える問題については触れることができず、どのような経過によって問題が生じているかについては明らかにできていない。そのため、今後の課題として、若年社員と中堅社員それぞれにインタビュー調査を行い、より質的なデータを収集し分析することを挙げる。

成人期の夢とエリクソンの発達段階との関連 ―事例からの検討―

8C20108 西川 絵里

指導教員 小山 正

「夢は無意識への王道である」という Freud (1900) の言葉にあるように、夢は臨床場面で心の奥に隠された無意識を見つける手がかりとされ、諸学派で夢を扱う分析が行われた(粉川, 2017)。また、心理療法場面以外でも、夢の自己分析は、無意識を意識化し、内省を促すなど、自己理解の手がかりになると考えられる(岡本・石田, 2012)。

数多くの夢研究の中で、鑑・平野(1985)は、世代によって夢主題が異なり、夢主題には Erikson (1950) の提唱する発達課題が影響を及ぼすと述べた。

本研究は、成人期の発達課題である生殖性や、未解決だと考えられる発達課題の夢への現れ方、向き合い方を夢の中の言動から明らかにする事を目的とする。また、研究協力者の語りから、個人の生育歴や経験が夢に与える影響を事例検討し、さらに、反復夢が表す夢主題を Erikson (1950) の発達段階と関連づけて検討することを目的とする。

現在も反復夢を見ている成人期の男女3名に、夢とその内容に関する質問項目について1か月間記録してもらい、その後、乳児期から成人期に関する質問項目に沿って、半構造化面接を2回行った。また、エリクソン心理社会的段階目録検査 (EPSI: Erikson Psychosocial Stage Inventory, 中西・佐方, 2001) を用いて発達課題の達成度を測定評価した。

成人期の夢と発達課題との関連について、夢に現れている事例もあれば、そうでない事例もあった。また、発達課題が夢の主題だけでなく、登場人物の数、夢に伴う感情の有無など、夢全体の特徴として現れている事例もあった。夢と生育歴や経験との関連について、EPSI で測定した発達課題の達成度が高いほど、経験を肯定的にとらえ、夢にも行動や感情がはっきり現れていた。さらに、インタビューでの語りから、日常生活での発達課題との関わりの深さや重要度、経験の意味付け方により、夢に与える影響は異なると考えられる。また、反復夢の内容は3事例とも非現実的であり、学童期の挫折が現れていた。発達課題の達成度が高いほど、夢には自主的な行動が現れ、達成度と夢の中の行動には関連が見られた。夢に全てが現れるわけではなく、夢から全てが分かるわけではない。しかし、夢から与えられるメッセージに対して自分自身と向き合えると、夢を見ることは、自己理解につながる能動的な行為であることが分かる。そして夢の中で何度も自分自身に向き合う結果、夢に現れる発達課題を達成する手がかりを得られるのではないかと考えられる。

日常的フォーカシング態度と主張性及びバーンアウト，ワーク・エンゲイジメントとの
関連——仕事の要求度・資源モデルに基づいた検討——

8C20109 野崎 光紀

(指導教員 土井 晶子)

本研究では，仕事の要求度・資源モデル (JD-R モデル) に基づいて，日常的フォーカシング態度と主張性，バーンアウト，ワーク・エンゲイジメントとの関連について検討した。JD-R モデルにおける個人資源の位置づけに関する新たな知見を得ること，加えて園田 (2001) の示唆した主張性とフォーカシング態度との関連を明らかにすることを目的とした。

仕事の要求度がバーンアウトを促進させ，同時に個人資源である日常的フォーカシング態度が，同じく個人資源である主張性を向上させ，バーンアウトを軽減しワーク・エンゲイジメントを向上させる，という仮説モデルを設定した。

現在就労している成人 (20代～60代) 359名 (男性134名，女性222名，未回答3名，39.91±10.00歳) を分析対象者とし，「自分自身や仕事との関わり方」に関する質問紙を用いた，Webによる自己回答式の調査を実施した。仮説モデルの検証には共分散構造分析を用いた。

分析の結果，個人資源間においては「自己感覚表現」と他の下位尺度との相関の低さがみられたものの，日常的フォーカシング態度から主張性へ正の係数 ($\beta = .83, p < .01$)，主張性を介してバーンアウトへは負の係数 ($\beta = -.38, p < .01$)，ワーク・エンゲイジメントへは正の係数 ($\beta = .31, p < .01$) が示された。このことから，本研究にて設定した仮説は概ね支持されたといえる。

日常的フォーカシング態度によって，ネガティブな内的事象を受け止め，巻き込まれにくくなることが可能となるため，ネガティブな感情からの影響が減少しバーンアウトが軽減されることが示唆された。一方で主張性は，互いを尊重・信頼して意見を出し合える環境を生み出すことで，バーンアウトを軽減させ，ワーク・エンゲイジメントを向上させうることが示唆された。また，園田 (2001) の示唆した主張性とフォーカシング態度との関連については，自分の気持ちに丁寧に向き合い，自分がどう感じているのか認識するという点は共通しているが，自分の気持ちだけでなく，相手の状況をも考慮して言語化を行うことを重視するのが主張性で，あくまでも自分の感じや気持ちを正確に象徴化し，言語化することを重視するのがフォーカシング的態度であるという相違点も示唆された。

不安と抑うつがコラージュ作品に与える影響

8C20110 藤井 沙央理

(指導教員 土井 晶子)

本研究は、未だ明確でない点が多いコラージュの解釈について、不安と抑うつに注目し、コラージュ表現での時間軸の視点から検討することを目的とした。森谷 (2012) はコラージュ作品をアセスメントに用いる場合、量 (切片の枚数, 面積, 制作時間, 重ね貼りの枚数等) に注目すると述べており、先行研究でも、量に注目した検討がなされている。しかし、量以外の判断軸について検討した研究が見当たらない。そこで本研究では、判断軸の一つである時間軸と、時間情報の処理におけるバイアス等が深く関与している抑うつ・不安に注目し、①抑うつが高い研究協力者はインタビューにおいて過去のエピソードについて言及する傾向がある、②不安が高い研究協力者は未来のエピソードについて言及する傾向がある、の 2 つを検討した。また、切片の数、重ね貼りの出現頻度等と抑うつ・不安の関係についても考察した。近畿圏に在住する大学生 2 名、大学院生 4 人の計 6 名 (女性 6 名, 平均年齢 25.3 歳, $SD=6.5$) を調査対象者とし、抑うつと特性不安の質問紙調査への回答、コラージュ制作の実施、完成したコラージュ作品に関する半構造化インタビューへの回答を求めた。インタビュー終了後、切片数、重ね貼り、内容、インタビューで語られたコラージュの時間軸 (過去, 現在, 未来) を分析・検討を行った。さらに、インタビューでやりとりした中で新たに自分自身や作品について気づきが生じた対象者が多かったため、その内容についても検討することにした。

結果は、抑うつ・不安と切片数の関連について、統計分析は行わなかったため今回の調査では見いだせなかった。特性不安と重ね貼りの違いについて、特性不安が高い傾向にあるほど重ね貼りが多いことが示唆され、切片内容と抑うつ傾向との関連について、抑うつ傾向のあった D のみ、まなざし刺激の使用があり、どちらも先行研究を裏付ける結果であった。一方、抑うつと重ね貼りの違いについては、本調査で関連は見いだせなかった。また、抑うつと不安の傾向と時間軸の関連は見出せなかった。インタビューを通じて、作成時には明確でなかった意味が明らかになったケースでは、調査者側が丁寧に聴こうとしたことで、参加者に気づきが生じた。本調査の問題点として、調査人数が少なく女性のみになった点が挙げられ、今後はより多くの参加者を対象に実施する必要がある。時間軸の検討については、制作時に時間に関する教示等を入れるなど、細かく設定する必要がある。

青年期に見られる日常的解離について——対人関係及びインターネット行動との関連——

8C20111 宮田 真由奈

(指導教員 石崎 淳一)

近年、日常生活の中にも認められる解離が注目を集めている。本研究では、第1の目標を日常的な解離についての調査、第2の目標を下記の尺度を使用した質問紙調査とした。日常的解離体験の実態を把握し、その理解・支援について検討することを研究テーマとした。

解離と関連があると思われる心理的特性について、先行研究では、主体性の低さ、被受容感・被拒絶感と情緒が適切に機能しない状態、SNSにおける自己の分離・断片化などが指摘されており、対人関係やインターネット行動に注目し調査を行うこととした。そのため、DES (Dissociative Experiences Scale) -II 尺度、被受容感・被拒絶感尺度、スマートフォン依存傾向尺度を使用して質問紙を構成し、117名の結果を分析対象とした。なお、被拒絶感の影響により、スマートフォン依存傾向が高まり、日常的解離傾向が生じると仮定した。それに対して、被受容感を感じられていた場合、スマートフォン依存傾向及び日常的解離傾向は生じないと仮定した。また、スマートフォン依存傾向を介さずとも、被受容感・被拒絶感が直接日常的解離傾向の生じやすさ・生じにくさに影響すると想定した。

解離傾向の分布を求めた結果、DES全体の平均は32.3点、カットオフ得点30点を超過した割合は、57名(49%)となった。また、相関分析を行った結果、解離との関連は、被受容感は無相関、被拒絶感は1%水準で有意な正の相関、スマートフォン依存傾向は無相関という結果となった。最後に、重回帰分析を行った結果、従属変数をDES-IIとすると、 R^2 が.34で、0.1%水準で有意な結果となった。被受容感は0.5%水準で有意、被拒絶感は0.1%水準で有意となり、日常的解離傾向に対してこの2つが有意な正の影響を与えていた。

本研究における解離傾向の結果を先行研究と比較すると、かなり高い割合で青年が日常的に解離体験をしていると考えられる。相関分析の結果から、被受容感とスマートフォン依存傾向及び日常的解離傾向との関連は支持されなかった。重回帰分析の結果から、被受容感・被拒絶感のどちらが高まっても解離傾向は高まるといえる。本研究の結果から、被拒絶感へ対処することで、青年期における解離傾向が低まると考えられる。ただし、病的とされていた解離性体験を生じる青年が増加してきているといえることから、どの対象に支援が必要かという議論も生じると思われる。今後は日常的解離に関するより多くのデータを集め、詳しく調査し、検討していく必要があるだろう。

災害支援者の惨事ストレスに関する文献研究
——被災地内群と派遣群の比較——

8C20112 森田 明穂
(指導教員 山本 恭子)

惨事に直面した人や、あるいは惨事の様子を見聞きした人に起こるストレス反応のことを惨事ストレスという(畑中, 2016)。本稿では、2010 年以降に発生した自然災害において、災害発生後に被災地で活動した災害支援者が対象とされている文献を用いて、災害支援者のストレス要因と対策を検討した。災害支援者本人を取り巻く環境や状況に関して、被災地内群と派遣群では異なり、その差異によってより有効となる介入・支援方法も変化するのではないかと考えたため、比較結果から、群間の共通点、相違点を検討し、各群の特徴から適切な支援方法を考察した。

被災地内群と派遣群のストレス要因の比較のため、各群のストレス要因を扱った 9 件を対象に、文献で実施された質問紙調査やインタビュー調査から、惨事ストレスに関する項目・回答を抜き出した。記述内容から類似状況をまとめ、カテゴリ化し、カテゴリを群間で比較した。ストレス要因をまとめた結果、被災地内群・派遣群共に【災害的要因】、【個人的要因】、【業務的要因】の 3 つに大別することができた。また、すべての要因からなる【複合的要因】も見られた。群間を比較した結果、災害的要因の [悲惨な光景の目撃], [災害への不安], 業務的要因の [災害による出勤困難] [混乱した現場], [被災者からネガティブな感情をぶつけられる], [通常ではない業務] [遺体の目撃], [物資不足], [チーム内での対人関係], [十分な支援ができないもどかしさ], [長時間労働], 複合的要因の [身の危険] が共通して見られた。また、共通して見られたサブカテゴリでも、回答を見ると群間で差異が感じられるものもあった。本稿では、個人的要因の共通点は見られなかった。

被災地内群の個人的要因の大半は、被災者としてのものであった。派遣群は、活動期間に限りがある分、不全感や罪悪感、手持ち無沙汰な気持ちが表れやすいのではないだろうか。災害的要因の対策は、災害を体験した全ての者に適している。惨事を体験した後に、心身に変化があることは正常な反応である。そういった人間の正常な心身の反応を理解しておくことは、災害と向き合う上で必要となる。被災地内群は被災者としての問題、派遣群は慣れない地域・チーム内での活動による問題を抱えるなど、群間で個人的要因の共通点が見られなかったように、ストレス対策にも個人差があると考えられる。業務的要因の対策には災害支援者には、長時間労働等によってバーンアウトが懸念される。被災地内群にはリーダーの役割や、チームを思いやること、派遣群には派遣前後に心理教育・研修を実施することが重要視されると考えられる。

日常記憶における忘却の認識に関する認知心理学的研究

人間文化学研究科 人間行動論専攻 行動発達論講座

堤 聖月

論文要旨

本論文では、自己の忘却に関する主観的な評価や信念をまとめて「忘却に関する認識」とよんだ。そして、大学生と高齢者を対象とする七つの調査研究を通して、忘却に関する認識の加齢による変化および自伝的記憶との関連について心理学的に検討した。

本論文は全体を通して六つの章から構成される。第 1 章では、忘却の適応的な側面や記憶の自己評価の加齢による変化、自伝的記憶などについて概観し、本研究の目的を示した。第 2 章（研究 1, 研究 2）と第 3 章（研究 3）では、質問紙調査を通して、若齢者の日常生活における忘却に関する認識を明らかにした。第 4 章（研究 4, 研究 5）では、質問紙調査を通して、忘却に関する認識と自伝的記憶の関連を検討した。第 5 章（研究 6, 研究 7）では、質問紙調査と面接調査を通して、若齢者と高齢者の忘却に関する認識の違いを検討した。第 6 章では以上の研究を総括し、本論文の学術的な貢献および今後の展望について述べた。

第 2 章の研究 1 では、日常記憶における忘却に関する認識の特徴を明らかにするために、心理尺度と自由記述を含む質問紙調査を行った。その結果、忘却に関する認識を評定する尺度は「忘却傾向」「忘却統制不能感」「忘却指示性」「忘却感情」の 4 因子から構成されていることが示された。また自由記述から忘却の手記憶的な側面を日常の経験から感じることはあるものの、忘却をコントロールできないという統制不能感の高さが忘却をネガティブなものとして捉える一因となっていることが示唆された。

同じく第 2 章の研究 2 では、忘却に対する統制不能感に注目して、忘却に対する統制不能感と自伝的記憶の特性との関連を検討した。その結果、印象深い出来事としてネガティブな出来事を挙げた群とポジティブな出来事を挙げた群で忘却統制不能感に差はみられなかった。しかし、忘却統制不能感が高い群ほどネガティブで忘れたいと出来事が鮮明に想起されることが示唆された。

第 3 章の研究 3 では、意図的に忘れるために用いる方略を忘却方略と呼び、個人が日常生活で用いている忘却方略の使用頻度とその効力感について検討した。その結果、使用頻度では、考えないようにするなどの認知的忘却方略のほうが高かった。一方で、効力感につい

では、人に話すなどの行動的忘却方略のほうが高く、忘れたと思った際の方略の使用頻度と効力感の間にはずれがあることが示唆された。

第 4 章の研究 4 では、経験したことをいつか忘れてしまうだろうという見通しに伴う抵抗感や不安感などの意思、感情を「忘却への懸念」と呼び、忘却への懸念と自伝的推論やアイデンティティとの関連を検討した。その結果、忘却への懸念は 1 因子構造であることが確認された。また、忘却への懸念は、アイデンティティの確立と関連することが示唆された。

同じく第 4 章の研究 5 では、特定の出来事の忘却への懸念が自伝的記憶の特性とどのように関連するのかを検討した。その結果、想起された出来事の重要性は忘却への懸念に影響を与えていたが、自己象徴性は忘却への懸念に影響を与えていなかった。

第 5 章の研究 6 では、高齢者における忘却に関する認識を面接調査から探索的に検討した。高齢者は、「忘れることはあまり良くないと思うけど」といったような前置きがなされる場合もあったが、総じて必要な精神機能であると概ね肯定的に語っていた。外的記憶方略について語ることが多く、予定や約束といった展望記憶の失敗を避けようとする傾向がある一方で、忘却を自然現象ととらえており意図的に統制しようとはしない傾向があることが示唆された。

同じく第 5 章の研究 7 では、研究 1 で作成された忘却に関する認識尺度が高齢者に適用可能かを確認するとともに、若齢者と高齢者の結果を比較することで、高齢者のもつ忘却に関する認識の特徴を検討した。その結果、若齢者と高齢者では忘却に関する認識が異なる可能性が示唆された。特に高齢者のもつ忘却に関する認識の特徴として、加齢による一般的な現象として受容的な見方をしていることが示された。

本論文は、以上の七つの研究を通して、日常記憶における忘却の認識について次のような貢献を果たした。第一に、心理尺度に加えて自由記述形式による質問紙調査と面接調査を用いて、日常記憶における忘却の認識の特徴を新たに示した。第二に、自伝的記憶に対する忘却への懸念尺度を開発し、自伝的記憶と自己との関連を忘却の観点から検討した。第三に、従来の自伝的記憶研究では検討されてこなかった、個人が「忘れたくない」と評価している記憶の特性に関する知見を新たに提供した。第四に、若齢者と高齢者の忘却に関する認識を比較することで加齢による変化を示し、記憶活動の面から高齢者の精神的健康を支援するための知見を提供した。

氏 名：堤 聖月

学籍番号：9516102

論文題目：日常記憶における忘却の認識に関する認知心理学的研究

学 位 名：博士（人間文化学）

学位取得日：2021年9月16日

指導教員：清水 寛之（神戸学院大学心理学部教授）

主 査：長谷川 千洋（神戸学院大学心理学部教授）

副 査：早木 仁成（神戸学院大学人文学部教授）

副 査：村井 佳比子（神戸学院大学心理学部准教授）

副 査：清水 寛之（神戸学院大学心理学部教授）

副 査：佐藤 浩一（群馬大学大学院教育学研究科教授）

2021 年度 活動報告

(教育・研究・社会貢献・大学運営) (アルファベット順)

秋山 学 (あきやま まなぶ)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・消費者心理学 (消費者心理学)
- ・現代の社会 (消費者教育) (共通教育) (オムニバス)
- ・心理学入門実習 I (人間心理学入門実習 I) (オムニバス)
- ・心理学専門実習 I (発達・臨床・医療・社会心理学実習 I)
- ・心理学専門実習 II (発達・臨床・医療・社会心理学実習 II)
- ・専門職心理実習 I (心理実習)
- ・心理学入門演習 I (人文入門演習)
- ・心理学発展演習 I (専攻演習 IV)
- ・心理学発展演習 II
- ・卒業論文 (卒業論文)

[大学院]

- ・心理学研究法 II

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・黒川 優美子・秋山 学 (2022). 他者の存在する場面における欺瞞の曖昧性が生理反応に及ぼす影響 神戸学院大学心理学研究, 4, (ページ未確定)

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本消費者行動研究 (日本消費者行動研究学会) 編集長
- ・産業・組織心理学会 理事・編集委員／編集事務局 (代理)
- ・日本心理学会 代議員
- ・宝塚市消費生活審議会 会長
- ・社会心理学研究 論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「心理学から読み解く悪質商法 ～わかっているつも騙される！？～」(高知県立消費生活センター・高知県立大学連携講座「消費生活講座」 2021年9月19日 高知県立大学 (遠隔配信))
- ・「支払いの仕組みを心理学で読み解く ～リボ払いを使いこなすのが難しいわけ～」(高知県立消費生活センター・高知県立大学連携講座「消費生活講座」 2021年9月19日 高知県立大学 (遠隔配信))
- ・「消費者問題解決のための「消費者行動研究」－現代における消費者問題とその解決のための取り組み－」指定討論 (産業・組織心理学会第143回部門別研究会 (消費者行動部門 2021年12月4日 同志社大学 (遠隔配信))
- ・「マルチ商法にはまる若者の心理」(日本司法書士会連合会 2021年3月4日 司法書士会館 (遠隔配信))

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・心理学部長
- ・私大助成審査委員

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員

3. その他

なし

土井 晶子 (どい あきこ)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理学的支援法Ⅱ (臨床心理学Ⅱ)
- ・心理学入門実習Ⅰ (人間心理学入門実習Ⅰ) (オムニバス)
- ・専門職心理実習Ⅱ
- ・心理学専門演習Ⅰ (専攻演習Ⅱ)
- ・心理学専門演習Ⅱ (専攻演習Ⅲ)
- ・専門職心理実習Ⅰ
- ・専門職心理実習Ⅱ

【大学院】

- ・心理実践実習B
- ・心理実践実習Ⅲ
- ・心理実践実習Ⅳ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

- ・神戸女学院大学人間科学部 非常勤講師 (「心理行動科学文献講読」)
- ・関西国際大学大学院 非常勤講師 (「産業心理学特論」)
- ・臨床心理系大学院修了生のスーパーバイザー (関西国際大学大学院)

【研究活動】

1. 著書

- ・Doi, A. (2021). Recovering your strength, passion and love in life: Focusing for empowering helpers and

company workers, In Kypriotakis, N. & Moore, J. (Eds.) *Senses of Focusing*. Athens: Eurasia Publications.

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・Doi, A. (2021). Helping people to benefit from PCA in daily lives, Poster presented at PCE2021, 6月20日, Auckland, New Zealand (オンライン開催)
- ・土井 晶子・森永 康子・清末 有紀 (2021) 「フォーカシング的態度」と自己効力感, ソーシャル・スキル, Locus of Control の関連について, 日本人間性心理学会第40回大会 (8月28日, 九州大学 (オンライン開催))
- ・井内 かおる・高松 里・土井 晶子・永野 浩二 (2021). 新型コロナウイルスに関する経験は, どのように語られるのか: モノログとダイアログの比較, 日本人間性心理学会第40回大会 (8月29日 九州大学 (オンライン開催))
- ・土井 晶子・村井 佳比子・松島 由美子 (2021). 中小企業勤務者のメンタルヘルスに対する新型コロナウイルス感染症の影響, 日本産業ストレス学会第29回大会 (3月25~26日 ウィンクあいちにて)

4. その他

- ・陸上自衛隊姫路駐屯地 非常勤カウンセラー
- ・(独) 大阪産業保健総合支援センター 産業保健相談員

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 土井 晶子 (研究分担者), 「中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発」 (研究代表者: 松島 由美子, 2021~2023年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・Scientific Committee member for PCE2022
- ・Person-Centered & Experiential Psychotherapies 論文査読
- ・「キャリア・カウンセリング研究」 論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「コロナ・ストレスとのつきあい方」 ((独) 大阪産業保健総合支援センター主催 2021年6月17日, 7月12日&8月23日 大阪産業保健総合支援センターにて)
- ・「セラピーに活かすフォーカシング」 (明石コミュ

- ニティ創造協会主催, 2021年8月11日, 8月25日&9月10日 アスピア明石北館にて)
- ・「無理に気づき, 自分をいたわるセルフケア」((独)大阪産業保健総合支援センター主催 2021年9月2日, 10月7日&11月18日 大阪産業保健総合支援センターにて)
- ・「コロナ禍におけるメンタルヘルス」(大阪市こころの健康センター主催, 2021年10月12日, 大阪市こころの健康センターにて)
- ・「フォーカシングとフェルトセンスの神経科学」通訳(フォーカシング・プロフェッショナル会主催, 2021年12月4日&12月5日 オンライン)
- ・「メンタルヘルス対策: コロナ禍におけるセルフケア」(大阪府社会保険協会主催, 2021年12月21日, 大阪府社会福祉会館にて)
- ・「メンタルヘルス対策: 前向きな気分をつくるセルフケア1&2」(日東電工株式会社主催, オンデマンド)
- ・"Finding your resources from inside" (Help for helpers project, 2021年2月28日, オンライン)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他

なし

道城 裕貴 (どうじょう ゆき)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理学入門実習Ⅰ(人間心理学入門実習Ⅰ)(オムニバス)
- ・心理学入門実習Ⅲ(発達心理学入門実習)
- ・専門職心理演習Ⅰ
- ・専門職心理演習Ⅱ

- ・心理学入門演習Ⅰ(人文入門演習)
- ・心理学基礎演習Ⅱ(人間心理学基礎演習)
- ・心理学専門演習Ⅰ(専攻演習Ⅱ)
- ・心理学専門演習Ⅱ(専攻演習Ⅲ)

【大学院】

- ・教育分野に関する理論と支援の展開
- ・心理実践実習A・B
- ・心理学演習Ⅲ・Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

教員免許状更新講習「教育の最新事情」の担当講師

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・夏目 瑞希・本岡 寛子・道城 裕貴・村井 佳比子(2021). 攻撃性が自己嫌悪に結びつく要因の検討, 神戸学院大学心理学研究, 4, 43-48.

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・神戸市校区調整審議会委員
- ・神戸市教育委員会 巡回相談員

2. 講演など

なし

3. セミナー・研修会等の講師など

- ・神戸市教育委員会 高等学校における特別支援教育研修会 講師(神戸市教育委員会主催 12月9日 総合教育センターにて)
- ・神戸学院大学附属高等学校 教員研修 講師(2021年3月1日 附属高校にて)

4. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

5. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・教務委員（大学院担当）
- ・FD 委員
- ・教職教育センター委員
- ・教職課程小委員

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員
- ・学部内自己点検評価委員
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員

3. その他
なし

長谷川 千洋（はせがわ ちひろ）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・心理学概論
- ・心理専門職入門（公認心理士の職責）
- ・神経心理学（神経・生理心理学）（神経心理学）
- ・心理学入門演習Ⅰ（人文入門演習）
- ・心理学入門演習Ⅱ（人間心理学入門演習）
- ・心理学基礎演習Ⅱ（専攻演習Ⅰ）
- ・心理学専門演習Ⅰ（専攻演習Ⅱ）
- ・心理学専門演習Ⅱ（専攻演習Ⅲ）
- ・専門職心理演習Ⅰ（心理演習）
- ・専門職心理演習Ⅱ（心理演習）

[大学院]

- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理実践実習 C

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・大学院修了生に対する公認心理師資格試験対策活動

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・齋藤 朋子・長谷川 千洋・博野 信次・遠藤 卓行（2021）. パーキンソン病における高照度光療法による認知および運動機能の変化. 日本神経心理学会 45 回大会（2021 年 10 月 1 日オンライン開催）
- ・長谷川 千洋（2021）. シンポジウム 臨床神経心理士：学会認定資格取得のお勧め—公認心理師の立場から—. 日本高次脳機能障害学会第 45 回大会（2021 年 12 月 9 日オンライン開催）

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本神経心理学会 評議員
- ・日本高次脳機能障害学会 代議員
- ・臨床神経心理士資格認定・カリキュラム委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「令和 3 年度第 2 回高次脳機能障がい支援研修会：高次脳機能障害の心理過程を考える」（鳥取県高次脳機能障がい支援拠点機関医療法人十字会野島病院 高次脳機能センター主催 2021 年 3 月 26 日オンライン）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・教務委員
- ・FD 委員
- ・大学院委員
- ・研究助成金審査委員

- ・賞罰委員
- ・環境保全委員
- ・省エネルギー推進委員

2. 学部内委員

- ・学部内自己点検評価委員
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他

なし

博野 信次 (ひろの のぶつぐ)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・生理心理学 (神経・生理心理学)
- ・高齢者心理学 (高齢者心理学)
- ・人体の構造と機能 (人体の構造と機能及び疾病) (医学概論)
- ・行動神経学 (行動神経学)
- ・心理学基礎実験実習 I (心理学実験) (心理学基礎実験実習)
- ・心理学基礎実験実習 II (心理学実験) (心理学基礎実験実習)
- ・専門職心理実習 I
- ・専門職心理実習 II
- ・心理学入門実習 I (人間心理学入門実習) (オムニバス)
- ・専門職心理演習 I
- ・専門職心理演習 II

[大学院]

- ・心理実践実習 III
- ・心理実践実習 IV

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・心理実践実習 C 実習指導者

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・齋藤 朋子・長谷川 千洋・博野 信次・遠藤 卓行 (2021). パーキンソン病における高照度光療法による認知および運動機能の変化. 日本神経心理学会 45 回大会 (2021 年 10 月 1 日オンライン開催)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「認知症を正しく理解しよう～アルツハイマー病とレビー小体病～」(神戸学院大学・大阪市立総合生涯学習センター連携講座くらしに生きる医学/心理学講座) 2021 年 9 月 25 日大阪市立総合生涯学習センター第 2 研修室にて

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

- ・心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会委員長

3. その他

なし

石崎 淳一 (いしざき じゅんいち)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・心理学入門実習 I (人間心理学入門実習 I) (オムニバス)
- ・心理学基礎演習 I (人間心理学基礎演習)
- ・心理学基礎演習 II (専攻演習 I)

[大学院]

- ・心理学演習 III
- ・心理学演習 IV
- ・家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践
- ・心理実践実習 I
- ・心理実践実習 II
- ・心理実践実習 III
- ・心理実践実習 IV
- ・心理実践実習 A
- ・心理実践実習 B
- ・心理実践実習 C
- ・心理実践実習 D

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・神戸学院大学美術部鷗風會・顧問
- ・人間文化科学研究科心理学専攻臨床心理学系修了生(公認心理師等)のスーパービジョン

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・陶山 和美・石崎 淳一 (2021). 大学生のアレキシサイミア傾向と認知的感情制御方略, 精神的健康の関連. 心身医学, 61 (3), 266-274.
- ・石崎 淳一 (2022). コロナ禍のストレス・コーピングにマインドフルネスの基本的な技法を活用する. 神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要, 15, (印刷中).

3. 学会・研究会発表

- ・2nd.ICSG(International Conference on Science and God). "Environmental Restoration: Hope from the Frontiers of Science" (Korea, Europe, U.S., 4月23日) ディスカッショント 参加

4. その他

- ・山上 榮子, 赤堀 富子, 陶山 和美と共に定期的に障害児者へのアートセラピー等に関する研究会を実施した。

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・平和政策研究所理事

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・神戸市立舞多聞小学校研修会 講師「発達の障害を理解し, 支援する①」(神戸市, 5月26日).
- ・神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター・フォーラム「コロナ時代を生きる」発表者「コロナ禍のストレスにマインドフルネスを活用する」(神戸市, 8月7日).
- ・神戸市シルバーカレッジ 講師「コミュニケーション演習」(神戸市, 11月1日).
- ・神戸市立舞多聞小学校研修会 講師「発達の障害を理解し, 支援する②」(神戸市, 11月9日).

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・石崎 淳一 (2021) 発達過程のトラウマ的ダメージを理解する—複雑性 PTSD の提起. En-ichi Forum, 2021.12, 18-19.

4. その他

- ・神戸市教育委員会 (2020年度) 神戸市「通常の学級における LD 等への特別支援」巡回相談員
- ・明石市教育委員会 (2020年度) 明石市特別支援教育巡回指導員

【大学運営】

1. 学内委員

- ・心理学研究科長
- ・総合企画会議委員
- ・評議員
- ・大学院委員会委員
- ・危機管理委員会委員
- ・男女共同参画推進委員会委員
- ・国際化推進委員会委員
- ・全学研究推進委員会委員
- ・公正研究委員会委員
- ・生命倫理・安全性委員会委員
- ・全学教育推進機構会議委員
- ・教学 IR 委員会委員

- ・私大助成審査委員会委員
- ・研究助成金審査委員会委員

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員会委員
- ・学部内自己点検評価委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
- ・広報活動委員会委員
- ・実習運営委員会委員

3. その他

なし

河瀬 諭 (かわせ さとし)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・行動科学概論
- ・心理学専門演習Ⅰ（専攻演習Ⅱ）
- ・心理学専門演習Ⅱ（専攻演習Ⅲ）
- ・心理学入門演習Ⅰ（人文入門演習）
- ・心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験）（心理学基礎実験実習Ⅰ）
- ・心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験）（心理学基礎実験実習Ⅱ）
- ・心理学専門実習Ⅰ（発達・臨床・医療・社会心理学実習Ⅰ）
- ・心理学専門実習Ⅱ（発達・臨床・医療・社会心理学実習Ⅱ）

[大学院]

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・相愛大学音楽学部 非常勤講師（「音楽心理学」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・Kawase, S. (2021). Emotional Characteristics of Music

and Groove: Can Sad Music with Drum Breaks Induce Groove? 32nd International Congress of Psychology. (2021年7月18日～23日 オンライン開催)

- ・Kawase, S., Kumasaka, Y., Nagisa, C., & Okano, M. (2021). Musical Coordination Ability of Children: Comparison between Pupils of Group and Individual Lessons. 32nd International Congress of Psychology. (2021年7月18日～23日 オンライン開催)
- ・Kawase, S. & Kitabayashi, Y. (2021). Music Teachers' Views of Non-musical Abilities in Children Acquired through Musical Lessons: A Large-Scale Study of Non-cognitive Skills. ICMPC16-ESCOM11 (2021年7月28日～31日 オンライン開催)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究(C)「音楽と身体運動の結びつきにおける個人差をもたらす要因」(研究代表者:河瀬諭, 2020～2022年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・Music & Eye-Tracking – Conference 2022 Program Committee
- ・電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会 専門委員
- ・日本音楽知覚認知学会 編集委員
- ・『Journal of New Music Research』論文査読
- ・『Psychology of Music』論文査読
- ・『音楽知覚認知研究』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「音楽で伸ばす子どもの力」(東京都市大学二子幼稚園 父母の会主催 2021年9月9日～17日 Youtubeにて)
- ・「音楽と身体」(神戸学院大学外部アドバイザー会議 2021年6月21日 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「音楽を聴いていると気分良く走れるように感じるのには理由があった!?モチベUPだけじゃない音楽のスゴイ効果」(日本財団パラサポ WEB 2021年12月13日)
- ・「ガッテン!」(NHK総合 2022年1月12日)

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
・「神戸学院大学心理学研究」編集委員

3. その他
なし

小久保 香江 (こくぼ かえ)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・心理検査法 I (心理検査法)
- ・心理学入門実習 I (人間心理学入門実習 I) (オムニバス)
- ・専門職心理実習 II (心理実習)
- ・健康科学演習 B
- ・心理学入門演習 I (人文入門演習)
- ・心理学入門演習 II (人間心理学入門演習)
- ・心理学基礎演習 II (専攻演習 I)
- ・心理学専門演習 I (専攻演習 II)
- ・心理学専門演習 II (専攻演習 III)
- ・専門職心理演習 III (心理演習)

[大学院]

- ・心理的アセスメントに関する理論と実践
- ・心理実践実習 C
- ・心理学演習 III
- ・心理学演習 IV

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・大学院受験対策英語指導

3. 学外での教育活動

- ・森之宮病院 診療部 公認心理師

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文

- ・小久保 香江・畠中 めぐみ・宮井 一郎 (2022). 両

側頭頂後頭葉病変により視覚性注意障害を呈した
1 例 神戸学院大学心理学研究, 4.

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・教職課程小委員
- ・学生委員

2. 学部内委員

- ・「神戸学院大学心理学研究」編集委員
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・学部内自己点検評価委員

3. その他

- ・広報担当
- ・ウェルカムスタッフ担当

小山 正 (こやま ただし)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・言語心理学 (学習・言語心理学)

- ・特別支援教育概論（発達障害学Ⅱ）
- ・臨床心理学概論（臨床心理学Ⅰ）
- ・心理学入門実習Ⅰ（人間心理学入門実習Ⅰ）（オムニバス）
- ・心理学入門演習Ⅰ（人文入門演習）
- ・心理学入門演習Ⅱ（人間心理学入門演習）
- ・心理学専門演習Ⅰ（専攻演習Ⅱ）
- ・心理学専門演習Ⅱ（専攻演習Ⅲ）

【大学院】

- ・福祉分野に関する理論と支援の展開
- ・心理実践実習 A
- ・心理実践実習 B
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・甲南女子大学大学院人文科学総合研究科心理教育学専攻 非常勤講師（「言語発達心理学特論」）
- ・神戸親和女子大学大学院文学研究科教育学専攻 非常勤講師（「発達心理学特論」）
- ・京都医健専門学校 言語聴覚士学科 非常勤講師（「言語発達障害学Ⅳ」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・小山 正 (2020). 子どもの言語と象徴機能の発達. 最新精神医学 26 (3), 201-207.

3. 学会・研究会発表

- ・Tadashi Koyama (2021). Early word production and cognitive development in children with general learning difficulties. 50th Annual of Meeting of Jean Piaget Society. (2021年1月1日～5日 オンライン開催)
- ・Tadashi Koyama (2021). Fundamental development for the emergence of pointing in children with general learning difficulties. British Psychological Society, Developmental Section Annual Conference 2021. (2021年9月5日～17日 オンライン開催)
- ・小山 正 (2021). 初期の時間, 位置, 場所を表示する語の広がり と 動作語獲得における速度: その基盤にある発達. 第66回日本音声言語医学会総会・学術講演会 (2021年10月7日, 杏林大学医学部にて)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「発達障害児の表出語彙学習過程に見られる非定型性」(研究代表者: 小山 正, 平成30～令和3年度)
- ・日本音声言語医学会第1回優秀論文賞(言語部門) 「家庭における子どもの遊びや認知発達と初期言語学習との関連」(「音声言語医学」第61巻4号掲載) 日本音声言語医学会, 2021年10月11日

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本臨床発達心理士会 「臨床発達心理実践研究誌」編集委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「知的発達症をもつ子どもの発達支援・早期療育」京都国際社会福祉センター, 治療教育セミナー講師

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・入試総務副委員長

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員

3. その他

- ・臨床発達心理士担当

松島 由美子 (まつしま ゆみこ)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・発達心理学（発達心理学Ⅰ）
- ・心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験）（心理学基礎

実験実習 I)

- ・心理学基礎実験実習 II (心理学実験) (心理学基礎実験実習 II)
- ・心理学入門演習 II (人間心理学入門演習)
- ・心理学基礎演習 I (人間心理学基礎演習)
- ・心理学基礎演習 II (専攻演習 I)
- ・心理学専門演習 I (専攻演習 II)
- ・心理学専門演習 II (専攻演習 III)

[大学院]

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発」(研究代表者: 松島 由美子, 2021 年～2023 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本産業ストレス学会 理事

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・模擬授業「ストレスと上手につき合おう！」(2021 年 6 月 7 日 オンラインで実施)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・「神戸学院大学心理学研究」 論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

- ・就職委員

3. その他

- ・学術講演会担当
- ・オープンキャンパス担当

三和 千徳 (みわ ちとく)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・精神疾患とその治療 (精神病理学 I)
- ・心理学的支援法 I (精神病理学 II)
- ・心理学入門実習 I (人間心理学入門実習 I) (オムニバス)
- ・専門職心理実習 II (心理演習)
- ・専門職心理演習 III (心理演習)

[大学院]

- ・保健医療分野に関する理論と支援の展開
- ・心理実践実習 I
- ・心理実践実習 II
- ・心理実践実習 III
- ・心理実践実習 IV
- ・心理実践実習 D

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・心理学研究科大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・三和 千徳 (2022). コロナ禍の自殺の現状と対策 神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要, 15 (印刷中)
- ・三和 千徳 (2022). コロナ禍を体験して—COVID-19 の神経症状について—精神分析と人間存在分析, 30 (印刷中)

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「コロナ渦の自殺と対策」(神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター主催フォーラム 2021年8月7日 オンライン開催)
- ・「こころの病を知る—精神医学入門—」(神戸学院大学高大連携授業 2021年9月22日 10月27日 兵庫県立明石南高等学校)
- ・「新型コロナウイルス感染症とこころの健康」(阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット 公開講座フェスタ 2021年11月23日 J:COM 中央区民センター)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「衝撃・医院放火」(『毎日新聞』インタビュー記事 2021年12月26日)

4. その他

- ・みわ心療クリニック 院長
- ・神戸精神分析研究所 監事
- ・NPO 法人コミュニティーカウンセリング協会 理事

【大学運営】

1. 学内委員

- ・心理臨床カウンセリングセンター長

2. 学部内委員

- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他

なし

毛 新華 (もう しんか)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・対人心理学 (対人心理学 I)
- ・心理学史
- ・心理調査概論
- ・心理学入門実習 I (人間心理学入門実習 I (オムニバス))
- ・心理学基礎演習 II (専門演習 I)
- ・心理学発展演習 I (専門演習 IV)
- ・心理学発展演習 II
- ・卒業論文 (卒業論文)
- ・心理学専門実習 I (発達・臨床・医療・社会心理学実習 I)
- ・心理学専門実習 II (発達・臨床・医療・社会心理学実習 II)

[大学院]

- ・心理学演習 I
- ・心理学演習 II
- ・心理学演習 III
- ・心理学演習 IV

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・高大連携部派遣
兵庫県立伊川谷高等学校 R3 年度異文化交流授業講師 (2021年9月9日)

3. 学外での教育活動

- ・大阪市立大学生生活科学部 非常勤講師 (「心理学統計法」)

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・毛 新華・清水 寛之・木村 昌紀 (2021). 中国の在留邦人における文化適応課題の検討—日中文化の相違点の認識に関する調査から— 神戸学院大学心理学研究, 4, 33-42.
- ・森 聡太・長谷 和久・毛 新華 (2022). 大学生のオンラインゲームの利用と援助行動との関連—ゲームの種類, 利用時間, そして社会的スキルの観点を含めて— パーソナリティ研究, 30, ページ未定
- ・毛 新華 (2022). 中国の遼寧師範大学心理学院 (1) —師範大学特有の心理学研究— 文部科学教育通信, 524, 30-31.

- ・毛新華 (2022). 中国の遼寧師範大学心理学院 (2) —心理学の実践応用, そして日本を注視した国際交流— 文部科学教育通信, 525, ページ未定

3. 学会・研究会発表

- ・毛新華 (2021). 日本で心理学の勉学・研究および教育に携わった 24 年間の所感—ソーシャルサポートの観点から— 関西心理学会第 132 回大会シンポジウム: 留学生として学び, 教員として異国で働く—大いに語る大学と心理学— (2021 年 8 月 8 日 同志社大学 オンライン開催)
- ・木村昌紀・毛新華・小林知博 (2021). 日本人と中国人はおしゃべりでいかに関わるのか?—日本人学生と中国人留学生による情緒志向的会話の実験的検討— 日本社会心理学会第 62 回大会 (2021 年 8 月 25 日~9 月 1 日 帝京大学 オンライン開催)
- ・毛新華・清水寛之・木村昌紀 (2021). 中国の在留邦人の文化適応課題に関する探索的調査 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1 日~8 日 明星大学 オンライン開催)
- ・木村昌紀・毛新華・小林知博 (2021). 日本人と中国人はどのように討議的コミュニケーションを行うのか?—日本人学生と中国人留学生による討議の実験的検討— 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1 日~8 日 明星大学 オンライン開催)
- ・Xinhua Mao (2021). Crisis and resilience, 2021 China-Japan-Korea Tri-National Psychology Symposium (Online). Organizer: Japanese Psychological Association international Committee, Buxin Han, Choi Kee-Hong, Matia Okubo, Xinhua Mao, Saori Nishikawa, Yuka Ozaki; Speaker: Buxin Han, Saori Nishikawa, Mei Yamagata, Zhihong Ren, Eunsoo Choi, The 85th Annual Convention of the Japanese Psychological Association(JPAS-004) (9/4/2021). Tokyo, Japan. (2021 年 9 月 4 日 明星大学 オンライン開催)
- ・毛新華 (2021). 日本心理学会企画シンポジウム (JPAS-008 一般公開): コロナ禍での「留学生ネットワーク」を活用した“つながり作り”と支援企画: 毛新華・安藤清志・清水由紀・杉若弘子・佐藤徹男・藤平真由美・鈴木華子 司会: 毛新華 話題提供者: 法弁・湯立・劉夢思・宮田裕光・石井治恵 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1~8 日 明星大学にて オンライン開催)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・学術研究助成基金助成金: 基盤研究 (C) 「中国の在留邦人の文化適応支援に関する心理学的研究 (課

題番号: 21K02991)」 研究代表者: 毛新華, 研究協力者: 清水寛之・木村昌紀, 2021 年度~2024 年度

- ・学術研究助成基金助成金: 基盤研究 (C) 「日本人と中国人の異文化コミュニケーションに関する実験社会心理学的研究 (課題番号: 16K04276)」 研究代表者: 木村昌紀, 研究協力者: 毛新華・小林知博, 2016 年度~2021 年度

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本心理学会 国際委員
- ・関西心理学会 委員
- ・日本心理学会「日韓中三カ国国際会議」2021 年東京シンポジウム日本側担当
- ・阪南大学留学生 O B ・ O G 会会長

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「社会科学の叡智を抽出する: アンケート調査の方法」 (大連外国語大学漢学院主催 2021 年 4 月 10 日 オンライン開催)
- ・「社会科学の叡智を共有する: 学術論文作成のノウハウ」 (大連外国語大学漢学院主催 2021 年 4 月 11 日 オンライン開催)
- ・「留学生の日本文化適応と社会的スキル」 (檜山奨学財団主催 2021 年 8 月 23 日 オンライン開催)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・教務委員 (学部担当・研究科担当)
- ・共通教育等運営委員
- ・生涯学習委員
- ・カリキュラム・アセスメント・チェックリスト委員

2. 学部内委員

- ・学部内自己点検評価委員
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会委員

3. その他

- ・心理学部広報グループメンバー (ホームページ, オープンキャンパス, 特別重点広報)

村井 佳比子 (むらい けいこ)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・臨床心理学特論Ⅱ
- ・心理学入門実習Ⅰ (人間心理学入門実習Ⅰ) (オムニバス)
- ・専門職心理演習Ⅰ (心理演習)
- ・専門職心理演習Ⅱ (心理演習)
- ・心理学専門演習Ⅰ (専攻演習Ⅱ)
- ・心理学専門演習Ⅱ (専攻演習Ⅲ)
- ・心理学発展演習Ⅱ (専攻演習Ⅳ)
- ・卒業論文 (卒業論文)

[大学院]

- ・心理実践実習Ⅰ
- ・心理実践実習Ⅱ
- ・心理実践実習Ⅲ
- ・心理実践実習Ⅳ
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・夏目 瑞希・本岡 寛子・道城 裕貴・村井 佳比子 (2021). 攻撃性が自己嫌悪に結びつく要因の検討 神戸学院大学心理学研究, 4, 43-48.
- ・村井 佳比子 (2022). オンライン実験プログラムを用いた反応変動性測定を試み 神戸学院大学心理学研究, 4, (印刷中).

3. 学会・研究会発表

- ・土井 晶子・村井 佳比子・松島 由美子 (2022). 中小企業勤務者のメンタルヘルスに対する新型コロナウイルス感染症の影響 第29回日本産業ストレス学会 (2022年3月25-26日 ウィンク愛知にて)

4. その他

- ・内山 伊知郎・伏島 あゆみ・原井 宏明・大矢 幸弘・漆原 宏次・坂上 貴之・村井 佳比子 (2021). 興奮と制止, 強化と弱体化, アレルギーと強迫: 免

疫反応でも観念でも治す原理はやっぱりエクスポージャー 日本心理学会第85回大会 公募シンポジウム: 日本行動科学学会年次大会 (2021年9月1日-8日 オンライン開催)

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 若手研究 研究代表者「セラピストの面接技術がクライアントの行動変化をもたらすメカニズムの実験的検討」(2020年度~2022年度)
- ・科学研究費補助金 基盤(C) 研究分担者「中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発」(2021年度~2023年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本行動分析学会 理事

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「行動療法の基本・行動療法の実践」(一般財団法人明石コミュニティ創造協会主催 2021年10月7日・12月23日 ウィズ明石にて)
- ・「神戸動機づけ面接研究会第23回研修会」(神戸動機づけ面接研究会主催 2021年6月19日 オンラインにて)
- ・「動機づけ面接研修会・初級編」(神戸動機づけ面接研究会主催 2021年9月23日 オンラインにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『心理学研究』査読
- ・『神戸学院大学心理学研究』査読
- ・模擬授業「心理学入門」(2021年7月1日 城南菱創高校にて, 2021年12月9日 姫路南高校にて)

【大学運営】

1. 学内委員

- ・広報委員
- ・入試総務委員

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他

- ・広報担当

長谷 和久 (ながや かずひさ)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理統計入門 (心理学統計法) (心理統計基礎)
- ・心理統計法 (心理学統計法) (心理統計法)
- ・心理学概論 (心理学概論)
- ・健康科学入門① (共通教育)
- ・健康科学入門② (共通教育)
- ・健康科学入門③ (共通教育)
- ・心理学入門実習Ⅵ (社会心理学入門実習)
- ・心理学専門実習Ⅰ (発達・臨床・医療・社会心理学実習Ⅰ)
- ・心理学専門実習Ⅱ (発達・臨床・医療・社会心理学実習Ⅱ)
- ・心理学入門演習Ⅰ (人文入門演習)
- ・心理学入門演習Ⅱ (人間心理学入門演習)
- ・心理学基礎演習Ⅰ (人間心理学基礎演習)
- ・心理学専門演習Ⅰ (専攻演習Ⅱ)
- ・心理学専門演習Ⅱ (専攻演習Ⅲ)

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・神戸学院大学 ボクシング部 顧問

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・Nagaya, K. (2021). Why and under what conditions does loss aversion emerge? *Japanese Psychological Research*, Advance online publication.
- ・Nagaya, K. (2021). The relationship between temperament of conformity, the belief in a just world, and the practice of COVID-19 countermeasures in Japan. *Kobe Gakuin University Journal of Psychology*, 4, 25-32.
- ・森 聡太・長谷 和久・毛 新華 (印刷中). 大学生のオンラインゲームの利用と援助行動との関連—ゲームの種類, 利用時間, そして社会的スキルの観点を含めて— パーソナリティ研究

3. 学会・研究会発表

- ・長谷 和久 (2021). 人々はどんな食品を恐れるか: 食品リスク認知を構成する要因の検討, 第 34 回日本リスク学会年次大会 (11 月 21 日 オンライン

開催)

- ・長谷 和久 (2022). 遺伝子組み換え品種に対して生じる評価の歪みの発生源の検討, 第 4 回犬山認知行動研究会議 (ICBM) (1 月 8 日 オンライン開催)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・日本学術振興会科学研究費助成事業 (若手研究), リスク情報に対する感応度の個人差の分析: 個人に適した情報の提示手法を見据えて (課題番号: 21K13681) 研究代表者: 長谷 和久, 2021 年度~2024 年度
- ・公益財団法人食生活研究会研究助成, 従来の 2 因子モデル (恐ろしさ・未知性因子) で説明できない食品リスク認知を司る特有の要因の明確化, 研究代表者: 長谷 和久, 2021 年度

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・『リスク学研究』論文査読
- ・『教育開発ジャーナル』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・衛生委員

2. 学部内委員

- ・「神戸学院大学心理学研究」編集委員

3. その他

- ・学術講演会担当

中川 裕美 (なかがわ ひろみ)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・産業・組織心理学 (広告心理学)
- ・心理学基礎実験実習Ⅰ (心理学実験) (心理学基礎実験実習Ⅰ)
- ・心理学基礎実験実習Ⅱ (心理学実験) (心理学基礎実験実習Ⅱ)
- ・心理学入門実習Ⅳ (人間心理学入門実習Ⅱ)
- ・専門職心理演習Ⅰ (心理演習)
- ・専門職心理演習Ⅱ (心理演習)
- ・心理学入門演習Ⅱ (人間心理学入門演習)
- ・心理学専門演習Ⅰ (専攻演習Ⅱ)
- ・心理学専門演習Ⅱ (専攻演習Ⅲ)

【大学院】

- ・産業・労働分野に関する理論と支援の展開
- ・心理実践実習Ⅲ
- ・心理実践実習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・中川 裕美・竹田 剛・越川 陽介・岡村 心平 (2021). コロナ禍のテレワークおよび仕事と家庭の境界管理がワーク・ファミリー・バランスに与える影響 産業・組織心理学研究, 35 (1), 165-178
- ・中川 裕美 (2022). うつ病休職者に対するワーク・ライフ・バランス支援の導入に向けて 神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要 15, pp.43-50.

3. 学会・研究会発表

- ・中川 裕美 (2021). コロナ禍のテレワークおよび仕事と家庭の境界管理がワーク・ファミリー・バランスに与える影響 経営行動学会第1回 ECR トレーニングコース (2021年5月15日 Web開催にて)
- ・中川 裕美 (2021). うつ病休職経験者におけるプレゼンティーズム抑制要因の検討 産業・組織心理学学会第36回大会 (2021年9月4日 オンライン開催)

ン開催)

- ・池田 浩・中川 裕美・縄田 健悟・安達 悠子・古川 久敬 (2021). ウイズ・アフターコロナにおける産業・組織心理学：新しい働き方のもとでイキイキと働き、成果を上げるために 産業・組織心理学学会第36回大会 (2021年9月4日 オンライン開催)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 若手研究 うつ病休職者に対するワーク・ライフ・バランス支援プログラムの開発 (研究代表者: 中川 裕美 2019年~2021年度)
- ・科学研究費補助金 基盤 (C) 中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発 (研究代表者: 松島由美子 2021年~2023年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・『産業・組織心理学研究』 論文査読
- ・『健康心理学研究』 論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「ストレス社会をしなやかに生きる！セルフケア講座」(神戸学院大学・大阪市立総合生涯学習センター主催 2021年10月9日 大阪市立総合生涯学習センター)
- ・「働く人たちへの心理支援」(高大連携授業 2021年11月15日 ポートアイランドポートキャンパスにて)
- ・「コロナ禍のメンタルヘルスとセルフケア~健康にイキイキと働くために~」(パナソニック健康保険組合主催 2021年11月16日 パナソニック株式会社高槻支部にて)
- ・「コロナ禍のメンタルヘルス~新しい働き方のもとで健康を保持するために~」(はりま産学交流会主催 2021年11月19日 Webにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・久保 真人・藤野 正寛・中川 裕美・吉田 典生「第140回部門別研究会(組織行動部門)産業現場におけるマインドフルネス」(『産業・組織心理学研究』第35巻, 第2号, pp.291-295)

4. その他

- ・パナソニック株式会社 ライフソリューションズ社 カウンセリングルーム 臨床心理士
- ・「神戸学院大学心理学研究」 論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

- ・大学院実習マニュアル WG
- ・広報担当

中村 珍晴（なかむら たかはる）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・健康心理学（健康・医療心理学）（医療心理学Ⅱ）
- ・心理学特論Ⅲ（医療心理学特論Ⅱ）
- ・人文科学入門B（共通教育）
- ・心理学入門実習Ⅳ（人間心理学入門実習Ⅱ）
- ・心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験）（心理学基礎実験実習Ⅰ）
- ・心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験）（心理学基礎実験実習Ⅱ）
- ・心理学入門演習Ⅰ（人文入門演習）
- ・心理学入門演習Ⅱ（人間心理学入門演習）
- ・心理学基礎演習Ⅰ（人間心理学基礎演習）
- ・心理学基礎演習Ⅱ（専攻演習Ⅰ）
- ・心理学発展演習Ⅰ（専攻演習Ⅳ）
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文（卒業論文）

[大学院]

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・学生広報チームの指導

3. 学外での教育活動

- ・天理大学 障害学 非常勤講師

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・Takaharu Nakamura (2021) The Effect of Hardiness on Stress and Quality of Life during the Preseason.15th International Society of Sport Psychology (ISSP 2021). A5-049. 2021年10月1日

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・「スポーツ心理学研究」論文査読
- ・「神戸学院大学心理学研究」論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「喪失と成長」（宝塚東高等学校主催 2021年7月15日 宝塚東高等学校体育館にて）
- ・「【デジタルの日記念セミナー開催】650名の障害者への調査から紐解く課題と合理的配慮の具体的施策」（株式会社ミライロ主催 2021年10月11日 オンライン開催）
- ・「ストレスは人を成長させる？」（明石南高校連携事業 2021年11月4日 明石南高校にて）
- ・「悲しみの先にあるもの」（精華南中学校主催 2021年11月30日 精華南中学校体育館にて）
- ・「喪失と成長」（大阪医療福祉専門学校主催 2021年12月6日 大阪医療福祉専門学校教室にて）
- ・「悲しみの先にあるもの」（狭山中学校主催 2021年3月16日 狭山中学校体育館にて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・ホスピタルフットボール協会 理事
- ・Global Innovation Challenge 2021 生活支援ロボットアワード 副委員長

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

- ・心理学部広報誌作成
- ・学術講演会企画運営

難波 愛 (なんば あい)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・心理学入門演習Ⅰ (人文入門演習)
- ・専門職心理演習Ⅰ (心理演習)
- ・専門職心理演習Ⅱ
- ・心理学基礎演習Ⅰ
- ・心理学専門演習Ⅰ (専攻演習Ⅱ)
- ・心理学専門演習Ⅱ (専攻演習Ⅲ)
- ・心理学入門実習Ⅳ

[大学院]

- ・心理支援に関する理論と実践
- ・心理実践実習Ⅰ
- ・心理実践実習Ⅱ
- ・心理実践実習Ⅳ
- ・心理実践実習B

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・大学院生に対するケーススーパービジョン

3. 学外での教育活動

- ・京都文教大学臨床心理学部 非常勤講師 (コミュニティ心理学)

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・難波 愛 (2021). コミュニティカフェにおける心理支援の可能性 —コミュニティアプローチの視点から— 神戸学院大学心理学紀要 Vol.3, No.2. pp.81-86.

3. 学会・研究会発表

- ・AJAJグループスーパービジョンでのケース発表 (2021/6/26, 2021/9/4, 2021/10/2, 2022/2/19)

4. その他

- ・兵庫県スクールカウンセラー
- ・兵庫県立加古川南高等学校キャンパスカウンセラー

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本遊戯療法学会 常任理事 広報委員長, 編集委員, 研修委員兼務
- ・『遊戯療法学研究』 論文査読
- ・『心理臨床学研究』 論文査読 協力員

2. 講演など

- ・「高校生のメンタルヘルス—充実した学校生活を送るために—」(兵庫県立高砂南高校「教育相談講演」講師 2021年4月15日)
- ・「プレ思春期の子どもへの関わり方—親の養育タイプ別アドバイス—」(加古川市立野口小学校「PTA家庭教育大学」講師 2021年10月25日)

3. セミナー・研修会等の講師など

- ・「体験から学ぶ遊戯療法の基礎—プレイルームでの立ち居振る舞いと応答—」(日本遊戯療法学会第26回大会ワークショップ 講師2021年5月2日於:龍谷大学 (Web開催))
- ・「体験から学ぶ遊戯療法の基礎—トラウマ・インフォームド・ケア—子ども理解と支援のために—」(加古川市立陵北小学校「令和3年度カウンセリングマインド研修会」講師 2021年7月28日)
- ・「体験から学ぶ遊戯療法の基礎—プレイルームでの立ち居振る舞いと応答—」(岡山県総合教育センター教育相談担当者研修会 2021年11月2日 於:岡山県総合教育センター)
- ・「コロナ禍における高校生のメンタルヘルス」(令和3年度県立学校保健部長会東播磨支部研修会 講師 2022年2月1日)

4. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・『神戸新聞』朝刊 明石版 女性と子どものための「明石みもぞ心理相談室(代表 難波 愛)」の紹介記事掲載 (2021/9/18)

5. その他

- ・神戸市教育委員会「尼崎市の中学校生徒死亡事案に関するいじめ問題調査委員会」委員 (委嘱期間:2019年11月29日~2021年11月28日)
- ・神戸市教育委員会「令和元年度に発生の神戸市立中学校生徒不登校事案に関するいじめ問題追加調査委員会」委員 (委嘱期間:2021年6月24日~2023年6月23日)

【大学運営】

1. 学内委員

- ・男女共同参画運営委員会
- ・ハラスメント防止委員会
- ・不正防止計画推進委員会
- ・IPE 運営委員会
- ・学生委員会
- ・国際交流支援委員会
- ・研究支援委員会
- ・利益相反マネジメント委員会
- ・学生の未来センター運営委員会

2. 学部内委員

- ・人を対象とする研究倫理審査委員

3. その他

- ・本学修了生との学校臨床に関する勉強会（オンライン, 2021/5/8, 2021/7/10, 2021/9/11, 2021/11/13, 2022/1/8, 2022/3/12）

岡村 心平（おかむら しんぺい）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・人格心理学
- ・家族心理学
- ・心理学入門実習Ⅱ
- ・心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験）（心理学基礎実験実習Ⅰ）
- ・心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験）（心理学基礎実験実習Ⅱ）
- ・心理学入門演習Ⅰ（人文入門演習）
- ・心理学専門演習Ⅰ（専攻演習Ⅱ）
- ・心理学発展演習Ⅰ（専攻演習Ⅳ）
- ・心理学発展演習Ⅱ（卒業論文）
- ・卒業論文

【大学院】

- ・心理学研究法Ⅱ
- ・心の健康教育に関する理論と実践

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・岡村ゼミ生対象 英文輪読会・心理学検定勉強会

3. 学外での教育活動

- ・関西大学人間健康学部 非常勤講師（「プロジェクト学習Ⅰ」「導入演習」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・岡村 心平（2021）. 山岳ガイドの身体性：「勘」の分析試論 関西大学東西学術研究所紀要 第 54 輯, p.201-221（査読有）
- ・中川 裕美・竹田 剛・越川 陽介・岡村 心平（2021）. コロナ禍のテレワークおよび仕事と家庭の境界管理がワーク・ファミリー・バランスに与える影響 産業・組織心理学研究 第 35 号 第 1 巻 pp.165-178（査読有）
- ・岡村 心平（2022）. 心の健康教育とメンタルヘルス・リテラシー：「予備」のレトリックからフォーカシングを捉え直す 神戸学院大学心理学研究 第 4 巻 第 2 号（印刷中）（査読無）

3. 学会・研究会発表

- ・押岡 大覚・押江 隆・岡村 心平・加藤 敬介（2021）. PCA は本当に絶滅危惧種なのか？日本人間性心理学会 第 40 回記念大会 自主シンポジウム（2021 年 8 月 28 日（土）17:30～19:30 オンライン開催）

4. その他

- ・岡村 心平（2021）. 書評『レジリエンスを育むフォーカシング』日本フォーカシング協会ニュースレター 第 24 巻 第 2 号 p.6-7
- ・岡村 心平（2022）. 書評 諸富祥彦著『カール・ロジャーズ カウンセリングの原点』人間性心理学研究 第 39 巻 第 2 号（印刷中）
- ・関西大学東西学術研究所 身体論研究班 客員研究員

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・神戸学院大学 健康科学助成金

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・Focus-A-Thon -Focusing with riddle-（The International Focusing Institute 主催 2021 年 9 月 26 日 11:00-12:00 オンライン開催）
- ・関西大学東西学術研究所 創立 70 周年記念シンポジウム「22 世紀の身体論とその経験～荒川＋ギンズ建築における使用法とその実践～」講師（関西大学東西学術研究所主催 2021 年 10 月 31 日 オ

ンライン開催)

- ・『今さら聞けない心理療法の基礎～知ってはいるけど…本当はよくわかっていない』を学ぶ～』第7回「フォーカシング」(大阪・京都こころの発達研究所 葉 主催 2021年12月26日 10:00-13:00 オンライン開催)
- ・『今さら聞けない心理療法の基礎～知ってはいるけど…本当はよくわかっていない』を学ぶ～』最終回「架空事例を各学派から見立てる」(大阪・京都こころの発達研究所 葉 主催 2022年1月30日 10:00-13:00 オンライン開催)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・夢ナビライブ2021 Web in Summer「上手に悩むために『実感』を活用しよう」講師(夢ナビ主催 オンデマンド動画配信 /zoom での質疑応答 2021年7月10日 オンライン開催)

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』査読
- ・神戸学院大学 心理臨床カウンセリングセンター カウンセリング担当教育職員
- ・神戸学院大学 教員免許更新講習 講師
- ・

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

- ・卒論委員

3. その他

- ・心理学検定担当
- ・学部実習マニュアル担当
- ・大学院実習マニュアル WG 担当
- ・実習助手担当

定政 由里子 (さだまさ ゆりこ)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・現代社会と心理学(共通教育)
- ・心理学特論Ⅱ(臨床心理学特論Ⅰ)
- ・心理学専門実習Ⅰ(発達・臨床・医療・社会心理学実習Ⅰ)
- ・心理学専門実習Ⅱ(発達・臨床・医療・社会心理学実習Ⅱ)

- ・心理学入門実習Ⅴ(医療心理学入門実習)
- ・心理学入門演習Ⅰ(人文入門演習)
- ・心理学基礎演習Ⅰ(人間心理学基礎演習)
- ・講読演習Ⅰ(臨床心理学演習)
- ・講読演習Ⅱ(医療心理学演習)
- ・心理学発展演習Ⅰ(専攻演習Ⅳ)
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文(卒業論文)

【大学院】

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・院生に対する質的研究の個別指導

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

- ・ヤブコ, M.D. (福井 義一監訳, 定政 由里子訳) (印刷中). 違いの分かるセラピスト 北大路書房 [Yapko, M.D. (2016). The Discriminating Therapist: Asking "How" Questions, Making Distinctions, and Finding Direction in Therapy. Yapko Publications]

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・夢ナビ講義 Video 講師
- ・夢ナビ研究室訪問(オンライン開催)
- ・教員免許状更新講習講師(オンデマンド講義)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・「神戸学院大学心理学研究」査読
- ・神戸市教育委員会 第三者委員会委員
- ・医療法人 篤友会 関西リハビリテーション病院
非常勤臨床心理士

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

- ・心理学部 学術講演会係
- ・心理学部広報誌 CoCo-Novis 担当

清水 寛之 (しみず ひろゆき)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・認知心理学 (知覚・認知心理学) (認知心理学Ⅱ)
- ・心理学入門実習Ⅰ (人間心理学入門実習Ⅰ) (オムニバス)
- ・心理学基礎実験実習Ⅱ (心理学実験) (心理学基礎実験実習Ⅱ)
- ・専門職心理実習Ⅰ (心理実習)
- ・専門職心理実習Ⅱ (心理実習)
- ・心理学入門演習Ⅱ (人間心理学入門演習)
- ・心理学基礎演習Ⅱ (専攻演習Ⅰ)
- ・心理学発展演習Ⅰ (専攻演習Ⅳ)
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・専門職心理演習Ⅲ (心理演習)
- ・卒業論文 (卒業論文)

[大学院]

- ・心理実践実習 A・B
- ・心理学演習Ⅰ・Ⅱ
- ・研究指導

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・Anderson, D., Shimizu, H., Liu, Y., & Grover, R. (2021). Psychological factors influencing the vividness and affect of visitors' recall of nostalgic life memories in museums. *Current Psychology*, 40, 3585-3595.
- ・清水 寛之 (2021). 記憶検査の成績予測の正確度と時間的展望の関係-改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) と時間的展望尺度 (ZTPI) による検討- 神戸学院大学心理学研究, 4, 3-14.
- ・毛 新華・清水 寛之・木村 昌紀 (2021). 中国の在留邦人における文化適応課題の検討- 一日中文化の相違点の認識に関する調査から- 神戸学院大学心理学研究, 4, 33-42.

3. 学会・研究会発表

- ・Anderson, D., Shimizu, H., & Massam, W. (2021). Retrospective, current and future perceptions of society among young and old Japanese adults. The 32th International Congress of Psychology (September 23, 2021, Prague)
- ・中田 英利子・富高 智成・向居 暁・清水 寛之 (2021). 失敗のエピソードに関する調査研究 (1) 日本教育心理学会第 63 回総会 (2021 年 8 月 21 ~ 30 日, オンライン開催)
- ・富高 智成・中田 英利子・向居 暁・清水 寛之 (2021). 失敗のエピソードに関する調査研究 (2) 日本教育心理学会第 63 回総会 (2021 年 8 月 21 ~ 30 日, オンライン開催)
- ・毛 新華・清水 寛之・木村 昌紀 (2021). 中国の在留邦人の文化適応課題に関する探索的調査 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1 ~ 8 日, Web 開催)
- ・清水 寛之 (2021). 記憶検査の成績予測の正確度と時間的展望の関係-改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) と時間的展望尺度 (ZTPI) による検討- 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1 ~ 8 日, Web 開催)
- ・富高 智成・中田 英利子・向居 暁・清水 寛之 (2021). 自己と他者における失敗エピソードの記憶 (1) 共起ネットワーク分析を用いた検討 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1 ~ 8 日, Web 開催)
- ・中田 英利子・富高 智成・向居 暁・清水 寛之 (2021). 自己と他者における失敗エピソードの記憶 (2) 大学生の年齢群別の対応分析 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1 ~ 8 日, Web 開催)
- ・向居 暁・富高 智成・中田 英利子・清水 寛之

(2021). 自己と他者における失敗エピソードの記憶 (3) 失敗の生起時期に関する分析 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1～8 日, Web 開催)

- ・中田 英利子・向居 暁・富高 智成・清水 寛之 (2021). 自己と他者における失敗エピソードの記憶 (4) 想起された失敗直後の感情価に関する分析 日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1～8 日, Web 開催)
- ・清水 寛之 (2022). 標準化された記憶検査における実際の成績と予測された成績の関係: 改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) とリバーミード行動記憶検査 (RBMT) による検討 日本認知心理学会第 19 回大会 (2022 年 2 月 28 日～3 月 1 日, オンライン開催)
- ・中田 英利子・富高 智成・向居 暁・清水 寛之 (2022). 自己と他者における失敗エピソードの記憶 (5) 想起された失敗直後の感情と思考に関する対応分析 日本発達心理学会第 33 回大会 (2022 年 3 月 5～7 日, Web 開催)
- ・山本 晃輔・楨 洋一・瀧川 真也・清水 寛之 (2022). 自伝的記憶特性質問紙 (AMCQ) 日本語版開発の試み (3) - 心理的 well-being 尺度, SNS を用いた妥当性の検討 - 日本発達心理学会第 33 回大会 (2022 年 3 月 5～7 日, Web 開催)

4. その他

- ・ファランダ, F. (清水 寛之・井上 智義 (監訳) 松矢 英晶 (訳)) 「恐怖」のパラドックス-安心感への執着が恐怖心を生む- ニュートンプレス
- ・ファン・デル・ステイッヘル, S. (枝川 義邦・清水 寛之・井上 智義 (監訳) 徳永美恵 (訳)) 人生を変える集中力の高め方-集中力が劇的に向上する 6 つの話- ニュートンプレス
- ・ファン・デル・ステイッヘル, S. (清水 寛之・井上 智義 (監訳) 藤井 良江 (訳)) 注意を操る心理学-一気が散ることだらけの現代で自分を保つには- ニュートンプレス

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「自己認知と状況認知に支えられたメタ記憶の機能に関する実験的検討」(研究代表者: 清水 寛之, 2017 年～2021 年度)
- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「企業博物館の多様なステークホルダーにおける博物館体験の長期記憶に関する研究」(研究代表者: 湯浅 万紀子, 2019 年～2022 年度)
- ・科学研究費補助金 挑戦的研究 (萌芽) 「記憶方略に及ぼすステレオタイプの影響に関する実験的検討」(研究代表者: 高橋 雅延, 2018 年～2021 年度)
- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「中国の在留邦

人の文化適応支援に関する心理学的研究」(研究代表者: 毛 新華, 2021 年～2024 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本認知心理学会 理事
- ・関西心理学会 顧問

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・日本心理学会第 85 回大会・公募シンポジウム「「思い出」を科学する-自伝的記憶研究の現在と未来 5-」(指定討論者, 2021 年 9 月 1 日～8 日, オンライン開催)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・大学基準協会 大学評価委員会大学評価第 38 分科会委員

【大学運営】

1. 学内委員

- ・学部自己点検評価委員 (心理学部自己点検評価小委員会座長)
- ・研究科自己点検評価委員 (心理学研究科自己点検評価小委員会座長)
- ・情報支援センター運営委員
- ・図書館運営委員
- ・IPE 運営委員

2. 学部内委員

- ・学部内自己点検評価委員
- ・「神戸学院大学心理学研究」編集委員
- ・「心理学マニュアル」編集委員

3. その他

なし

竹田 剛 (たけだ つよし)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・現代社会と心理学
- ・学校心理学 (教育・学校心理学) (学校心理学)
- ・教育相談

- ・教育心理学 (教育・学校心理学)
- ・心理学基礎実験実習 I (心理学実験) (心理学基礎実験実習 I)
- ・心理学基礎実験実習 II (心理学実験) (心理学基礎実験実習 II)
- ・専門職心理実習 II (心理実習)
- ・心理学基礎演習 I (人間心理学基礎演習 I)
- ・心理学発展演習 I (専攻演習 IV)
- ・心理学発展演習 II
- ・卒業論文 (卒業論文)

[大学院]

- ・心理実践実習 D (医療)

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・学部実習マニュアルの作成
- ・大学院実習マニュアルの作成

3. 学外での教育活動

- ・名古屋学芸大学大学院栄養科学研究科 非常勤講師 (「臨床心理学特論」「臨床心理学演習」)
- ・大阪大学大学院人間科学研究科 非常勤講師 (「臨床心理学特講 I」)
- ・臨床心理学系大学院修了生のスーパーバイザー

【研究活動】

1. 著書

- ・竹田 剛 (2021). ファシリテーターのための手引き 佐々木 淳 (監訳). <実践から内省への自己プログラム>体験的 CBT (pp. 27-38) 岩崎学術出版社

2. 論文

- ・中川 裕美・竹田 剛・越川 陽介・岡村 心平 (2021). コロナ禍のテレワークおよび仕事と家庭の境界管理がワーク・ファミリー・バランスに与える影響 産業・組織心理学研究, 35, 165-178
- ・竹田 剛 (印刷中). 摂食障害患者の自尊感情を向上する個人療法の開発と評価—実践事例を通して— 神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要, 15

3. 学会・研究会発表

- ・竹田 剛・藤本 千春・祖田 啓・木村 記子 (2021). 教職員の長時間労働の改善に向けた「校内チーム作り」の効果 第 62 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会 (2021 年 7 月 11 日 香川)
- ・竹田 剛・浜内 彩乃・星野 修一・鈴木 華子・日野 映 (2021). 心理職の「ゆるいつながりの場」をいかに構築するか—臨床実践から生活まで 素朴な感想を話し合えるオンラインサロン構想— 日本心理臨床学会第 40 回大会 (2021 年 9 月 5 日 オ

ンライン開催)

- ・竹田 剛 (2021). 調子のいい男たちの対決 第 14 回神戸心理臨床事例研究会 (10 月 22 日 兵庫)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 研究活動スタート支援「神経性過食症患者の自尊感情を向上する個人療法の開発と評価」(研究代表者: 竹田 剛, 2018 年~2021 年度)
- ・科学研究費補助金 若手研究「摂食障害予防教育に関するゲーミング教材の開発と評価」(研究代表者: 竹田 剛, 2020 年~2023 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本認知療法・認知行動療学会 『認知療法研究』非常勤編集委員
- ・日本摂食障害学会 評議員
- ・日本摂食障害協会 フェロー

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・指導教員等連絡協議会研修 (大阪府教育センター主催 2021 年 4 月 オンライン)
- ・校長等連絡協議会研修 (大阪府教育センター主催 2021 年 4 月 オンライン)
- ・「ストレスに負けない心の整え方」(大阪メンタルヘルス総合センター主催 2021 年 7 月 オンライン)
- ・「今さら聞けない心理療法 ブリーフセラピー」(こころの発達研究所 葉 主催 2021 年 11 月 14 日 オンライン)
- ・「もしかして“うつ”?—こころやからだの不調をこじらせないために—」(大阪メンタルヘルス総合センター主催 2021 年 12 月 オンライン)
- ・「今さら聞けない心理療法 架空事例を各学派から見立てる」(こころの発達研究所 葉 主催 2022 年 1 月 30 日 オンライン)
- ・「他者評価懸念に対する認知行動療法」(こころの発達研究所 葉 主催 3 月 オンライン)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「依存社会 摂食障害 (仮題)」(『神戸新聞』 1 月)

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』 査読
- ・社会医療法人弘道会なにわ生野病院心療内科 非常勤臨床心理士

- ・社会医療法人弘道会なにわ生野病院心療内科 実習指導者
- ・大阪メンタルヘルス総合センター 非常勤臨床心理士
- ・世界摂食障害アクションデイ 2021 運営スタッフ

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

- ・卒論委員

3. その他

- ・心理学検定担当
- ・入学前課題担当

山本 恭子 (やまもと きょうこ)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・社会心理学 (社会・集団・家族心理学) (社会心理学Ⅰ)
- ・感情心理学 (感情・人格心理学) (対人心理学Ⅱ)
- ・心理学入門実習Ⅰ (人間心理学入門実習Ⅰ) (オムニバス)
- ・心理学基礎実験実習Ⅰ (心理学実験) (心理学基礎実験実習Ⅰ)
- ・心理学入門演習Ⅰ (人文入門演習)
- ・心理学入門演習Ⅱ (人間心理学入門演習)
- ・心理学基礎演習Ⅱ (専攻演習Ⅰ)
- ・心理学発展演習Ⅰ (専攻演習Ⅳ)
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文 (卒業論文)

[大学院]

- ・心理学研究法Ⅰ
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・ Yamamoto, K., Kimura, M., & Osaka, M. (2021). Sorry, not sorry: Effects of different types of apologies and self-monitoring on non-verbal Behaviors Frontiers in Psychology 12 doi:10.3389/fpsyg.2021.689615

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「対人感情制御における感情表出の機能的役割の解明」(研究代表者: 山本 恭子, 2021 ~ 2024 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本感情心理学会 Emotion Studies 編集委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「コミュニケーションの心理学：With マスクでも気持ちを伝えるために」(しあわせの村 健康倶楽部 健康増進セミナー 2021年12月4日 しあわせの村野外活動センターあおぞらにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・「神戸学院大学心理学研究」 論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

- ・入学センター委員
- ・入試総務委員
- ・法人設置学校連絡調整委員
- ・就職委員
- ・キャリア教育センター委員

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員

・卒論委員

3. その他

・広報担当

「神戸学院大学心理学研究」投稿規程

2018年4月1日

制定

改正 2018年12月5日

改正 2019年6月5日

第1条（目的）

神戸学院大学心理学部における教育・研究成果の発表を目的として、「神戸学院大学心理学研究」（以下「心理学研究」という）を発行する。

第2条（編集等の機関・原稿の採択）

1. 心理学研究の企画、原稿の募集及び編集は、心理学研究編集委員会（以下「委員会」）が行い、掲載可否の権限および編集責任をもつ。
2. 委員会は、心理学部専任教員および実習助手から4名で構成され、委員長は互選とする。

第3条（執筆者の資格）

1. 本誌に論文を投稿できる者は以下の通りとする。
 - (1) 心理学部専任教員
 - (2) 心理学部実習助手
 - (3) 心理臨床カウンセリングセンター職員（インターナショナル・心理カウンセラー）
 - (4) 人間文化学研究科の心理学関連の専攻及び講座の学生
 - (5) 心理学研究科の学生
 - (6) 心理学部教授会の承認を得た者
2. 共著執筆論文の投稿については、筆頭執筆者が(1)～(6)のいずれかである場合に限る。(1)～(6)以外の者も、第2著者以下であれば、共著者となれる。(4)(5)については、専任教員を共著者に含める。

第4条（原稿の要件）

心理学研究に執筆する原稿の要件は、次の各号のとおりとする。

- (1) 他誌に未掲載であり、かつ本誌以外に投稿をしていない論文であること。
- (2) 完成原稿であること。
- (3) 原稿の種類は次のいずれかに該当するものであること。
 - ①原著論文：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。
 - ②研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての研究報告、速報性を重視した研究報告、萌芽的発想に立つ報告。査読無。
 - ③海外研究・国内研究報告

- ④人間文化学研究科の心理学関連の専攻及び講座の修士・博士論文の要約
- ⑤心理学研究科の修士・博士論文の要約
- ⑥心理学部優秀卒業論文
- ⑦教員の活動実績（研究実績、教育実績、社会貢献、競争的研究資金獲得実績、大学運営）
- ⑧今年度の主な行事
- ⑨その他、紀要の編集上必要と認められるもので、心理学部教授会の承認を得たもの

第5条（審査）

原著論文は、専門家による3人（神戸学院大学心理学部専任教員より1人以上、学外より1人以上）のレフェリーを設け、その査読の結果をもとに、委員会において採否を決定する。

第6条（倫理的配慮）

論文の内容は、研究対象者や被験体の保護を含め、倫理的配慮が必要である。原稿は、神戸学院大学研究倫理綱領および公益社団法人日本心理学会倫理規程に則ること。

第7条（原稿の形式）

原稿は、別に定める「神戸学院大学心理学研究投稿細則」によるものとする。

第8条（発行）

心理学研究は、年2回の発行とし、各年度の原稿募集・投稿期限・発行日は委員会が決定し、公表する。

第9条（校正）

校正は、2校までとする。その際、大幅な修正は原則として認めない。

第10条（公開方法）

心理学研究の目次および掲載論文等は、原則として心理学部のホームページ及び神戸学院大学機関リポジトリで公開する。

第11条（著作権）

掲載された論文の著作権は神戸学院大学心理学部に帰属する。

第12条（改廃）

この規程は、心理学部教授会の議を経て改正することができる。

【附則】

本規程は2018年4月1日から施行する。

【附則】

本規程は2018年12月5日から施行する。

【附則】

本規程は2019年6月5日から施行する。

「神戸学院大学心理学研究」投稿細則

2018 年 4 月 1 日
制定

改正 2020 年 2 月 21 日

第 1 条

投稿を希望するものは以下の諸要項にそって、MS Word で作成した原稿を電子メールで「神戸学院大学心理学研究」編集委員会（以下「委員会」という）に送付すること。

第 2 条 論文の種類と原稿枚数

1. 原著論文：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。掲載時、A4 ダブル・カラム 15 ページ以内。
2. 研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての研究報告、速報性を重視した研究報告、萌芽的発想に立つ報告。査読無。掲載時、A4 ダブル・カラム 10 ページ以内。

原稿枚数は、表題、著者名、所属機関名、要約とキーワード、本文、引用文献、脚注、図表、付録などすべてを含め、論文種類ごとの規定ページ内におさめる必要がある。

第 3 条 論文の形式

1. 提出原稿は A4 用紙を縦に用い、各ページは、上下、左右に 3 cm 以上の余白を取り、30 文字×40 行（1200 字）とし、10.5 ポイント以上のサイズの文字を用いる。
2. 英文は、一般的フォントおよび 10.5 ポイント以上のサイズの文字を使用し、行間はダブルスペースとする。1 ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、20～23 行を目安とする。
3. 原稿には通しページを付ける。
4. 要約は日本語、英語どちらでも構わない。和文は 400 字程度、英文は 100～200 語とする。
5. 原稿作成上の規定や表記法、文献の引用などについては、日本心理学会の「執筆・投稿の手びき（2015 年改訂版と追加修正）」を参照のこと。

第 4 条 提出様式

投稿にあたっては、以下のものを委員会に電子メー

ルで送付する。

1. 表紙（投稿区分、表題、著者名、連絡先、3 ないし 5 つのキーワード）
和文原稿の場合は、論文題目の欧文訳と著者名のローマ字表記を併記すること。
2. 本文
3. 引用文献
4. 要約
5. 表・図
6. 図のキャプション

第 5 条 査読の手続き

1. 査読者の選定
委員会は査読者 3 名を選定する。
2. 査読者による査読
受稿論文は査読者 3 名に、著者情報を伏せて依頼され、査読される。査読者名は著者には公表されない。
3. 査読者による判定
査読者による評価に基づき、判定が行われる。
 - i) このままで掲載してよい
 - ii) 掲載してよいが、意見を助言する
 - iii) 意見に基づき訂正すれば、掲載する
 - iv) 掲載しない
4. 論文の改稿
受稿論文は、査読者のコメントを付けて、期限つきで改稿を求められる。
5. 改稿論文の確認
著者によって修正・加筆され再提出された改稿論文は、委員会が確認する。論文によっては、再度査読され、修正が求められる場合もあり得る。
6. 掲載、不掲載の決定
掲載、不掲載は、すべての査読者からの評価が得られた後、委員会が掲載、不掲載を判定する。

第 6 条

この投稿細則は、心理学部教授会の議を経て改正することができる。

附則

この投稿細則は、2018 年 4 月 1 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2020 年 2 月 21 日から施行する。

神戸学院大学心理学研究 第4巻 第2号
Kobe Gakuin University Journal of Psychology,
Volume 4, Number 2

発行日 2022年3月25日
編集委員 小久保 香江 河瀬 諭
清水 寛之 長谷 和久
編集事務 心理学部長室
発行者 神戸学院大学心理学部
所在地 〒651-2180
神戸市西区伊川谷町有瀬 518
TEL : 078-974-1551
URL : <http://kobegakuin-psy.jp/>
制作 交友印刷株式会社
〒650-0047
神戸市中央区港島南町 5 丁目 4-5

